2024

研究紀要

第39号

SENDAI IKUEI GAKUEN

秀光中学校
仙台育英学園高等学校

巻　頭　言

秀光中学校
仙台育英学園高等学校
校　長　**加　藤　雄　彦**

2023年５月、WHOが新型コロナの緊急事態を解除しました。危機対応が３年以上続いた新型コロナは、他の感染症と同様に「管理」していくものとなったのです。国内においても感染法上の分類が「５類」に引き下げられ、政府と地方自治体による様々な行動制限がなくなり、療養や感染防止のあり方は基本的に個人の判断に任されるようになりました。

本学園においても感染防止のために行ってきたZoomでの授業も、平時は対面授業へと完全移行しました。今年度は「育英祭」をはじめ、生徒主催の学校行事も５年ぶりに通常開催としました。部活動においては、硬式野球部が２年連続で夏の甲子園大会決勝に出場し、大きな感動を得ました。さらに、４名の生徒がWBSCのU18ベースボールワールドカップのメンバーに選出され、本学園の名を高めてくれました。他にも全国高校駅伝大会での女子準優勝、書道部の全国高等学校書道パフォーマンスグランプリ決勝大会の３連覇を始め、今年度も多くの運動部、文化部が素晴らしい活躍を披露してくれた１年でした。

さて、本校職員による研究・研修内容をまとめた「研究紀要」は、今回で第39号を数えます。これまで研究紀要に掲載した研究・研修の巻末の総目録によって紹介しております。内容は、分野ごとの授業研究に始まり、国際化教育の提案、海外研修や語学研修など多岐にわたっており、仙台育英学園の教育を真摯に支えてきた先人の先生方の教育に対する熱意が十分に伝わるものです。

今回寄稿された先生方の報告内容を見ますと、トピックとして今年度開校した仙台育英学園沖縄高等学校の設立の意義と特徴的な取り組み、情報科学コースと交流がある東京都市大学准教授の森朋子氏が情報科学コースの生徒と取り組んだ「シビック・アクションの実践」が紹介されています。研究報告においては、外国語コース１年生と留学生が、「仙台ロータリークラブ」「東北緑化保全㈱」「日本雁を保護する会」と共同で取り組んでいる「シジュウカラガン復活プロジェクト」、本校教員が仙台大学大学院で学んだ研究内容の報告、各教科によるブラッシュアップからの研究報告、今年度開校した沖縄高等学校からは、「コンピテンシー測定ツール」を活用し生徒の能力を最大限に生かすことで「生きる力」を育む学習指導の取り組みの実践、ILC沖縄からは、「沖縄市役所」などの他機関と連携した探究学習のプログラム報告など、多岐にわたる本学園ならではの特色ある取り組みを見て取ることができます。また、研修報告では、秀光コースのカナダ研修、外国語コースのハワイ研修を始め、情報科学コースの沖縄高への視察をなど各コースからの研修旅行の報告も寄せられました。

今後も本学園の教育活動が、新しい時代の教育に一石を投じられるよう一層研究・研修を重ね、仙台育英学園の信頼をさらに高めるよう努力していきたいと思います。

研究紀要39号

巻　頭　言 …… 加藤　雄彦

トピック

(1) 仙台育英学園沖縄高等学校について
…… 仙台育英学園沖縄高等学校　庄司　昌弘 …… 1

(2) 情報科学コースの取り組み「情報科学コースが宮城を変える」
…… 東京都市大学准教授　森　朋子 …… 5

Ⅰ　研究報告

(1) 情報科学コース
「学校設定科目プログラミング授業について」 …… 情報科学コース　高橋　良太　日野　彰 …… 9

(2) シジュウカラガン復活プロジェクト報告 …… 外国語コース　布施　莉彩 …… 14

(3) 仙台大学大学院での授業報告 …… 英進進学コース　田辺　巧 …… 19

(4) ICT を活用した授業について …… 英進進学コース　及川　まり …… 24

(5) 主体的な学びの支援ツールの有効性と数学の授業展開の研究
…… 技能開発コース　舘　和廣 …… 28

(6) 教員１年目の実践と展望 …… 特別進学コース　佐藤　宏成 …… 46

(7)「IBDP における ICT を活用し主体的学習を重視した授業実践」
…… 社会科コンダクター　小松　敦 …… 50

(8) 令和５年度数学科ブラッシュアップ研修・研究授業報告
…… 数学科コンダクター　牛来　生人 …… 59

(9) 令和５年度　ILC 沖縄　e フレックスコース　探究学習プログラムの報告
…… 広域通信課程　ILC 沖縄　與那城慧太 …… 62

(10) コンピテンシー測定ツール「Ai GROW」の活用事例
…… 仙台育英学園沖縄高等学校　栗本　崇雅 …… 70

Ⅱ　令和５年度　研修報告

外国語コース
第１年次　ハワイ研修 …… 鈴木　杏子　川村くるみ …… 74

情報科学コース
第３年次　沖縄研修旅行 …… 菅　光朗 …… 80

英進進学コース
第３年次　沖縄研修旅行 …… 八代　杏里 …… 83

フレックス・技能開発コース
第３年次　沖縄研修旅行 …… 小原沙希子 …… 89

秀光コース２・１学年、秀光中学校３学年
カナダ研修報告 …… 秀光中学校 3S1 担任　伊藤　沙絵 …… 93

Ⅲ　その他

総目録（第１～38 号）

編　集　後　記

トピック

仙台育英学園沖縄高等学校について

仙台育英学園沖縄高等学校　　庄司　昌弘

１．はじめに

「なぜ、沖縄に仙台育英が？」という背景については、オープンキャンパスの冒頭の挨拶や様々なお客様が施設見学をされる中で、加藤聖一校長先生が自ら原体験を元に直接お話されております。そのストーリー性と迫力は、納得感に加えてILC沖縄を含めた仙台育英学園沖縄高等学校の絶大なるファンに切り替わるのを、聞いている皆様の様子からおおよそ判断することができます。ここでその全てに触れることは叶わず、紙面の都合上で制約があると同時に、やはり直接お話しを聞いていただくことが何よりであるとご了承ください。強いて挙げるとすれば、東日本大震災の復興への邁進と沖縄の懐の深さ、そしてその沖縄が抱える教育と産業の問題、ということになりますでしょうか。高校中途退学率ならびに高校進学率のワースト県、基地と観光がメインの産業構造、世帯年収と教育の負の連鎖。加藤雄彦理事長校長先生は、これらの課題に対して、2014年広域通信制課程ILC沖縄を設立、さらに2023年全日制課程普通科『仙台育英学園沖縄高等学校』を設立することに至ります。コザミュージックタウンで間借りしていたスクーリング会場から、ほどなく近い胡屋十字路に2022年３月栄光校舎が落成。コンパクトでありながら、ICT室や家庭科室、理科室、図書室、体育実習室などが完備されたフルスペックの新校舎で、まずはILC沖縄の生徒が学習を進め、順次全日制課程の募集を進めていくことなりました。

２．仙台育英学園沖縄高等学校の概要

沖縄に在住しながらも内地（特に東京経済圏）の仕事が出来るIT産業。そこで本来のICT（Information, Communication, Technology）に、もう一つの本校独自の意味を持たせたICT（Independence, Chance, Try）をテーマとして、Society5.0にある世界観の中で情報技術によって生まれる新しい絆（ゆいまーる）を育めるICTエンジニアとなり、生活信条七箇条を標榜しながら在学中と卒業後に自立できるよう、【人間性（U-Lions）】と【学びに向かう力（U-ICT）】を修得に向けた教育を行うことが大きな支柱となっています。

※U=Uchina（うちなー）　※学力＝学びに向かう力

加えて、基礎的な学力の養成に向けた授業、ICT関連の資格取得に対応した学校設定科目の設置、学外組織（企業・大学・専門学校・地域組織）と連携した起業家教育ができるカリキュラム設定・環境整備を行っています。これらを通じてICTエンジニアを育成し、ICT分野で起業・就職するなどで経済的に自立できるよう指導。その過程において進学が必要と生徒が意思決定した際には、ICT関連の国内外大学・専門学校への進学指導を念頭に、「進路決定者100％」を必達目標とし、かつ就職・起業・進学希望者の「希望進路達成率100%」を目標としています。

３．仙台育英学園沖縄高等学校の特徴的な取り組み

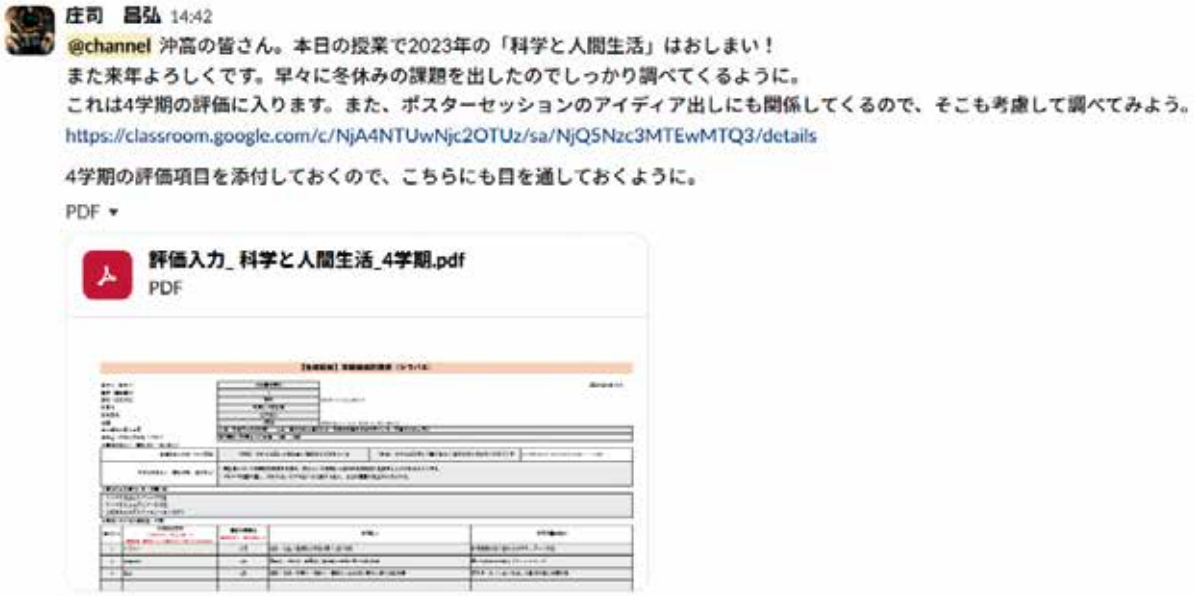
■評価期間

考査点だけではなく、評価期間（14日間前後）を通して課題・小テスト・プレゼンテーション・グループワーク・ポスターセッションなど様々な観点から評価を行っています。瞬間的な記憶力や知識を測ることに重点を置くのではなく、主体的な取り組みや思考力・判断力・表現力の観点別評価の視点を確実に取り入れた評価方法を取り入れています。また、１～４学期毎に仮評定・欠時数超過をフォローアップすることで、４学期での取りこぼしが無いように努めています。

〈４学期評価期間の時間割〉

■<u>シラバスと評価観点の作成と提示</u>

学習における目標・内容と評価の一致のために、「シラバス」「総括的評価に用いる課題の評価観点・ルーブリックを明示した資料」を単元・授業・評価の実施前に生徒に対して事前に公表しています。さらに目標設定（状態・成果・行動）と振り返り（Good、Bad、Next）を意識させ実施しています。



〈Slack による生徒への評価観点の提示（科学と人間生活）〉

■<u>個別最適学習ならびに単元内自由進度学習（実証研究中）</u>

２年次以降においては、必履修科目の数学・英語を中心とした各教科でも上記を積極的に取り入れ、スタディサプリを活用しながら実践することが決まっています。特に、単元内自由進度学習については、学力差が大きいクラス単位での効率的且つ生徒にとって満足度の高い授業の展開を実証研究しています。

■**学び方を学ぶ**

生徒自らが学びそのものを自走できるように、様々な取り組みを行っています。授業展開についても、１対多数の講義型よりもリサーチスキルを養成するようなグループワークやプレゼンテーションを多用し、対話やコミュニケーションを重視した授業となっております。また、毎週火曜日に教職員による「学び方を学ぶ研修会」を実施。各教科担当の取り組みを横断的に共有することで、生徒に還元するようにしています。

■**「iUP」と総合的な探究の時間**

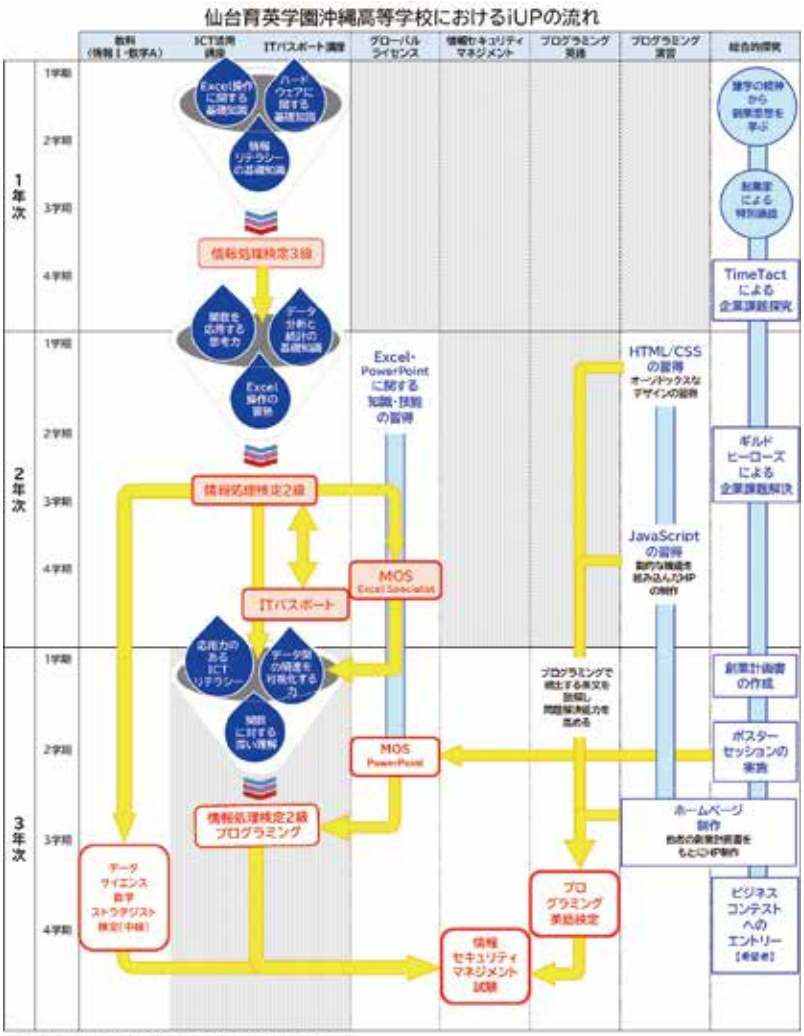
「i」である私が、I-LIONに向かって目標を見定め、Career Upすること、そしてアドミッションポリシーにも掲げている「Uchina Promotion」できる取り組みを総称して「iUP」としています。実例として、起業家の特別講演会、企業へのインターンシップ、大学学部研究、企業と連携した課題解決講座、金融機関によるワークショップ、創業計画書の作成、業務を請け負う形でのHP制作など、資格取得を絡めながら３年間を見通した起業家教育プログラムを構築しています。

■**習得できる言語・資格取得・検定**

言語：HTML、CSS、JavaScript

資格：情報処理検定２級（ビジネス情報・プログラミング）、ITパスポート、
MOSスペシャリスト（Excel、PPT）、情報セキュリティマネジメント検定、
プログラミング英語検定、データサイエンス数学ストラテジスト検定

これらの資格取得については、学年進行で計画されており体系的に取り組むことができるようになっている。



■MOS(MicrosoftOfficeSpecialist)は、MOS2019で実施
■2年次までの資格取得、技能習得をコアコンピタンスとして定義

資格取得における モデルケース
1年次・・・情報処理検定3級
2年次・・・情報処理検定2級/ITパスポート/MOS Excel Specialist
3年次・・・情報処理検定2級プログラミング/MOS PowerPoint/情報セキュリティマネジメント
プログラミング英語/データサイエンス数学ストラテジスト中級

■最低保証として定義される資格：卒業時点において情報処理検定3級・情報処理検定2級・MOS Excel Specialist

■校納金に含まれる資格
情報処理検定3級/情報処理検定2級/情報処理検定2級プログラミング/MOS Excel Specialist/MOS PowerPoint
ITパスポート/情報セキュリティマネジメント試験/データサイエンス数学ストラテジスト検定

■自己負担にて任意受験可能
情報処理検定1級ビジネス情報/情報処理検定1級プログラミング/プログラミング英語検定
MOS Word Specialist/MOS Word Expert/MOS Excel Expert

■**関係機関との協定・連携・協力体制**

株式会社ギルドヒーローズ、株式会社ベリサーブ沖縄、沖縄振興開発金融公庫、宮城大学事業構想学群、iU情報経営イノベーション専門職大学、ISCO（沖縄ITイノベーション戦略センター）、Lagoon KOZA（コザスタートアップ商店街）【順不同】など、様々な関係機関と協定や連携をしており、さらに今後もお力添えをいただくことになっております。

■**BLENDによる出欠管理システム運用と生徒・保護者との情報共有**

沖縄高等学校では、BLEND（モチベーションワークス株式会社）を採用しており、成績などの機微情報以外をクラウド管理しています。実質的にはClassiと機能的には変わりなく、外部模試などを行っていない沖縄高等学校では実験的に使用している側面もあります。一方で、WEB出願システムや調査書印刷、保健管理などの機能も既に実装されていることが確認できており、入口や出口のところまでが一気通貫に出来ることが魅力の一つとなっています。

■**Ai GROWによるコンピテンシーの測定**

Ai GROW（IGS株式会社）により、生徒自身の資質・行動特性を測定することで、自身の自己肯定感や成績とは異なる成長の度合いを振り返ることが目的となっています。定量化された資質・行動特性は三者面談や二者面談でのフィードバック、進路における推薦文や調査書、指導要録の作成に至るまで、様々な利活用が見込まれています。また、どの特性を伸ばしたいのか、どうすれば伸びるのかなどのセルフコーチングによりメタ認知を高め、希望進路達成に繋がることも期待しております。

※本校栗本教諭による実施報告あり（P70参考）

4．謝辞（中締めに代えて）

以上のように、2024（令和６）年度 教育方針を一部引用させていただきながら、取り組み内容を羅列させていただきました。栄光校舎の竣工を含めた仙台育英学園沖縄高等学校の認可に至るまで、加藤雄彦理事長校長先生、加藤聖一校長先生の甚大なる情熱とご尽力あってのことと、心より敬服いたすと同時に感謝申し上げます。引き続き2024年度には「勝連運動場」の竣工が控え、2025年度には沖縄高等学校が３学年揃っての運営となります。何卒よろしくお願い申し上げます。

さて、この後は『コンピテンシー測定ツール「Ai GROW」の活用事例』として、沖縄高等学校で進路担当の栗本崇雅教諭から報告があります。上述のように、沖縄高等学校では報告事例やコンテンツが目白押しになっており、年度をまたいでの研究紀要が予想されます。それ故、こちらで中締めとさせていただきますこと、どうぞご了承いただければと存じます。

情報科学コースの取り組み「情報科学コースが宮城を変える」

東京都市大学准教授　　森　　朋子

東京都市大学准教授　　森　朋子先生

今回の連携は，情報科学コース阿部前教頭が社会構想大学院大学荒木教授と交流があったことから、東京都市大学准教授森朋子先生をご紹介いただいたことが発端です。荒木先生はこの教育プログラムを開発したメンバーのお一人で、森先生がプログラムを実践できる高等学校を探していたところに本校をご紹介いただき、交流がスタートしました。本校としては情報科学コース１学年の総合的な探究に助言をいただき、森先生が関わる大学のシンポジウムに発表校として参加するというプログラムで連携事業を実施しました。

◎ 経　歴：
東京都市大学環境学部環境経営システム学科　准教授。博士（環境学）。東京大学大学院新領域創成科学研究科博士後期課程修了。㈱三菱総合研究所、国立研究開発法人国立環境研究所等を経て、現職。

◎ 主な研究テーマ：シティズンシップ教育，資源循環政策

１．取り組みの背景

環境問題、貧富の格差、ジェンダー問題…。私たちの社会には様々な問題が山積している。こうした社会課題には、問題を引き起こしている社会のルールを変えたり、新しい仕組みを創ったりしなければ根本的に解決できないものが少なくない。従来多くの学校で実践されてきた教育プログラムでは，個人が日常生活の中で実践する「良い行い」を促進することに主眼が置かれていたが，一方で社会の仕組みやルールを変えるためには、個人でのアクションだけでなく，他者と協働し、社会に積極的に働きかけるアクションを多くの人が実践することが重要である。こうした集団×能動的なアクションは，欧米ではシビック・アクションと呼ばれており，例えば、地域で新しい仕組みを創るために関係者と話し合いをする、法制度や商習慣を変えてもらうために集団で意見を表明する（署名活動、デモなど）、問題解決に取り組む団体を組織する、そんな組織を寄付などで応援するといったアクションが挙げられる。

今年度，東京都市大学森研究室と仙台育英高等学校情報科学コース１年が協働で実施したのは，生徒がこうしたシビック・アクションの重要性を知り，情報科学コースならではの「デジタルの力」を活用してアクションを実践できるようになることを狙いとした，新しい探究学習である。本稿では実施した本プログラムの背景にある研究理論を説明するとともに，2023年度の教育実践を報告する。

２．シビック・アクションを促進するための要件とモデルプログラム

「問題解決のためにシビック・アクションを実践してみよう」という人の気持ちには、どんな要因が影響しているのか。東京都市大学森研究室を代表とする研究チームでは，この謎を解き明かすために様々な調査を行い，以下のようなことが分かってきている１）。

■問題に対する危機感や個人の責任感を煽ってもあまり意味がない

「問題を解決しないと大変なことになる」という危機感や、「自分がなんとかしなければ」という責任感を煽っても、シビック・アクションの促進にはあまり繋がらないことが分かってきた。それよりも、対象となる問題への関心を高め、問題解決に向けた多様なアクションの種類や、シビック・アクションの重要性を知ることのほうが、アクションの促進に良い影響を及ぼすようである。

■個人のアクションを重視しすぎるとシビック・アクションへの意欲が落ちる

「個人でできるアクションを地道に実践していれば、問題は解決するだろう」という認知は、他者と協働するシビック・アクションを重要だと思う気持ちを引き下げ、ひいてはシビック・アクションへの意欲そのものも下げることが分かってきた。

■アクションの経験は大事、その経験への満足感はもっと大事

過去にシビック・アクションに類似する行動を実践した経験が豊富な人ほど、将来のシビック・アクションに対して前向きであることが分かってきた。　しかし一方で，過去に学校や地域でシビック・アクションを経験したものの，その結果に不満を抱いた人は，これまでに一度もシビック・アクションを経験したことが無い人よりも，将来のシビック・アクションへの意欲が低いことも分かってきた。

以上の調査結果を踏まえ，シビック・アクションを促進する教育プログラムの要件を以下のように設定した。

- ✓ 多様なシビック・アクションを認識できるようにすること。
- ✓ シビック・アクションに挑戦してみたいというモチベーションを高めること。
- ✓ 幅広いシビック・アクションの中から、問題解決に効果的で、かつ学習者にとって実行可能なアクションを戦略的に選ぶプロセスを重視すること。
- ✓ 学習者が学びやアクションの主導権を持つこと。
- ✓ アクションの成功・失敗を問わず、実践してみたシビック・アクションを丁寧に検証・フォローし、次のアクションに繋げること。

図１は，上記の要件を盛り込んだモデルプログラムである。

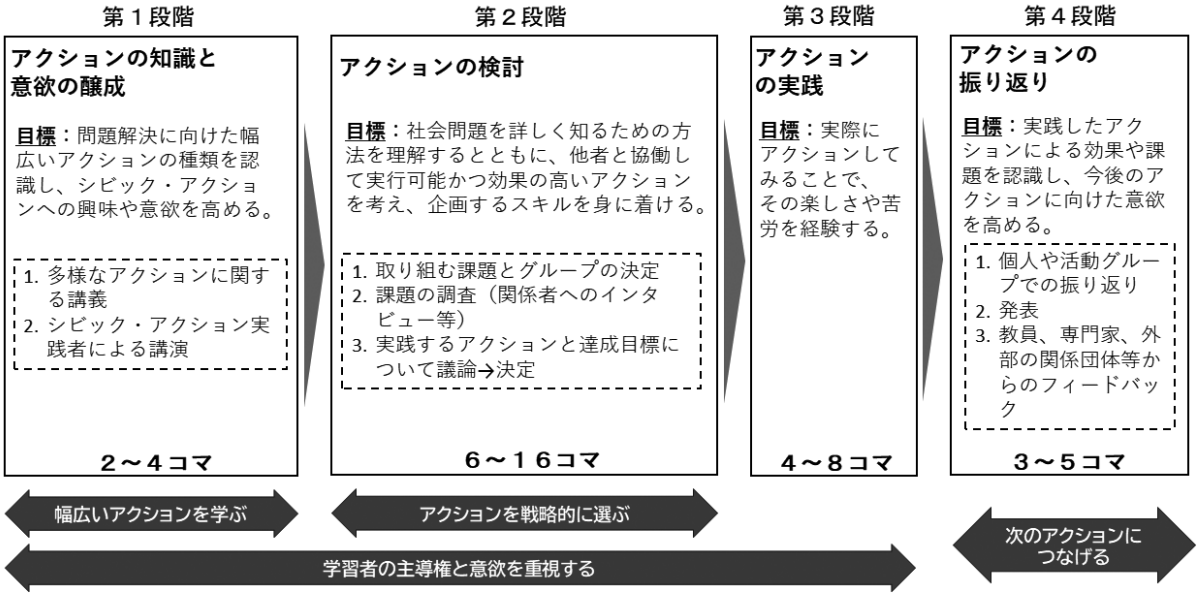


図１　モデルプログラム全体の流れ

３．情報科学コースにおける2023年度の概要

２章で述べた理論に基づき，2023年度10月から情報科学コース１年生を対象に本プログラムを展開した。総合的な学習の時間が限られていたことから，2023年度は図１に示したモデルプログラムのうち，アクションの知識と意欲を醸成する第１段階と，アクションの検討から提案までを行う第２段階の途中までを実施し，それ以降のプログラムについては2024年度以降に展開することとした。

第１段階では，東京都市大学の森が講師として多様なアクションに関する講義をオンラインで行った。この講義では，社会課題の対策には表面に見えている問題を緩和する対処療法的な対策と，問題を引き起こしている仕組みやルールを改める根本治療的な対策の２種類があることを説明したうえで，前者の対策は１人でもできるが社会に与えるインパクトは小さく，後者の対策は他者との協働が必要で時間と労力がかかるものの，社会に与えるインパクトは大きいという特徴を解説した。

第２段階では，生徒が６～８人のグループの別れ，各グループで取り組みたい宮城県内の地域課題について議論を行った。取り組む地域課題が決定したグループは，その問題について深く理解するため，用意されたヒントシートを基に調べ学習を行った。さらに対象とした地域課題について一定の理解を得たところで，その問題の解決に資するアクションをグループで議論した。この際，①できるだけ多くの人を巻き込むインパクトの大きいアクションであること，②アプリやウェブサイト等といったデジタル技術を活用したアクションであることを条件に，実践したいアクションを生徒が考えた。アクションの具体的な効果や実施方法については，企画書を作成する形式でまとめを行った。

図２　グループでの議論の様子

４．学内での最終審査と東京での発表

各グループで取り組む地域課題とそれに対するアクションアイデアをとりまとめ，2023年12月にコース内での発表会および審査会を行った。その結果，以下の８グループが優秀グループとして選出された。

表１　選出された優秀８グループ

	対象とする課題	提案アクション
1	海のマイクロプラスチック	リサイクルしたプラスチックの重さによってポイントが貰え、そのポイントに応じて特典と交換ができるアプリを開発する。
2	仙台市のハザードマップ	安全な区域が見やすく，GPSとも連動したハザードマップアプリを開発する。
3	仙台市の食品ロス	購入した商品のレシート情報を読み込み，賞味期限が近付いたらアラート通知をするアプリを開発する。
4	宮城県内の河川における特定外来種	スマートフォンで撮影すると，その生物が在来種か外来種か判断できるアプリを開発する。
5	気仙沼湾の漁具に起因する海洋プラスチック	漁具の所有者を識別できるGPSやRFIDを開発し，アプリで管理できる仕組みを創る。

6	仙台市における通学経路の安全確保	子供と保護者が通学路の危険個所を把握できるアプリを開発する。
7	仙台市におけるごみのポイ捨て	市内のごみ箱の場所が分かるごみ箱マップのアプリを開発する。
8	宮城県のハザードマップ	地震が起きた際の危険個所がリアルタイムで把握できるハザードマップアプリを開発する。

2024年３月５日には，上記の優秀８グループが決勝プレゼンテーションを学内で実施し，最優秀グループとして表１の３「仙台市の食品ロス」をテーマとしたグループが選出された。このグループは３月24日に東京都武蔵野市で開催された第８回日本アクティブ・ラーニング学会全国大会に参加し，同大会の高校生探究学習会で発表を行った。

図３　日本アクティブ・ラーニング学会での発表の様子

５．まとめ

2023年度の情報科学コース１年では，他者と協働して社会に働きかけるシビック・アクションを学ぶことを目的に，探究学習を行った。プログラムを開始したばかりの時期は，グループで対象とする地域課題がなかなか決まらない，有効なアクションのアイデアが出てこない等，苦労していたグループもいくつか見られたものの，最終的にはすべてのグループから宮城県内の地域課題の解決を目指した意欲的なアクションが提案された。さらに特に優秀と審査された１グループは，東京での日本アクティブ・ラーニング学会で発表を行うことができた。

なお，このプログラムは図１に示した全体像のうち，まだ第２段階の途中までしか至っていない。今後，生徒が２年生，３年生と成長していく過程で，今回提案したアクションを単なるアイデアではなく，実際にアプリとして開発するところまで実践するのが目標である。引き続き本プログラムの成果と生徒の成長に期待いただきたい。

Ⅰ　研究報告

学校設定科目プログラミング授業について

情報科学コース　　高橋　良太
日野　　彰

Ⅰ　プログラミング授業（Python）について

仙台育英学園高等学校情報科学コースでは、「コミュニケーションツールとして自在に活用できるコンピュータ技術の習得」を目的としており、「デスクトップパソコン実習室での授業」さらに「１人１台のタブレットPC活用」と実習を重視した授業に力を入れてきました。そして、令和元年より学校設定科目プログラミングの授業においてPythonを用いたAI（人工知能）プログラミングを授業で実施してきました。Python導入の背景や目的、実際の授業での活用例、考察と成果等について、以下の通り述べていきたいと思います。

（１）導入背景

情報科学コースでは「情報社会のエキスパートを養成する」という教育目標を目指す方針もあり、現在第３次人口知能ブームに合わせ、生徒が社会人になった頃を見据え今後益々進展していくAI（人工知能）プログラミングを授業に取り入れ、活かせるような目的で取り入れました。

Pythonはオランダ人が開発したプログラミング言語で、英語のPythonはニシキヘビの意味でPythonのマスコットやアイコンに使われています。Pythonには高度な科学計算のためのライブラリ（便利なプログラムを再利用できる形でまとめたもの）があり、機械学習やディープラーニング（深層学習）のプログラミングを実践できます。そして、ファイルからデータベース、ネットワークなどの多岐にわたるライブラリがあり、さまざまな種類のアプリを開発することができます。初心者でも習得しやすい言語ですが、その一方で、高度なプログラミングも可能であり、自分の可能性を広げることができると思います。Pythonは、様々なものを作ることができるプログラミング言語で、以下のようなものが作れます。

Web情報収集	・Webページから情報を抽出したり、Webページを自動的に巡回したりするプログラム
作業効率化	・Excelの操作をプログラムで自動化することで、手作業でのデータ処理を大幅に削減できるプログラム
画像認識プログラム	・画像から顔や物体を検出したり、分類したりするプログラム
ゲーム制作	・初心者でも比較的簡単にパソコンゲームを制作することが可能
アプリ制作	・Tkinterなどを活用することで、デスクトップアプリの開発が可能

（２）研究目的・仮説

Pythonプログラミングで「生徒のプログラミング理解、実行力が身についたか、様々な分野に応用できるスキルの基礎は身についたか。」をテーマに検証しました。プログラミングはプログラミング言語を用いて、コンピュータにして欲しい作業を指示することです。プログラミングは間違っている場合は正しく動きませんが正しくプログラムが動いた時には大きな達成感があります。

学習指導予定進度表

コース	情報科学	科　目	教 科 書 名	週 時 数
学年	3	プログラミング	マイナビ出版　ゼロからやさしくはじめるPython入門	2

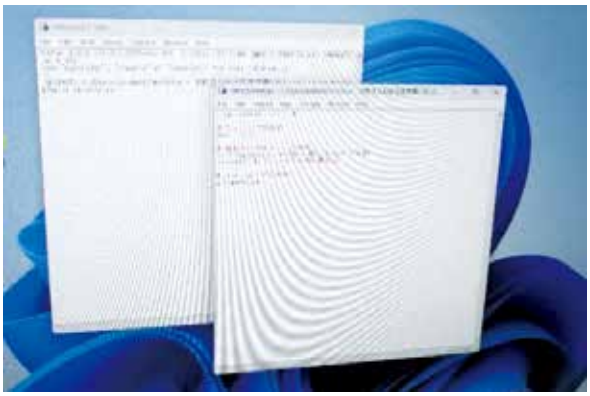
学期	月	学 習 指 導 予 定
1学期	4	・Python概要説明　・プログラムについて
	5	・プログラムについて　・Pythonプログラムの実行　・四則演算
	6	・Pythonプログラムの実行　・変数計算　・心理テストの作成　・じゃんけんゲームの作成
	7	・Pythonプログラムの実行　・リストと辞書型　・テスト平均点の作成　・アルファベットの頻出頻度調査
2学期	8	・Pythonプログラムの実行　・関数について
	9	・Pythonプログラムの実行　・モジュール定義
3学期	10	・Pythonプログラムの実行　・ローカル変数　・図形描画　・課題制作
	11	・AI、機械学習について
	12	・AI、機械学習について
4学期	1	・AI、機械学習について

Ⅱ　実践内容プログラミング授業例（Python）

本時の展開（学習活動）

学習の流れ	主な学習活動	ICT機器
導入 （１０分）	１．挨拶・出席確認 ２．本時の学習内容の確認 ・前回の復習でTkinterについて説明 ・新規画像の読み込みについての説明	PC
展開 （３５分）	３．ドキュメント内にある画像をコピーし、自身のファイルに貼り付け、解説を行う ４．PILモジュールのインストール ・Windows PowerShellを用いて行う ５．ダウンロードした画像を表示するプログラムを作成する ・エラーが出やすい箇所は事前に注意喚起を行う ６．コードの説明 ・１列ごとコードの意味を確認・解説 ７．作成したプログラムを保存し提出	PC プロジェクター (写真１) (写真２)
まとめ （５分）	本時で学習した新規画像の読み込みについての確認を行う	PC

（写真１）Python 指導画面①



（写真２）Python 生徒 PC 画面

（写真３）Python 授業風景①

（写真４）Python 授業風景②

課題 Python のプログラミングⅠ

```
# あるクラスの国語の点数 --- (*1)
points = [62, 58, 72, 60, 47, 81, 74, 65, 59, 38]

# 各点数の合計を求める --- (*2)
total = 0
for pt in points:
    total = total + pt
print("合計点=" + str(total))

# 平均点を求める --- (*3)
ave = total / len(points)
print("平均点=" + str(ave))
```

実行結果Ⅰ

```
Python 3.6.3 Shell
File Edit Shell Debug Options Window Help
Python 3.6.3 (v3.6.3:2c5fed8, Oct  3
 on win32
Type "copyright", "credits" or "lice
>>>
 RESTART: C:¥Users¥admin¥OneDrive -
plefiles¥src¥ch4¥list-points.py
合計点=616
平均点=61.6
>>>
```

課題 Python のプログラミングⅡ

```
tomato = 530
cheese = 750
tofu = 99
total = tomato * 3 + cheese * 2 + tofu * 5
price = total * 0.8
print(price)
```

実行結果Ⅱ

```
Python 3.6.3 Shell
File Edit Shell Debug Options Window Help
Python 3.6.3 (v3.6.3:2c5fed8, Oct  3
Type "copyright", "credits" or "lice
>>>
 RESTART: C:¥Users¥admin¥OneDrive -
2868.0
>>>
```

課題 Python のプログラミングⅢ

```
s = input("判定したい数は？")
i = int(s) # 整数に変換
if i % 2 == 0:
    print("偶数")
else:
    print("奇数")
```

実行結果Ⅲ

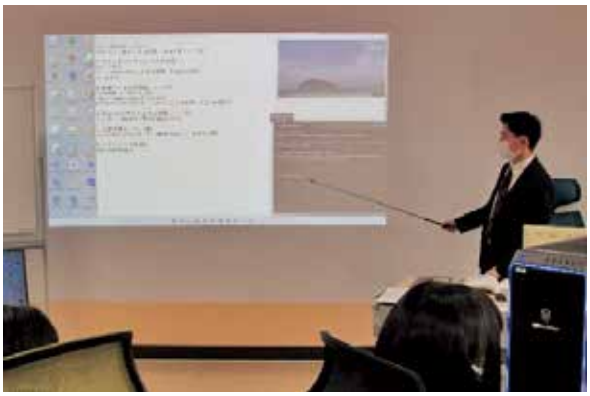
```
Python 3.6.3 Shell
File Edit Shell Debug Options Window Help
Python 3.6.3 (v3.6.3:2c5fed8, Oct  3
Type "copyright", "credits" or "lice
>>>
 RESTART: C:¥Users¥admin¥OneDrive -
判定したい数は？5
奇数
>>>
 RESTART: C:¥Users¥admin¥OneDrive -
判定したい数は？6
偶数
>>>
```

Ⅲ　生徒感想

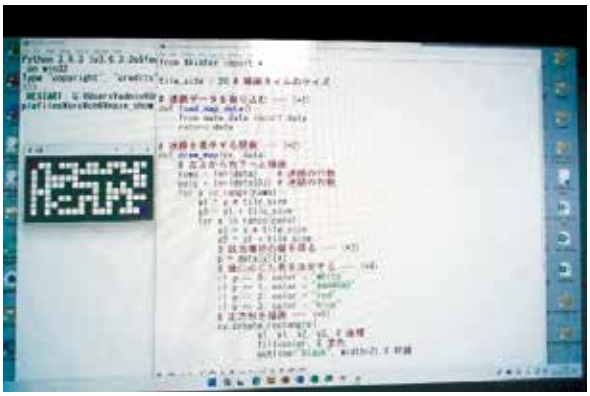
・Pythonプログラミング楽しみつつ、実行力などの力を身に着けることが出来たので良かったと思います。授業を通し、プログラミングでゲームや便利なツールを作成し様々なことに活かせることがわかり将来のために役立つ授業だと思いました。
・スキルの基礎は身につき、テキストで一から基礎的なところを学びいろんなものを作り応用してプログラムを作ることもできました。プログラミングに対しての理解を深めることができ、上手く結果が出ると面白かったです。
・Python授業ではプログラミングから実行するまでの過程を学び、大まかな役割や使い方を知ることができました。プログラムを書いて実行し、正しく動いたときの面白さと楽しさでよりプログラミングが楽しくなりました。
・プログラミング内の文字列や型などの使い方や意味が分かり、プログラミングの視野が広がりました。また、毎回の授業でコードを入力した後の実行結果などに驚いて、楽しく授業を受けることができ、将来様々な分野に応用できると思いました。
・Pythonの授業を通してプログラミングについての知識を深めることができました。本格的なプログラミングを学ぶことができ、今ではほとんどエラーの原因を自力で探し、解決できるようになりました。授業を通して得たスキルや知識は様々な場面で活かすことができるのでさらに応用できるよう頑張りたいと思います。

Ⅳ　結果と考察

Pythonのプログラミングを学ぶには、基本的な文法や構造を理解することが必要です。Pythonのプログラミングには、プログラムリスト、実行コマンド、実行結果があります。プログラムリストでは、コメントやインデントを適切に使って、コードの意味や目的を理解します。実行コマンドでは、プログラムを実行するために入力したコマンドを示します。実行結果では、プログラムの出力やエラーメッセージを示します。Pythonは様々な分野で活用できる言語です。



（写真５）Python 授業風景③



（写真６）Python 指導画面②

Ⅴ　成果と課題

プログラミングで身につく力は以下のようになります。

論理的思考力：プログラミングは、プログラムの流れや条件分岐など、論理的思考力（ロジカルシンキング）を必要とします。論理立てて筋道だった考え方を身につけることができます。

問題解決力：プログラミングでは問題を発見し、問題の原因を突き止め、解決策を考え、実際的なプランを立てることを身につけることができます。

アイデアを形にできる：自分のアイデアを形にすることができ、自らアプリを開発できる。自分の作品を作ることで、アイデアを形にするクリエイティビティを発揮することができます。

課題としては、GIGAスクール構想のもと学んでくる中学生に向けて、高校情報教育の中でわかりやすい授業を展開できるよう努め、新たな社会としての「Society ５．０」はビッグデータを踏まえて人工知能(AI)やロボットを活用することによって、誰もが快適で活力に満ちた質の高い生活を送ることができる「人間中心の社会」を実現するというもので、新時代の教育に向けて「自ら考え、解決し、新しいことを生みだす力」を育めるようプログラミング学習及び教育におけるICT活用の実践に努めなければならないと考えます。

Ⅵ　まとめ

プログラミング学習及び教育におけるICT活用のねらいとしては、生徒の学習意欲、興味関心、創造性、発想力を高められることであり、生徒一人一人のポテンシャルを引き出せるよう生徒の目線に立ってわかりやすい授業展開に努めることが大切であると考えます。そこで目指しているビジョンとしては、時代と生徒に沿った最先端の教育環境を推進し、スピーディーにICT活用の促進とスキル向上を図り、グローバル化、高度情報化社会をたくましく生き抜き、将来社会で活躍する生徒を育成できる教育活動ができればと考えております。そのような社会で教育における「不易と流行」つまり、どんなに社会が変化しようとも、時代を超えて変わらない価値のあるもの（不易）を大切にしつつ、同時に今後も一層進展すると予測される社会の変化・時代の変化とともに変えていく必要があるもの（流行）に柔軟に対応していくことが重要であると思われます。「情報社会のエキスパートを養成する」という教育目標のもと、今後も、若きエンジニア育成を目指し、推進していきたいです。

Ⅶ　謝辞

最後になりましたが、十分な教育環境を整えて頂き、御指導、御配慮を賜りました理事長加藤雄彦校長先生、沖縄校校長加藤聖一常務理事先生に心から感謝申し上げます。また、情報科学コース高橋英勝教頭先生はじめ諸先生方、株式会社エクシオン様にも常日頃たくさんのご支援、ご協力を頂き感謝を申し上げ、結びとさせて頂きます。

Ⅷ　使用教材

「ゼロからはじめるPython入門」　クジラ飛行机　（株）マイナビ出版

シジュウカラガン復活プロジェクト報告

外国語コース　　布施　莉彩

1．プロジェクト概要

1－1．プロジェクトの発足

シジュウカラガン復活プロジェクトは、かつての越冬地「七北田低地」にシジュウカラガンの群れを復活させることを目的としたプロジェクトである。仙台市と多賀城市にまたがる水田地帯の七北田低地は、昭和10年頃までシジュウカラガンの群れが見られる国内唯一の地域であった。しかし、シジュウカラガンの数は激減し、ほぼ絶滅寸前の状態になった。生息地の開発に加え、大正から昭和初期にかけて養狐事業のため繁殖地の千島列島などにキツネが放獣され、その食害を受けたためだ。その後、日ロ米連携によるシジュウカラガン羽数回復計画など国際的な保護活動によりシジュウカラガンの個体数は急速に回復したが、七北田低地には戻ってきていない。この絶滅の危機を乗り越え復活を遂げた奇跡の鳥であるシジュウカラガンの群れを、再びふるさと（歴史的な越冬地）の七北田低地に呼び戻したい。この願いを実現させるため、仙台ロータリークラブ、(学）仙台育英学園、東北緑化環境保全（株)、日本雁を保護する会の４団体が集まった。仙台ロータリークラブの資金サポートにより、2022年秋にシジュウカラガン復活プロジェクトが始まった。

1－2．プロジェクトの目的と意義

【ネイチャーポジティブの実現】

2030年までに生物多様性の損失を食い止め、回復に向かわせる「ネイチャーポジティブ」実現を目指して、地域から行動を具体化する “Think Globally, Act Locally” の実践。

【ユース世代の関与】

七北田低地にシジュウカラガンを復活させるため、将来を担うユース世代が主体的に関与する。これからの将来を担う若者が環境問題に関心を持ち、主体的に行動することで、自然保護の明るい未来を創り出す。

【新しい地域づくりへ】

2024年の多賀城創建1300年に向けて、シジュウカラガンを活かした新しい視点からの地域づくりの提案。

２．主な取り組み

２－１．日本雁を保護する会 呉地正行会長による講演

外国語コースに所属する１年生、留学生を対象に、日本雁を保護する会 呉地正行会長による講演「COME BACK GEESE多賀城の空に、再び。」が行われた。2022年、2023年それぞれの年度で実施された。長年にわたる渡り鳥の保護活動や絶滅の危機に瀕したシジュウカラガンの復活までの道のりなど、真剣な眼差しで講演を聞く生徒たちの姿が見られた。シジュウカラガンはガンの仲間で、白いネックレス模様と白い頬がチャームポイントなど、シジュウカラガンに関する多くの知識を得ることができた。

〈写真〉2022年10月19日

〈写真〉2023年11月21日

２－２．シジュウカラガン観察会

外国語コースに所属する１年生、留学生を対象に、仙台ロータリークラブの方々とともに宮城県大崎市ラムサール条約登録湿地の化女沼でシジュウカラガンのねぐら入り観察会が行われた。呉地正行会長の講演と同様に、2022年、2023年それぞれの年度で実施された。夕暮れの空にたくさん飛ぶシジュウカラガンの群れがとても美しく、初めて見るシジュウカラガンの群れに生徒たちは歓声を上げていた。力強い渡り鳥の姿に魅せられ、自然の素晴らしさを体験することができた貴重な時間となった。

〈写真〉2022年12月７日

〈写真〉2023年12月８日

２－３．政策提言

2023年５月26日多賀城市立図書館にて、シジュウカラガン復活プロジェクト公開シンポジウムが行われた。多賀城市の深谷晃祐市長に、外国語コース代表生徒９名（２学年６名、留学生３名）が政策提言を行った。「多賀城市にシジュウカラガンを呼び戻すために何ができるか」というテーマのもと、高校生らしさが溢れるアイデア満載のプレゼンテーションであった。特に「ガンピポーズ」というシジュウカラガンのくちばしを真似たポーズの反響が大きく、深谷市長から「若者にしか思い浮かばないアイデアだと思う」という言葉をいただいた。

〈写真〉プレゼンテーション資料

〈写真〉プレゼンテーション資料

〈写真〉多賀城市立図書館入口

〈写真〉公開シンポジウムの様子

２－４．Fujisaki-day（仙台八木山動物公園）

2023年10月７日、８日の２日間、仙台八木山動物公園にて「Fujisaki-day」が開催された。東北緑化環境保全の方々とともに外国語コース１、２学年代表生徒14名が参加し、シジュウカラガン復活プロジェクトの専用ブースが設けられた。仙台八木山動物公園とのコラボレーションは、公開シンポジウム（2023年５月26日）で政策提言した内容の１つであり、生徒たちが自ら考えたものを実際に行動に移すことができた貴重な経験となった。

生徒たちは日本雁を保護する会　呉地正行会長の著書『シジュウカラガン物語』をもとにした紙芝居制作に取り組み、ブースを訪れた子どもたちに紙芝居を披露した。また外国人家族には英語で対応するなど、臨機応変に対応する頼もしい姿が見られた。この２日間を通して、生徒たちは大きな充実感と達成感を得ることができた。

〈写真〉シジュウカラガン模型と記念撮影

〈写真〉Fujisakiday専用ブース

２－５．おむすび交流会

2024年２月３日高橋地区生活センターでおむすび交流会が行われ、東北緑化環境保全の方々とともに外国語コース１、２学年代表生徒15名が参加した。多賀城市の深谷晃祐市長、高橋地区連合町内会など多くの方々に足を運んでいただいた。仙台八木山動物公園とのコラボレーションに加えこのおむすび交流会も公開シンポジウム（2023年５月26日）で政策提言した内容の１つであり、生徒たちが自ら考えたものを実際に行動に移すことができた。

Fujisaki-dayと同様に生徒たちが制作した紙芝居を披露し、また多賀城市の特産品である古代米を使ったおむすびを振る舞った。海苔を巻く際には、シジュウカラガンのチャームポイントである白く可愛らしい頬を表現するためにおむすびの中央部分を空けて巻くなど、工夫を凝らした。多賀城市（七北田低地）にシジュウカラガンを再び呼び戻すためには、地域住民の方々の理解、協力が大切であり、シジュウカラガン復活プロジェクトを知ってもらう良い機会となった。

〈写真〉おむすび作り

〈写真〉工夫を凝らした海苔の巻き方

〈写真〉ガンピポーズで集合写真

〈写真〉昼食の様子

２－６．WorldWetlandsDay

世界各国の環境保護活動の取り組みを紹介するWorldWetlandsDayというWebサイトに、シジュウカラガン復活プロジェクトとおむすび交流会（2024年２月３日）の活動紹介文を掲載した。外国語コースに所属する留学生が中心となり、日本語で作成された資料をもとに中国語、韓国語、英語などに翻訳した。

〈写真〉中国語翻訳

〈写真〉韓国語翻訳

３．まとめ

2022年秋からシジュウカラガン復活プロジェクトに取り組み、仙台ロータリークラブのご支援のもと様々な活動を行ってきた。ふるさと（歴史的な越冬地）の七北田低地にシジュウカラガンを再び呼び戻すため、自然と共生する地域づくりを考え、生徒たちは日々活動に取り組んでいる。シジュウカラガンが再び七北田低地に戻ってきてくれることを願い、今後も活動に取り組んでいきたい。

仙台大学大学院での授業報告

英進進学コース　　田辺　　巧

1．はじめに

令和５年度から仙台大学大学院スポーツ科学研究科にて２年間の修学を行うこととなった。修学目的は主に２つあり、①学校教育現場で生じた様々な疑問への解決方法を学び、教育活動に活かすこと、②大学院で学んだことを本学園に還元し、同じ疑問や悩みを抱えている先生方の指導の一助となることである。本稿では、大学院のカリキュラムや学んだ授業の中から、特に教育現場で必要だと感じた内容や考え方について報告をする。

2．仙台大学大学院について

仙台大学大学院は９つの領域が設置されており、科学的根拠に基づく知識はもちろん、課題を達成するために必要な考え方についても学ぶことができる。下記に示した表は仙台大学大学院のカリキュラムで、赤い文字の授業科目は今年度履修した科目である。（表１）

区分		授業科目（履修科目）	
コア科目		スポーツ科学概論 スポーツ科学研究 情報リテラシー キャリアマネジメント演習	スポーツ科学特別研究 スポーツ科学インターンシップ スポーツ科学領域別実習 統計・データ解析の実際
領域科目	保健体育科教育	教育・学校ガバナンス論特講 保健体育科教育学特講 保健体育科教育学演習 部活動指導論特講	スポーツ心理学特講 教育実践演習 教職教育論演習
	現代武道	犯罪学特講 スポーツセキュリティ論演習	武道指導法演習
	スポーツマネジメント	スポーツマネジメント論特講 スポーツマネジメント論演習 地域スポーツ論特講	野外・レクリエーション論特講 スポーツ史特講
	スポーツコーチング	スポーツコーチング論特講 スポーツコーチング論演習 スポーツ運動学特講 スポーツ発生指導論演習	スポーツバイオメカニクス特講 スポーツバイオメカニクス演習 トップスポーツコーチング演習
	スポーツ情報戦略・マスメディア	スポーツ情報マスメディア特講 スポーツマスメディア論演習	スポーツ情報戦略論演習 トップスポーツ情報戦略論
	トレーナー	体力科学論特講 トレーニング科学演習	運動環境科学演習 アスレティックトレーニング演習
	運動・スポーツ栄養学	運動スポーツ栄養学特講	運動スポーツ栄養学演習
	健康福祉	健康福祉論特講 健康支援・介護予防演習 健康医療政策論	運動・スポーツ医科学論 養護教育学論
	子ども運動教育	子ども運動教育学特講	子ども運動教育学演習

表１　2023年度（令和５年度）履修科目一覧

大学院１学年には私含め14名が在籍し、授業では院生同士でのディスカッションや、PowerPointでプレゼンテーションを行う等のアウトプットを行い、考えを共有している。

今年度履修した保健体育科教育学と部活動指導論の授業内容から、学校教育現場で特に必要だと感じた知識や考え方について紹介をする。

〈写真〉ディスカッションの様子

〈写真〉プレゼンテーションの様子

３－１.『保健体育科教育学』

この科目では、「なぜ体育科は存在するのか」「良い授業とは何だろう」「良い体育教師とは何だろう」等の根本的な疑問から、保健体育授業やその役割について学び、考える。その他にも指導案の作成、院生や教授の前での授業や改善点のディスカッション、大学生授業者のサポート等を通して、より良い授業作りについて探求をおこなった。

（１）授業とは何か

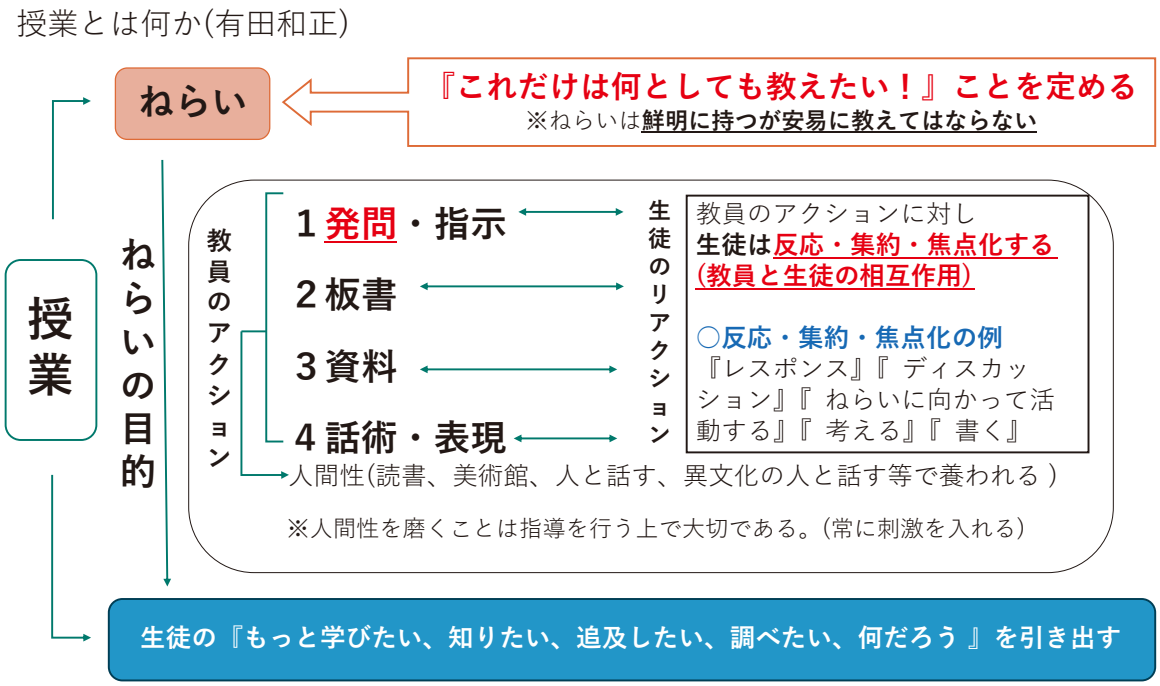


図１　保健体育科教育学演習資料　参考

図１に示した通り、授業には必ず「ねらい」が存在し、そのねらいを達成するために授業者は様々な教材や発問を用意する。そして、教員のアクションと生徒のリアクションのやり取りで授業が成り立つのである。そのため「ねらい」をしっかりと定めた上で教材や発問を工夫することで、生徒に伝わりやすい授業となる。

（2）教育内容と教材の区分

学習指導要領には教育内容（法則、概念）しかなく、そのまま提示されても生徒は理解しにくい。そのため教育内容を具体的に提示するために『教材』が必要となる（柴田義松）。

授業では『見えない教育内容を見える形（教材）にして生徒に提示する』ことでより生徒の理解が深まる授業になると考える。教材の例としては教科書の他に『プリント、視聴覚教材（ビデオ）、ICTツール、日常生活で使われるもの等』工夫次第で無限大に存在する。

（3）発問と質問の違い

【発問】…教師が答えをわかっていて、生徒に投げかけるもの
【質問】…答えをわからないから聞くこと

表２　保健体育科教育論演習資料

この発問は生徒がしっかりと考えられるものを準備する必要がある。発問が生徒の難易度に合わない、目的が明確でない場合、生徒は授業の世界に入り込みづらくなる。適切な発問を準備するためには、生徒の反応を記録、事前アンケートを用いる方法等もある。高校保健分野である『妊娠・出産と健康』の発問の例としては以下のようなものである。

問『へその緒を流れる血液は誰の血液か』（ねらい：妊娠の仕組みを理解する）

選択肢：① 母親の血液　② 赤ちゃんの血液　③ 母親と赤ちゃんの混血	正解：②

（4）教材・発問の考え方

教材・発問を考案する際に、まずは教師自身が教育内容を理解することから始まる。教育目的・目標（ねらい）を設定して、教科書や学習指導要領、専門書、インターネットなどから教育内容を『析出』させる（自分が「へーっ」と思ったことを箇条書きする）。

次に翻案（教材化）する。調べて「へーっ」と思った内容から、生徒の既有知識（素朴概念、誤った知識）や経験と照らし合わせて『教材・発問』を考案していく。生徒の特性や発達などの観点から「教材・発問」を順番に並べる。順番を吟味し、誤りを見つけて生徒が理解しやすいように授業を作成する。

このようにPCK（Pedagogical content knowledge）といわれる『生徒の能力や背景に応じて、教育学的に適切なかたちへと翻案（教材化）させる教師の能力』が授業の行う上で必要だと考えられる。指導過程を構成する際の要素については図２に示してある。このサイクルの中で、生徒を理解させ、興味を引き出させる授業を作ることが重要であると感じた。

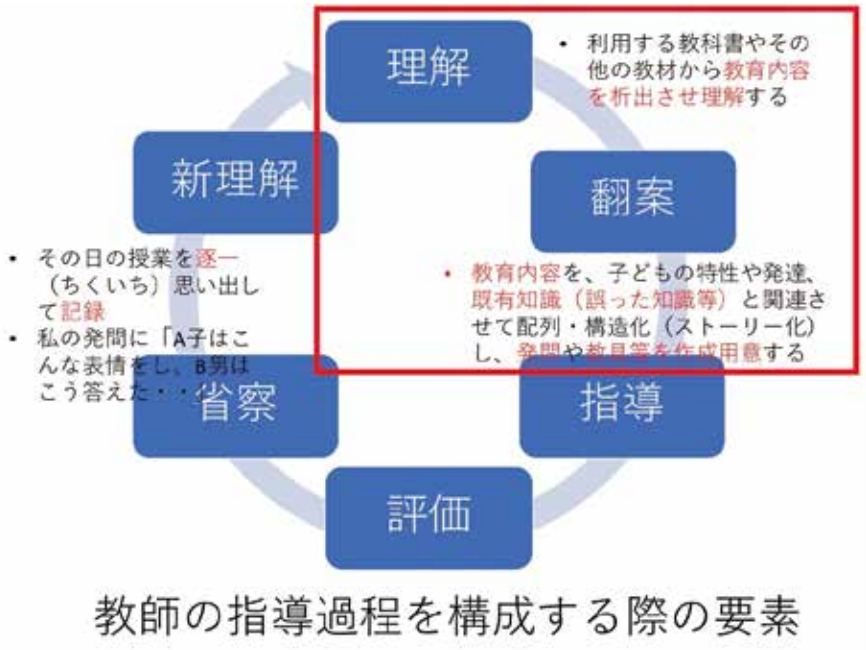


図２　保健体育科教育論演習　資料

３－２.『部活動指導論特講』

この授業では学校での部活動の位置づけや在り方、そして部活動地域移行について学び、考える。その中で、自分なりの『部活動はこうあるべきだ』というものを見つけていくことが目的となっている。

（１）学校における部活動の位置づけ

学校教育活動	教育課程内活動	各教科（国語、数学、英語、保体等）
		教科外（特別活動、総合的な学習の時間等）
	教育課程外活動	部活動

表３　部活動指導論特講資料　参考

表３に示している通り部活動は、学校教育活動において教育課程外活動に分類される。教育課程外活動とは、授業のカリキュラムとは違い、生徒自らが望んで参加している活動といえる。そのため、部活動の在り方は『部員の自主性、自発性を促し、みんなが納得したうえで科学的根拠に基づく活動を行うこと』であると考える。しかし、自主性といっても全てを部員に任せることは誤った方向に行く場合もあるので、指導者が競技的にも人間的にも部員が成長するよう、その都度軌道修正を行う必要があると感じる。

（２）安全に運動部活動を行うための対応

運動部活動指導の際、生徒に怪我が起きた場合は、即座に練習を中断して、患部への早期対応や原因の究明及び再発防止に努めることが、指導者の使命であると考える。例えば柔道の場合、相手の股の間に自分の足を入れ上げて投げる「内股」という技があるが、頭部が下がった状態で畳に倒れこんでしまうと「頸椎損傷」という四肢麻痺を起こしてしまう場合がある（図３）。頸椎損傷は身体が動かなくなることや、最悪死に至る非常に恐ろしい怪我なのである。そのため怪我の対策としては、頭を下げて内股を掛けている部員に対して一度練習を中断するよう指示し、何故頭を下げることはだめなのかという根拠を説明、理解をさせ、再発防止のための反復練習に切り替えて学ばせる必要が十分あると考える。このような重篤な怪我はもちろん、軽傷といわれる怪我に対しても、「怪我をした」という事実を重く受け止め、安全配慮に徹底して務める必要があると考える。また、怪我や熱中症は、大きな大会を控えた練習中や試合中、夏合宿、テスト期間明け等に発生が報告されていることから、この期間は特に注意して生徒の様子を見なくてはいけない。

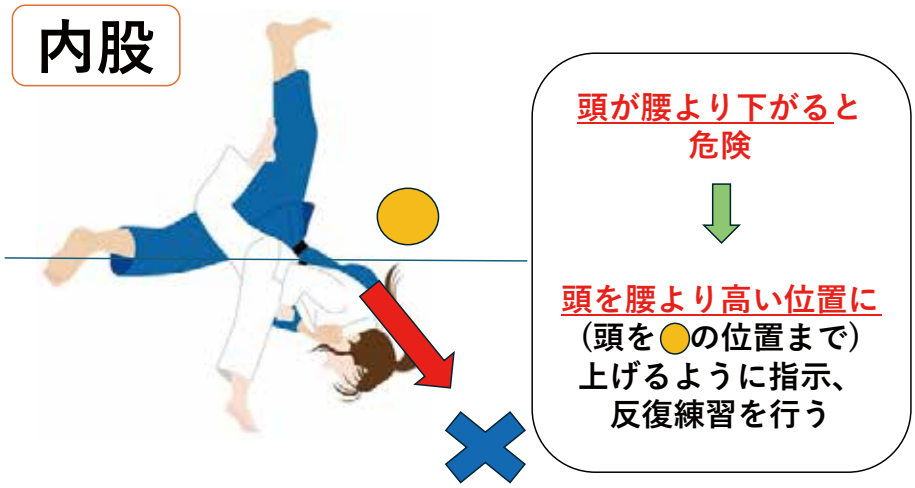


図３　内股においての頭の位置

（２）運動部活動での指導の充実のために必要と考えられる７つの事項

次の頁の表４は、運動部活動のガイドラインに記されている「指導の充実のために必要と考えられる７つの事項」の内容の一部である。７つの事項の根底にあるものは、生徒達が「顧問の先生は自分たちを思って指導してくれている」と感じることであり、そのためには、想像力と指導者が持つ人間的魅力というものも必要不可欠ではないかと考える。

① 学校組織全体で運動部活動の目標、指導の在り方を考える ・学校組織全体での采井や指導の目標、方針の作成と共有 ・保護者等への目標、計画等の説明と理解
② 適切な指導体制を整える ・必要に応じて外部指導者の協力確保、連携 ・外部指導者等の協力を得る場合の校内体制の整備（事故対応、外部指導者に任せきりにしない）
③ 活動における指導の目標や内容を明確にした計画の策定 ・生徒のニーズや意見の把握とそれらを反映させた目標等の設定、計画の作成 ・年間を通したバランス（適切な休養）の取れた活動への配慮
④ 生徒の意欲や自主的・自発的な活動を促す ・科学的裏付け等及び生徒への説明と理解に基づく指導の実施 ・生徒が主体的に、目標設定、解決策の考案、話し合い等自立して取り組む力の育成 ・ 生徒の心理面を考慮した肯定的な指導（怪我や精神的な苦痛等、生徒や活動自体に悪影響がある場合は、叱る場面も設ける必要がある） ・指導者と生徒の信頼関係づくり ・ 上級生と下級生、生徒の間の人間形成、リーダー育成等の集団づくり（上級生による暴力行為、いじめ等の発生の防止）
⑤ 肉体的、精神的な負荷や厳しい指導と体罰等の許されない指導とをしっかり区別する ・生徒に対して体罰（安全配慮も含む）、人格否のような発言や行為の根絶
⑥ 最新の研究成果等を踏まえた科学的な指導内容、方法を積極的に取り入れる ・自身の経験だけでなく、科学的根拠が得られたもの（論文や情報）を活用する ・学校内外での指導力向上のための研修、研究
⑦ 多様な面での指導力を発揮できるよう、継続的に資質能力の向上を図る ・ 運動部活動のマネジメント力そのほか多様な指導力の習得（部活動が人間形成の場となるよう、技術的指導、競技ルール、心理、栄養、休養、部のマネジメント、コミュニケーション等に関する幅広い知識や技能を継続的に習得する）

表４　運動部活動での指導のガイドライン　文部科学省

４. 終わりに

これまで学校教育現場において生じた疑問や解決方法について考える場面は多くあった。しかし今年度より大学院で学ぶ中で、疑問や解決方法のための知識はもちろん、固定概念にとらわれず時代の変化に対応するために「考え方や視点を常に更新する」ことについても学ぶことができた。

来年度からは、学んだことを教育現場に落とし込んでいく作業をしながら、生徒にとってより良い教育活動を実現できるよう尽力していきたいと考える。

参考文献

・大学院概要 | 大学院（修士課程）| 仙台大学（sendaidaigaku.jp）
・仙台大学 大学院研究科（youtube.com）
・https://www.bunkei.co.jp/school/komichi/pdf/monthly202104.pdf
・運動部活動での指導のガイドライン　平成２５年５月　文部科学省
・運動部活動の理論と実践　2016年　友添秀則
・2023年度（令和５年度）学生便覧
・内股　柔道　頭下がる　フリー素材 - 検索 画像（bing.com）

ICTを活用した授業について

英進進学コース　　及川　まり

１．はじめに

英進進学コースでは、生徒全員がコース貸与のiPadを持ちClassi、Slack、MetaMojiを中心に活用している。情報Ⅰでは、GATEHOUSEでのデスクトップパソコン、大会議室でのノートパソコンによる授業において、日本情報処理検定協会主催日本語ワープロ検定試験準２級・３級（Word）、情報処理技能検定試験（表計算）３級・全商業高等学校協会主催情報処理検定試験３級（Excel）の問題等をベースに基本操作ができるよう指導している。

２．生徒のパソコンスキルの実態

小中学校でのICT教育が始まったことにより、生徒のパソコンに関する基礎的な知識やスキルは以前より向上しているように見られるが、スキルの差はより一層拡大しているように思われる。令和５年度の新入生のタイピング力では10分間に693文字打つことができる生徒もいれば86文字しか打つことができない生徒がいるなど大きな差があった。スマートフォン等の入力が早いためパソコンの入力も早いものと考えていたが予想とは違った現状であった。授業初めの目標設定では「パソコンが苦手」と書く生徒が多く、素早く入力ができるようになることや操作方法を知ることで苦手意識をなくし楽しく意欲的に授業に臨んでもらえるような情報教育をしていく必要があると考えた。

３．タイピング力・文書作成（Word）について

Wordは前期の授業として設定した。授業の初めには“特打”を活用し、早打ち入力対戦等を通してゲーム感覚でタイピング力を付けることができるように指導した。勝つまで対戦を続けるなど集中して取り組む姿も見られるが、入力が苦手な生徒は飽きることが多いため時間を設定し集中して取り組めるよう工夫した。また、問題集や検定試験の過去問題などを繰り返し入力することで、正確に早く入力する力を身に付けさせることができたと考える。ワープロソフトのさまざまな機能を身に付けるために、文書作成（ビジネス文書）にも取り組み、正確性や速度だけでなく文書体裁を習得し起承転結をつけて文章を組み立てる力を身に付けさせる指導をした。６月下旬に評価課題として３級程度の問題を作成したがほとんどの生徒が10分間の目標である300文字以上入力、文書作成を正確に作成することができるようになった。そのため、準２級の問題にも挑戦しさらに入力速度、Word操作のスキルを身に付けることができた。中には、日本情報処理検定試験日本語ワープロ検定に挑戦し合格率は100％となっている。
検定試験の結果は以下の通りである。

検定級	２級	準２級	３級
合格人数／受験人数	１／１名	13／13名	10／10名
速度文字数　（平均）		587	414
文書作成点数（平均）		94	98
最高文字数／点	531	931	502
最低文字数／点	94	411	335

表１　令和５年度入学生の日本語ワープロ検定試験受験状況

注：日本語ワープロ検定試験基準

○ 速度：正確な入力を判定する

検定級	1ミスに対して	漢字含有率	合格文字数
3　級	1文字減	23％～26％	300文字以上
準2級	3文字減	25％～30％	400文字以上
2　級			500文字以上

○ 文書作成：正確で体裁の良い文書作成能力を判定する（表を含む）

検定級	1ミスに対して	合格点数
3・準2・2級	2点減	80点以上

情報Ⅰ　課題評価テスト①（実技編）
Word：文書作成（日本語ワープロ検定試験3級程度）

1A　No.　氏名

1．実施日　月　日（　曜日）

2．評価の観点
①知識・技能
②思考力・判断力・表現力
③主体的に学習に取り組む態度　の観点に関する課題

3．評価の観点基準
評価観点：①知識・技能

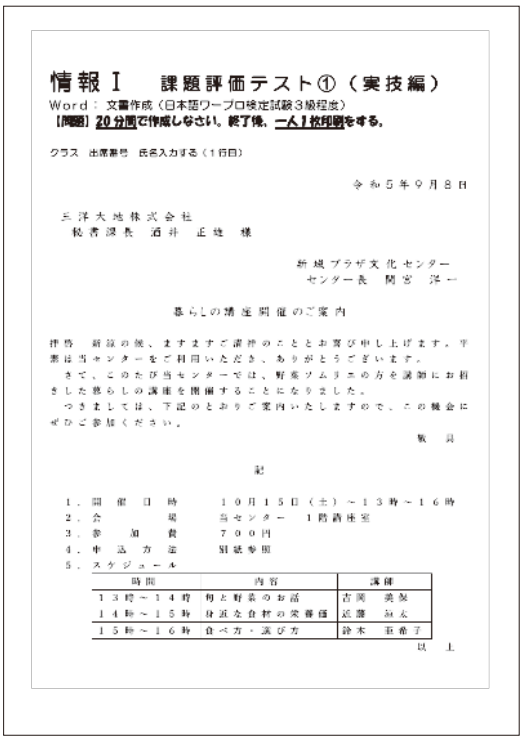
学習項目	学習内容	評価基準		
		A（十分満足できる）	B（おおむね満足できる）	C（努力が要する）
Word：文書作成（日本語ワープロ）	問題文を読み問題条件に従って文書作成をする。（スペース、改行、文字入力、書式設定）	問題条件に従って、内容いかく文書を作成することができる。（得点：80点以上）	問題条件に従って、文書を作成することができる。（得点：79点以下）	問題条件に従って、文書を作成しようとした。（得点：39点以下）

自己評価　※評価はA・B・Cを記入しましょう。

評価項目	自己評価	評価理由・今後の抱負
① 知識・理解		

評価　※ここは記入しないでください。

評価項目	①知識・技能	コメント
評価	A・B・C	


情報Ⅰ　課題評価テスト①（実技編）
Word：文書作成（日本語ワープロ検定試験3級程度）
【問題】20分間で作成しなさい。終了後、一人1枚印刷をする。

クラス　出席番号　氏名入力する（1行目）

令和5年9月8日

三洋大地株式会社
秘書課長　酒井　正雄　様

新規プラザ文化センター
センター長　関宮　洋一

暮らしの講座開催のご案内

拝啓　新緑の候、ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。平素は当センターをご利用いただき、ありがとうございます。
さて、このたび当センターでは、野菜ソムリエの方を講師にお招きした暮らしの講座を開催することになりました。
つきましては、下記のとおりご案内いたしますので、この機会にぜひご参加ください。

敬　具

記

1．開催日時　10月15日（土）～13時～16時
2．会　場　当センター　1階講座室
3．参加費　700円
4．申込方法　別紙参照
5．スケジュール

時間	内容	講師
13時～14時	旬と野菜のお話	吉岡　美穂
14時～15時	身近な食材の栄養価	近藤　和広
15時～16時	食べ方・選び方	鈴木　亜希子

以　上

図1　課題評価テスト（Word）

4．情報処理技能（Excel）について

Excelは授業の後期として設定した。入学時より入力速度が上がり入力に関しては成長が見られた。表計算では与えられた情報を基に表を作成し、さらに処理条件に従ってグラフを作成する技術を身に付ける指導をした。作成条件に従って操作していくと、しっかり問題を読まない、表の読み取りができない生徒が多く、指示された内容を基にして自ら判断して関数を利用したり、操作をしたりすることができない生徒が多く見られた。自ら問題を読ませるだけでなく、さらに問題を読み説明したが操作の説明を待ち、自ら挑戦する意欲はWordの授業より低かったように思う。グラフ作成に関しても、表を読み取ることが苦手な生徒が多いため求められる内容で指示通りに作成することに悪戦苦闘しながら作成していた。2月下旬に評価課題として3級程度の問題を作成したが、80点以上の生徒は多かったものの中には関数を全く覚えられない生徒もおりWordに比べてExcelはよりスキルの格差が大きく広がっていると感じた。

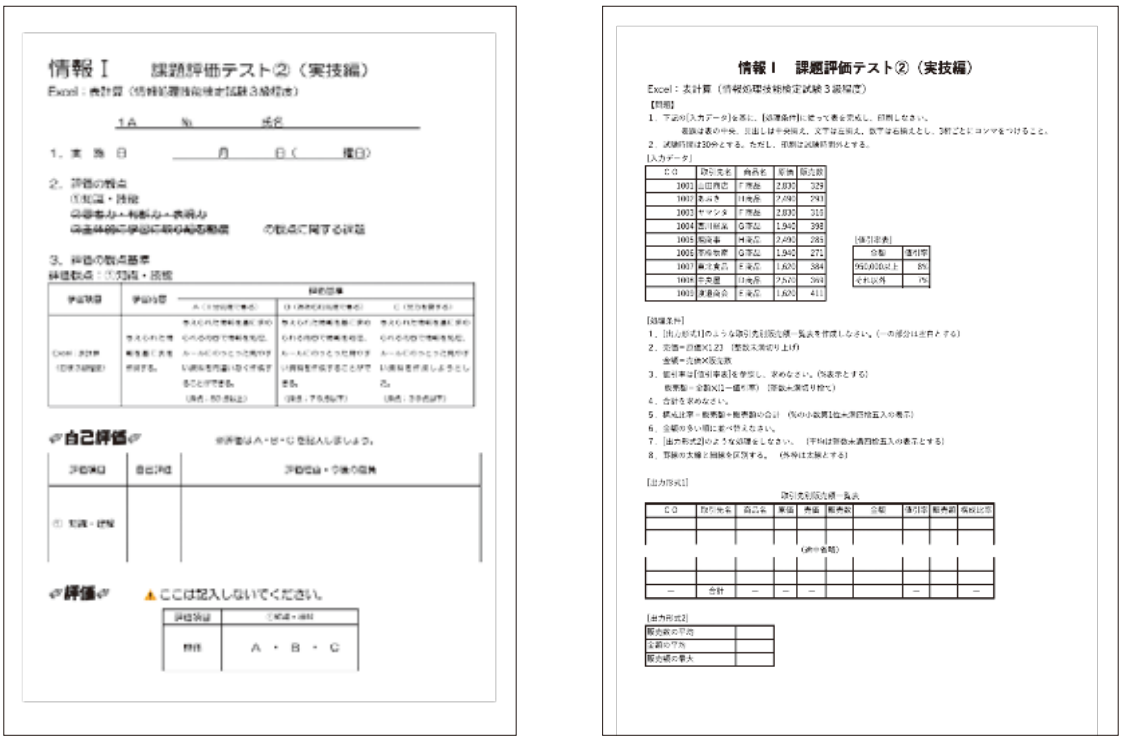


図２　課題評価テスト（Excel）

５．成果と課題について

毎年生徒のパソコンスキルを確認してスキルの状況に応じて授業を展開してきたが、今年度は生徒たちが意欲的で基本的な操作の力を身に付けることができたことで、当初予定していた内容よりレベルの高い問題にチャレンジすることができた。生徒のパソコンスキルの実態で述べたように、スキルの格差は大きいものであったが授業に集中し興味関心を持ちながら充実した様子で授業に取り組むことができたと考える。パソコンの使用頻度によりパソコン活用能力に与える影響は大きいと考えるが、特にタイピング力に関しては使用頻度が多ければ多いほど成長に繋がり、Excelに関しては何度も繰り返し説明し操作することで力を身に付けることができると考えている。パソコンスキルの向上が見られるが、漢字変換機能のあるパソコンやスマートフォンなどが普及し文字を手書きすることが減ったせいか、紙媒体のレポートを作成させたところ漢字を正しく書けない生徒が多くいた。このことだけが原因と言えないが、来年度の授業では今年度よりも紙媒体でのレポートを増やしていきたいと考えている。

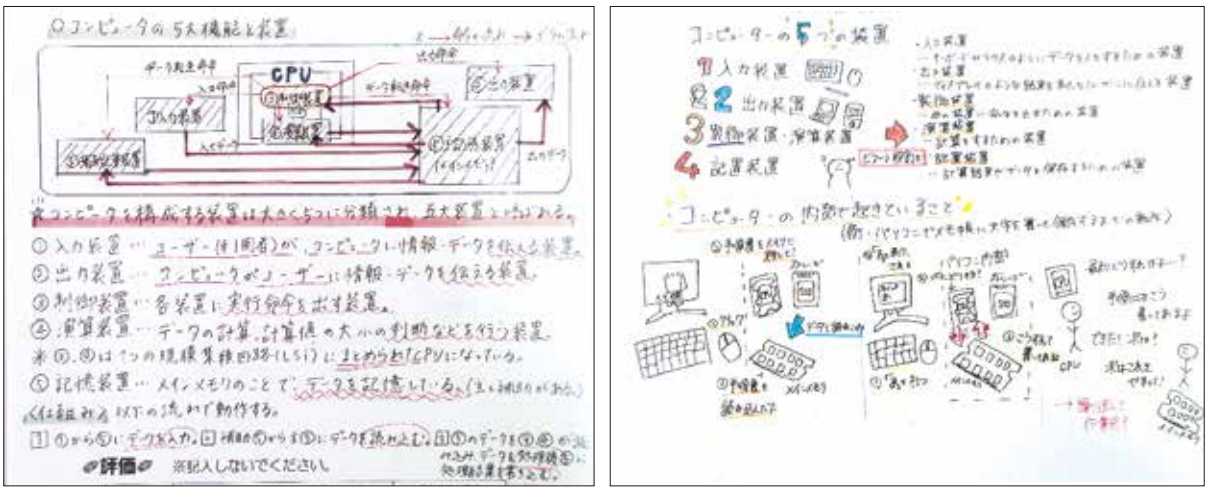


写真１　漢字ミスのあるレポート

6．おわりに

私たちはさまざまなIT機器に囲まれて生活しており、情報機器は便利さや楽しさを与えてくれている。また情報機器を活用することは将来情報を専門とするか否かを問わず、社会で活躍するためにも必要である。タイピングや基本操作の習得を目標に設定することでパソコンのスキル格差が軽減され活用能力の向上に繋げることができるのではないかと考える。

高度情報社会の進展に伴い、情報や情報機器についてよく理解し、それを上手に活用する方法を身に付けることも必要である。便利だからこそ、情報モラル、マナーとルールを守り使用していかなければならない。パソコンの活用能力スキルのみならず、情報社会のモラル・リテラシー教育などを通し、高度情報社会の影の部分を指導することも非常に重要であると考える。

主体的な学びの支援ツールの有効性と数学の授業展開の研究

技能開発コース　　舘　　和廣

第１章　はじめに

本論文は、「生徒の主体的な学びを支援するツールを活用した数学の授業展開」をテーマとした研究論文である。

本論文は　生徒の主体的な学びを支援するツールを活用した数学の授業展開について考えることを意図している。

本章では、筆者が本論文のテーマを設定するまでの経緯と、本研究の目的と基本的立場について述べていく。

１－１　本研究の意図

本研究は、生徒の主体的な学びを支援するツールを活用した数学の授業展開について考えるものである。筆者は、支援ツールを①ワークシートと②教師側のICT機器（Power Pointのスライドショー）、③教え合い活動、④生徒側のICT機器（１人１台端末）、⑤認め合い活動として捉え、これらのツールの活用が生徒の主体的な学びの支援に有効に働くと考える。筆者がこのように考えるに至った理由は以下である。

①ワークシートは、ノートに書き写すよりも数学的な思考・試行をするための時間をより多く確保することができる支援ツールであると考える。板書を書き写すことが苦手な生徒や、書くスピードがゆっくりとした生徒にとっては、単に書くという受動的な作業をする50分間になっているとも考えられる。そこで、ある程度板書を書き写す道すじが示してあるワークシートを準備することで、書き写す量を減らし、式を解いたり、グラフをかいたりといった数学的な思考・試行をするための時間を確保できると考える。

②教師側のICT機器（Power Pointのスライドショー）は、ホワイトボードにマーカーで板書をするよりも、素早く提示ができ、書き間違いを防ぐこともできる支援ツールであると考える。スライドの中にワークシートと同じ画面を使用することで、画面の提示箇所とワークシートの記入箇所の位置が一致するため、書き写すことが容易になる。このことは、①の理由とも共通している。

③教え合い活動は、教師と生徒間での一方的、または双方向のやり取りよりも、生徒と生徒間のやり取りの方が、より数学的な思考を生み出し、豊かな表現で伝え合い、教え合いが起き、主体的な学びを誘発する展開（支援ツール）であると考える。授業では、一つ目の問を解いた後、教師の前に並んで個別指導を受ける場面がある。この際の並んでいる最中や歩いてくる途中、また丸をもらった後の生徒間の交流についてはあえて制限をせず、教え合いが起こるようにしている。また、授業終盤の適用問題（確認問題）では、教師から丸をもらった生徒は、赤ペンをもってミニティーチャーとして学級全体を歩き回って生徒間で教え合いを行う場面がある。

④生徒側のICT機器（１人１台端末）は、４人グループの活動で使用する。画用紙とマジックで考えをまとめるよりも、４人グループ内での協働も容易であり、その考えを学級全体にリアルタイムで共有することも容易である。このことから、アナログなグループ活動よりも主体的な学びを支援するツールであると考える。ICT機器の導入前は、画用紙を用いていたものの、令和３年度入学生以降は１人１台端末があるため、Chromebookを使用している。ChromebookではSlackでの情報共有やGoogle Jamboard、Geo Gebraの活用が大変スムーズである。

⑤認め合い活動は、ワークシートの振り返り記入欄に「今日のイイトコ」欄があり、その授業の教え合い活動で教えてもらった人や活躍していた人などの名前と理由を記入する場面である。素直に名前を書かれたいから頑張る生徒もいれば、仲良しグループに限らず学級で活躍していた生徒の名前を挙げる生徒もいる。認め合い活動によって、③の教え合い活動をより活発にし、温かい人間関係づくりが③の活動を支えることになると考える。今回の実践授業においては、Google Jamboard上においても星印で今日のイイトコを表現する活動も行った。なお、認め合い活動のイイトコメガネについて詳しくは、令和２年度の研究紀要掲載の筆者の「学級だよりの有効性～学級だよりを核にした学級経営の研究～」に掲載している。

１－２　先行研究の概要

本節では、前節で述べた支援ツール①ワークシートと②教師側のICT機器（Power Pointのスライドショー）、③教え合い活動、④生徒側のICT機器（１人１台端末）、⑤認め合い活動の５つに関する実践を調べていく。

１－２－１　斎藤康夫氏の先行研究

斎藤康夫氏は、中学校の実践ではあるが、生徒の試行を妨げない、学びに機能するようなワークシートを作成することを提案している。「小学校を卒業したばかりの１年の最初の授業から問題が印刷されているだけのものを用意し、自分の思考過程を書きとめなさいというのはあまりにも無策であり無謀である。入学当初は課題追求

の中で自分の思考過程を書きとめたり、振り返ったりできる授業及びスモールステップ化（構造化）されたワークシートが必要である。思考過程を書きとめる欄を設け、問題解決に向けた道筋をつかむことができるよう、教師が構造化、条件付けしたワークシートで学習内容及び学び方をつかめるよう工夫する。そして、生徒の発達段階に応じて、様々な能力を生徒が身に付けられるよう、徐々に条件を取り外したワークシートづくり及び指導（授業）が教師に求められる。」[1]としている。また、「常に授業での学び方を構造的（問題⇒学習課題の把握⇒課題の追究⇒課題及び問題の解決、振り返り）にとらえることは学習内容及び学び方を構造的に理解することにつながる。」[2]としている。

このように、支援ツール①ワークシートに関連した内容で、ワークシートの構造化、授業の構造化について示しており、筆者の考えに近い実践である。

１－２－２　岡寺裕史氏の先行研究

岡寺裕史氏は、構造的な板書による一定の授業展開を提案している。「生徒によっては、板書をノートに写すこと自体が難しい生徒、書くことに時間がかかる生徒、線や図形をかくことが難しい生徒がおり、板書の量が多い中、すべての生徒がノートに書くことを待っていたら、時間が足りません。したがって、板書は必要最低限の内容とし、構造的な板書にしていく必要があります。同時にそのような板書の工夫は、授業展開のわかりやすさにもつながります。」[3]「本時のねらい、今日のポイント、やってみようの３種類のカードを用意し、必ずこの３枚のカードを貼ってシンプルに意識し板書する。」[4] この結果、「何を学び、どこが大切なのか、自分はどこがわかり、どこがわからないのかが確実に把握できる」[5] としている。

このように、支援ツール②教師側のICT機器（Power Pointのスライドショー）に関連した内容で、構造的な板書と一定の授業展開について示している実践である。

１－２－３　武藤寿彰氏の先行研究

武藤寿彰氏は、スタンドアップ方式を提案している。「生徒が席を立って相手を自由に決めて説明し合い、説明できたら席に戻る」[6] スタイルの学び合い活動である。「たいていは気心が知れた相手同士でグループになるのだが、それもよい点だと感じている。気心が知れているからこそ、「わかった？」「どうして？」「もう一度説明して」と言いやすい環境になるからだ。」[7] としている。また、「説明するためには、自分の頭で理論を再構築する必要が生まれるので、この学び合いでは、説明を聞いて教わる側よりも、説明する側に大きなメリットがあるとも感じている。」[8] としている。

このように、支援ツール③教え合い活動に関連した内容で、自由に立ち歩いて学び合うことのよさを示している実践である。

１－２－４　諏訪哲也氏の先行研究

諏訪哲也氏は、Google Jamboardを活用した授業を提案している。「Google Jamboardを活用すれば、予想を共有したり、より多くの生徒の意見を取り上げたりすることができます。」[9]「あらかじめGoogle Classroomで個人宛に配付しておいたJamboardを開いて取り組ませます。表・式・グラフ、それぞれ予想できるよう３つのフレームを用意しておきます。」[10]「５分程度自力解決の時間を取った後、発表前に全生徒のJamboardが保存されているフォルダのアドレスを公開し、みんなで考えを共有することも考えられます。最後に、それぞれの考え方でスライドを使いながら説明させます」[11]「短時間でより多くの生徒の意見を取り上げることが可能」[12]としている。また、「Jamboardに貼り付けた立体をその場で動かしながら分類します。生徒にはご近所と相談させるなどして予想させた後、自由に発表させます。その後、Jamboardのペン機能を使ってグルーピングを

---

[1] 斎藤康夫（2014）、生徒の試行を妨げない、学びに機能するワークシートのあり方、数学教育No.685、明治図書、p.10
[2] 上掲書、p.11
[3] 岡寺裕史（2022）、板書を授業モデルと対応させる、数学教育No.778、明治図書、p.36
[4] 上掲書、p.37
[5] 上掲書、p.36
[6] 武藤寿彰（2015）、思考がより深まる学習形態の工夫、数学教育No.690、明治図書、p.38
[7] 上掲書、p.39
[8] 上掲書、p.39
[9] 諏訪哲也（2022）、ホワイトボードアプリの活用アイデア、数学教育No.781、明治図書、p.24
[10] 上掲書、p.25
[11] 上掲書、p.25
[12] 上掲書、p.25

行い、見方を書き込みます。」[13]「発表する生徒のJamboardを電子黒板に映し出します。」[14] としている。
このように、支援ツール④生徒側のICT機器（１人１台端末）に関連した内容で、Google Jamboardを活用した展開を示した実践である。

１－３　本研究の目的と基本的立場

本研究は、生徒の主体的な学びを支援するツールを活用した数学の授業展開について考えるものであった。
前述したテーマ設定に至る経緯と先行研究から、筆者は①から⑤の生徒の主体的な学びを支援するツールが数学の授業展開に有効に機能するという立場に立つ。
すなわち、本研究の目的は、『生徒の主体的な学びを支援するツールの有効性とそれらのツールを活用した数学の授業展開』を考えることである。これが本研究の基本的立場であり、本研究の目的である。

第２章　令和５年度数学科第３回ブラッシュアップ研修での実践

第１章では、本研究の意図を示し、本研究の目的と基本的立場を明らかにした。
本章では、令和５年度数学科第３回ブラッシュアップ研修での筆者の実践について紹介し、『生徒の主体的な学びを支援するツールの有効性とそれらのツールを活用した授業展開』について分析していく。

２－１－１　令和５年度数学科第３回ブラッシュアップ研修での実践

本章では、令和５年度数学科第３回ブラッシュアップ研修での学習指導案と実際の授業、ワークシートの問題の正解状況分析と振り返りのまとめ、Google Jamboardの成果物の分析、そして検討会の内容について紹介していく。まず、最初に本章の中心となる数学科のブラッシュアップ研修について詳細を以下に示す。

２－１－２　令和５年度数学科ブラッシュアップ研修について

研修の目的は次の３点からなる。１点目は、本学園の公開研究授業である研修Ⅰについてより質の高い授業づくりである。２点目は、教育顧問による生徒対象の集中講義である研修Ⅱについて、数学の奥深さや面白さを感じさせ受験学力を伸ばすこと、特に数学を学ぶ楽しさを感じさせることである。３点目は、教員対象の研修Ⅲについて進学情報や入試問題のトレンドや傾向、対策等の講話により進学指導力を高めること、公開授業の合評会や支援ツールの研修等により授業力を高めること、生徒個々の力を伸長させるための指導の力量を高めることである。
研修の基本方針は次の３点である。研修Ⅰは公開研究授業は若手・中堅教員を優先とし、研修Ⅱはコースの実態とニーズに沿ったテーマで行うことである。また、研修Ⅲは研究授業の合評会および教育顧問または外部講師による講義を行うこととしている。
第３回ブラッシュアップ研修は、フレックス・技能開発コースを対象とし、数学Ⅰ・Ａの基礎・基本、生徒の主体的な学びを支援するツールを教員研修のテーマとしている。

２－２　令和５年度１年生対応の新しい授業づくり

筆者が担当していた令和４年度の３年生は、１人１台端末を所有していない学年であり、ワークシートへの記入、そしてグループ活動の成果は画用紙にまとめるといった形の授業であった。それに対し、令和５年度の１年生は、１人１台端末Chromebookを全員が所有している学年となったため、授業方法の大幅な見直しが求められた。年度当初の準備にあたっては、Chromebookでつくる小学校算数の授業（明治図書）[15] を参考に新しい授業方法を模索した。Chromebookでできることとして「Google Classroom（課題の受け取り、提出）、Googleフォーム（アンケート、テストのツール）、Googleドキュメント（文書作成ツール）、Googleスプレッドシート（表計算ツール）、Googleスライド（プレゼンテーションツール）、Google Jamboard（ホワイトボード）、Googleドライブ（データの保存・共有）、Google Earth（地図）、Googleマップ（地図）、カメラ（動画、静止画の撮影）」[16]（p.8・9）を挙げている。これらの中から筆者の授業での活用を考えるとGoogle Jamboardが最適であると考えた。令和４年度まで行っていたグループ活動の成果をまとめてた画用紙を、Jamboardにそのまま代用可能となるためである。Google Jamboardの機能としては「協働的な学びのコミュニケーション、付箋の

---

[13] 諏訪哲也（2022）、前掲書、p.23
[14] 上掲書、p.23
[15] 鈴木詞雄（2022）、Chromebookでつくる小学校算数の授業、明治図書
[16] 上掲書、pp.,8・9

色を使った思考の分類」[17]（p.8・9）等ができるホワイトボードである。１つのJamboardには、ホワイトボードを20ページまで作成でき、グループに１ページずつ割り当て、４人グループのメンバー全員が同時に書き込むことが可能である。Jamboardには付箋やテキストボックスの機能があり、あらかじめ教員側で班の番号や問題文等を入力しておくこともできる。また、画像の貼り付けも可能であり、生徒がChromebookで撮影した画像やインターネット上の画像を貼り付けて工夫した解答を作成することも可能である。Jamboardは、どのページも常に共有された状態にあるため、教員も生徒もページを変えるだけでクラス全体の考えを見ることができる。授業時には、Slackを使ってリンクを共有し、あらかじめ参加させておいた数学用のチャンネルからGoogle Jamboardに入るようにさせる。Jamboardには書き込んだ画面をＰＤＦファイルでダウンロードできる機能があり、このPDFをSlackのチャンネルに前時の成果物として投稿し、Jamboardは次の授業のために内容を書き換えて使用する。

２－３　学習指導案作成にあたっての基本的立場

筆者は、支援ツールを①ワークシートと②教師側のＩＣＴ機器（Power Pointのスライドショー）、③教え合い活動、④生徒側のＩＣＴ機器（１人１台端末）、⑤認め合い活動として捉え、これらのツールの活用が生徒の主体的な学びの支援に有効であると考える。この視点をもって計画した授業の学習指導案の内容について以下に示していく。

２－３－１　学習指導案　単元観

この単元は、学習指導要領の数学Ｉの内容（３）「二次関数」で「ア（ア）二次関数の値の変化やグラフの特徴について理解すること。（イ）二次関数の最大値や最小値を求めること。（ウ）二次方程式の解と二次関数のグラフとの関係について理解すること。また、二次不等式の解と二次関数のグラフとの関係について理解し、二次関数のグラフを用いて二次不等式の解を求めること。」[18]（p.41）また、「イ（ア）二次関数の式とグラフとの関係について、コンピュータなどの情報機器を用いてグラフをかくなどして多面的に考察すること。（イ）二つの数量の関係に着目し、日常の事象や社会の事象などを数学的に捉え、問題を解決したり、解決の過程を振り返って事象の数学的な特徴や他の事象との関係を考察したりすること」[19]（p.41）をねらいとしている。これまで生徒は、比例、反比例、一次関数及び二次関数のうち原点を頂点とする放物線に限定した関数 を学んでいる。原点以外を頂点とする二次関数も含めて、平行移動の形への変形、グラフとの位置関係等について考えていく単元である。

２－３－２　学習指導案　生徒観

この学級（令和５年度技能開発コース１学年３組）は、男子15名、女子20名、計35名のクラスである。中学で下位群であった生徒が多くの割合を占めるコース・学級である。学級の生徒の進路希望状況（５月）は表１の通りであり、ベネッセ基礎力診断テストのＧＴＺ（学習到達ゾーン）は表２の通りである。表２の通り入学時点で学級の半数以上の生徒がＤゾーンにいる状況（令和５年度４月）である。そのため、正負の数の加減や累乗の計算、符号ミス等の基礎的な内容でつまずく場面も見られるが、課題解決へ向けて互いに協力しながら、粘り強い姿勢で理解に努めようと授業に取り組む生徒が多い。

表１

就職希望	専門学校希望	大学希望	未定
10人	12人	0人	11人

[17] 鈴木詞雄（2022）、前掲書、p.9
[18] 文部科学省（2019）、高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説数学編理数編、p.41
[19] 上掲書、p.41

表２

Ｂ１	一般入試で大学合格が目指せる・公務員試験で合格が目指せる・競争率が高い企業で合格が目指せるレベル	１人
Ｃ２－	推薦入試で大学合格が目指せる・一般的な入社試験で合格が目指せるレベル	１人
Ｄ１＋	短大・専門学校の合格が目指せる・就職後に仕事に取り組む上で最低限の学力が身に付いているレベル	１人
Ｄ１－		３人
Ｄ２＋		３人
Ｄ２－		６人
Ｄ３＋	義務教育の学習内容が身に付いていないレベル	14人
Ｄ３－		４人

以下の表３は、最大値・最小値の問題（定義域なし）についての学級のレディネスの状況である。

表３

A	B	C	D
式・グラフ・答えが完璧に書ける。	平方完成ができるが、グラフが正しくかけない。	平方完成が正しくできない。	ほとんど何も書けない。
20人	４人	４人	０人

２－３－３　学習指導案　指導観

乗法公式や因数分解の公式、文字式の計算の決まり、根号を含む計算等中学校の学びを基礎として計算を行う内容で終始した「数と式」に対して、この単元では、関数の式とグラフを関連させて視覚的に考察して答えを導いていく内容を扱っている。生徒の実態としては、一次関数の直線のグラフや中学校で扱った関数 $y = ax^2$ のグラフをかくこともままならないのが現状で、その後の平行移動や頂点や平方完成した式をもとにグラフをかく作業は困難な生徒が多い。形式的な式変形である $y = a(x - p)^2 + q$ の形への変形（平方完成）についても、反復練習が不足している生徒が多い。式変形やグラフをかく作業で支援が必要であると予想する。最終的には、平方完成をして、頂点や軸を把握し、グラフをかき、最大・最小や身近な課題等の様々な問題の答えを求めることができるようにさせたい。

２－３－４　学習指導案　単元の目標

単元の目標は、次の９点である。（１）互いに関連しながら変化するものとしての関数の概念を理解させる。また、1 次関数について復習するとともに関数の概念の理解を深める。（２）２次関数の概念を理解させる。また、軸、頂点、グラフの凹凸などの放物線の性質を理解させる。（３）関数 $y = ax^2$ のグラフをもとに、段階的に、$y = ax^2 + q$、 $y = a(x - p)^2$、 $y = a(x - p)^2 + q$ のグラフを理解させ、それぞれのグラフをかけるようにする。（４）平方完成についての理解を確実にし、$y = ax^2 + bx + c$ を $y = a(x - p)^2 + q$ の形に変形できるようにする。（５）一般の２次関数 $y = ax^2 + bx + c$ のグラフをかけるようにする。（６）グラフについての条件から、その条件を満たす２次関数を決定することができるようにする。（７）２次関数の最大・最小を理解させ、最大値・最小値を求めることができるようにする。さらに、定義域が定められた場合についても考察し、具体的な問題に利用できるようにする。（８）２次関数のグラフと２次関数の関係を理解させ、グラフと x 軸の共有点を求めることができるようにする。（９）２次不等式の解の意味を理解させ、２次関数のグラフを利用して、２次不等式を解けるようにする。

２－３－５　学習指導案　単元の目標

２次関数の単元の学習指導計画は、18時間扱いであり、本時は12時間目にあたる。詳細は次の表４の通りである。

表４

節	項	時数	ねらい	観点別の評価		
				知	思	主
１ ２次関数とそのグラフ	１ 関数	1	関数の概念の理解を確実にし、また、１次関数のグラフをかくことができる。	○		
	２ ２次関数とそのグラフ	8	具体的な事象から、２次関数の概念を理解して、２次関数のグラフの特徴を学ぶ。また、２次関数 $y = ax^2 + bx + c$ を $y = a(x - p)^2 + q$ の形に変形し、軸と頂点を求めてそのグラフをかくことができる。	○	○	○
	３ ２次関数の決定	1	２次関数のグラフについて、与えられた条件からその２次関数を定められる。	○		
２ ２次関数の値の変化	１ ２次関数の最大値・最小値 (本時２/３)	3	２次関数の最大値・最小値についてグラフを利用して理解し、それらの値を求めることができる。	○	○	○
	２ ２次関数のグラフと２次方程式	2	２次関数のグラフと２次方程式の解の関係を理解し、グラフと x 軸の共有点の x 座標を求めることができる。また、式の見方を豊かにするとともに、グラフを活用することのよさを認識する。	○	○	
	３ ２次関数のグラフと２次不等式	3	２次関数のグラフと x 軸の共有点の位置関係から２次不等式の解の意味を理解し、グラフを利用して２次不等式を解くことができる。	○		
	課題学習 焼きそばの値段設定	1	身近な問題を関数の問題として捉え、２次関数の最大値・最小値を活用して解決することができる。		○	○

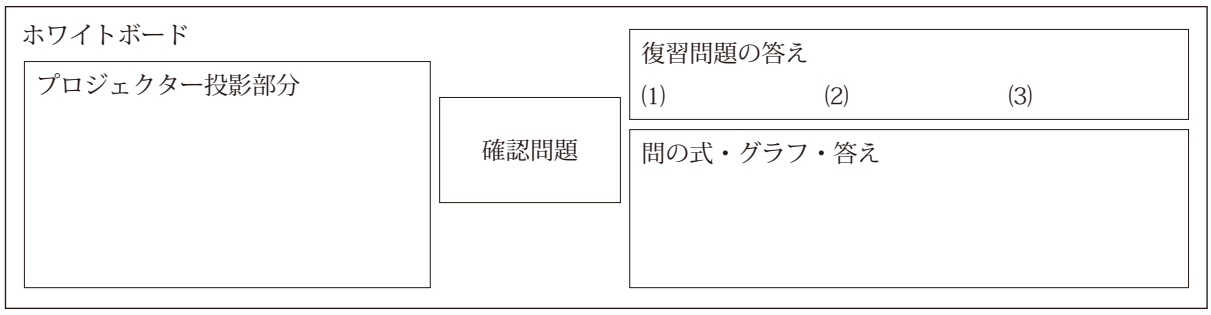
２－３－６　学習指導案　本時の指導

本時の題材名は、２次関数の限られた範囲での最大値・最小値である。本時の目標は、知識・技能の観点として、「２次関数の最大値と最小値を２次関数のグラフと関連付けて理解し、求めることができる。また、定義域に制限がある場合の最大値・最小値を求めることができる。」である。また、主体的に学習に取り組む態度の観点として、「最大・最小を求める過程で、２次関数のグラフを活用しようとしている。」である。本時の準備物として教師は、教科書、ワーク、ワークシート、パソコン、授業用パワーポイント、指示棒、座席表、タッチペン、Google Jamboardの各班のページ、Slackのリンクで、生徒は教科書、ワーク、筆記用具、充電してあるパソコンである。本時は、教科書「東京書籍数学Ⅰ Essence」のp.68の内容をもとにした授業である。指導学級は技能開発コース１学年３組で、男15名、女20名、計35名である。研究授業の日時は令和５年９月14日（木）第５校時（13:35～14:25）である。

２－３－７　学習指導案　板書計画

板書計画は以下の図１の通りである。

図１



２－３－８　学習指導案　指導過程

指導過程は以下の表５の通りである。

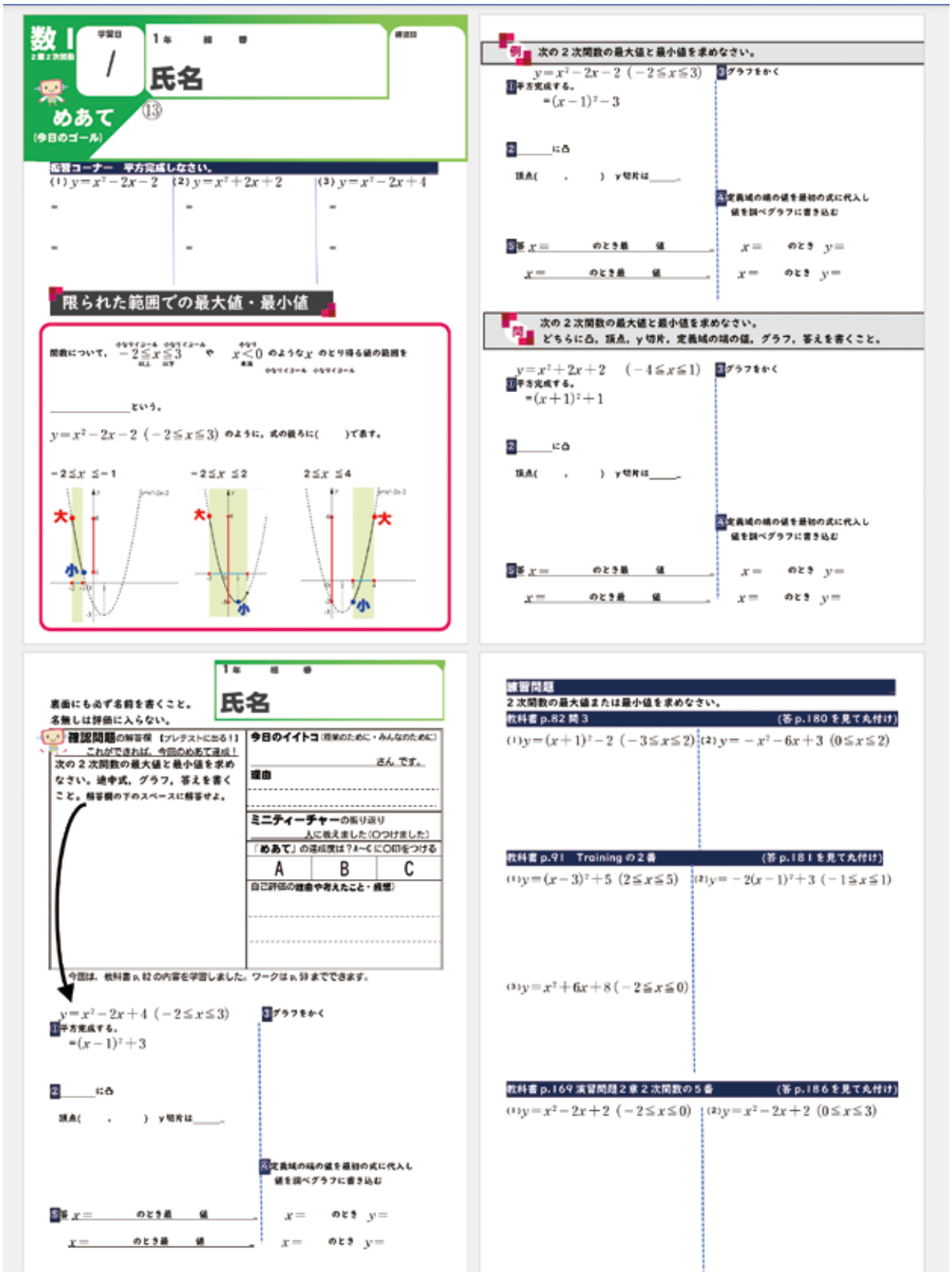
表５

段階	学習活動・内容	○教師の指導　☆支援　評価 ◎本時の学び合う活動
導入５分	０．　黙想（30秒程度） １． 数学係がワークシートを配布する。また、「めあて」をワークシートに記入し、復習問題（平方完成３題）を解く。 ２． 本時の「めあて」を読んで把握する。 授業の約束を確認する。	０．　黙想（30秒程度）室長が呼び掛ける。 １． ○ワークシートを配布してもらう。また、プロジェクターで「めあて」を提示する。復習問題（平方完成３題）を３分で解かせる。 ☆机間指導をしながら、声掛けをする。正解できている生徒をピックアップしておく。復習問題の答えはこの後の問題でヒントとして活用していく。 ２． ○本時の「めあて」を読ませ、把握させる。 授業の約束を把握させる。
	めあて　定義域のある最大値・最小値をマスターしよう	
	※机間指導でピックアップされた生徒３人は指名を受けて、復習問題の答えを答える。	※ピックアップした生徒３人に指名して、復習問題の答え合わせをする。
展開21分	３． (1) ○定義域についての説明をワークシートに記入する。 (2) ○例題を把握し、式や値、説明、グラフの穴埋めを記入する。指名された生徒は教師からの問いかけに答える。	３． (1) ○定義域ついての説明をプロジェクターで提示し、ワークシートに記入させる。 (2) ○例題を提示し、式や値、説明、グラフについて穴埋めをしながら説明し、ワークシートに記入させる。穴埋めの際は、生徒を指名して答えさせる。
	例　次の２次関数の最大値と最小値を求めなさい。 （教科書p.82例題２） $y = x^2 - 2x - 2\ (-2 \leqq x \leqq 3)$ $= (x-1)^2 - 3$	
		※今回は、復習問題で平方完成したため、例題や問では平方完成がしてある状態の式も同時に提示する。
	(3) ○問を把握し、自分の力で考え、図示をしたり、穴埋めをしたりして解決する。	(3) ○問を提示し、自分の力で考えさせる。 （５分程度）
	問　次の２次関数の最大値と最小値を求めなさい。 （東京書籍教科書DVD10分間テストから） $y = x^2 + 2x + 2\ (-4 \leqq x \leqq 1)$ $= (x+1)^2 + 1$	
		☆机間指導をしながら、声掛けをする。特に頂点や定義域の端の値の求め方やグラフが書けない生徒の支援をする。
	◎解き終わった生徒、または解き方がわからない生徒は、教師の前に並び、個別指導を受ける。最初に丸付けをしてもらった生徒から、ホワイトボードに解答を板書する。 ※並ぶ際のつぶやきやおしゃべり、立ち歩きの中での交流については、学び合いとして自由に認める。	◎解き終わった生徒、または解き方がわからない生徒を教師の前に並ばせ、個別指導を行う。丸付けも行う。最初に正解した生徒から、ホワイトボードに解答を書かせる。 ※全員ではないがある程度の生徒への個別指導を行った時点で次の活動に入る。
	○指名された生徒の発表をメモを取りながら聞く。	○解き方の説明をする生徒を指名し、全体に発表させ、他の生徒にはメモを取りながら聞かせる。

まとめ 24分	４．(1) ○確認問題を解き、本時の内容が理解できているか確認する。	４．(1) ○確認問題を提示し、本時の内容が理解できているか評価する。
	確認問題　次の２次関数の最大値と最小値を求めなさい。　$y = x^2 - 2x + 4\ (-2 \leqq x \leqq 3)$ （東京書籍教科書DVD評価テストから）　$= (x-1)^2 + 3$	
	◎教師やミニティーチャーから丸をつけてもらったり、アドバイスをもらう。 丸をもらった生徒は、ミニティーチャーとして歩き回って丸を付けに行く、アドバイスをする。	◎解き終わった生徒に挙手させ、教師が丸付けを行い、丸をもらった生徒は、ミニティーチャーとして歩き回って他の生徒に丸付けやアドバイスをするよう指示する。 評価 ・定義域に制限がある場合の最大値・最小値を求めることができる。【知識・技能】 ・最大・最小を求める過程で、２次関数のグラフを活用しようとしている。 【主体的に学習に取り組む態度】
	(2) ○本時の振り返りとして今日のMVPとその理由、自己評価（A・B・C）とその理由をワークシートに記入する。 ○確認問題が終わり、自己評価を書き終わったら、本時の類題で構成された練習問題を解く。練習問題は教科書の問、Training、演習問題からの出題のため、教科書を見て丸付けをする。早く終わったらワークを解く。 （※進み具合、残り時間による）	(2) 本時の振り返りとして今日のMVP、自己評価（A・B・C）とその理由をワークシートに記入させ、発表者（席順毎時間日替わり２名）を指名しておく。 ☆本時の振り返りをしっかりと記入するように声掛けをする。 ○本時の類題で構成された練習問題を解かせる。練習問題は教科書の問、Training、演習問題からの出題のため、教科書を見て丸付けをさせる。早く終わったらワークを解かせる。 （※進み具合、残り時間による）
	(3) ◎机を４人班に組み、パソコンを開き、Slackからクラスのジャムボードを開く。９つの班それぞれの班のページの課題に班長を中心に役割分担（問題づくり、式変形、グラフ、答え）をして協働しながらタッチペンで画面に書き込み、取り組む。 （※進み具合、残り時間による）	(3) ◎机を４人班に組ませ、パソコンを開き、Slackからクラスのジャムボードを開かせる。９つの班それぞれの班のページに用意しておいた課題に班長を中心に役割分担をさせて、４人で協働させながら取り組ませる。 ※タッチペンを班員分持って行かせる。 ☆各班の画面をプロジェクターで投影しながら、声掛けをし、助言をする。 （※進み具合、残り時間による）
	(4) ○パソコンを落とさないように注意して机を戻し、自己評価と理由を指名された２名は全体に発表する。 ○ワークシートを前に回して回収する。班でタッチペンを回収する。	(4) ○パソコンを落とさないように注意させて机を戻させ、自己評価と理由を指名しておいた２名に全体に発表させる。めあてと関連させたこと、数学的な用語などを含めた場合にはその点を認めて紹介する。 ○ワークシートを回収、タッチペンを返却するように指示を出す。

２－３－９　学習指導案　ワークシート

以下が、本時で使用したワークシートである。（Ａ４用紙　両面２in １で印刷）



数Ⅰ　2章 2次関数

学習日　/

1年　組　番

氏名

めあて（今日のゴール）

⑬

拡習コーナー　平方完成しなさい。

(1) $y=x^2-2x-2$　(2) $y=x^2+2x+2$　(3) $y=x^2-2x+4$

限られた範囲での最大値・最小値

関数について，$-2\leqq x\leqq 3$ や $x<0$ のような x のとり得る値の範囲を

＿＿＿＿＿＿という。

$y=x^2-2x-2\ (-2\leqq x\leqq 3)$ のように，式の後ろに（　　）で表す。

$-2\leqq x\leqq -1$　$-2\leqq x\leqq 2$　$2\leqq x\leqq 4$

大　小　大　小　大　小

例　次の２次関数の最大値と最小値を求めなさい。

$y=x^2-2x-2\ (-2\leqq x\leqq 3)$

1 平方完成する。

$=(x-1)^2-3$

2 ＿＿に凸

頂点（　，　）y切片は＿＿＿

3 グラフをかく

4 定義域の端の値を最初の式に代入し値を調べグラフに書き込む

答 $x=$　　のとき最　値＿＿＿

$x=$　　のとき最　値＿＿＿

$x=$　　のとき　$y=$

$x=$　　のとき　$y=$

問　次の２次関数の最大値と最小値を求めなさい。どちらに凸，頂点，y切片，定義域の端の値，グラフ，答えを書くこと。

$y=x^2+2x+2\quad(-4\leqq x\leqq 1)$

1 平方完成する。

$=(x+1)^2+1$

2 ＿＿に凸

頂点（　，　）y切片は＿＿＿

3 グラフをかく

4 定義域の端の値を最初の式に代入し値を調べグラフに書き込む

答 $x=$　　のとき最　値＿＿＿

$x=$　　のとき最　値＿＿＿

$x=$　　のとき　$y=$

$x=$　　のとき　$y=$

1年　組　番

氏名

裏面にも必ず名前を書くこと。名無しは評価に入らない。

確認問題の解答例（プレテストにおける1）　これができれば，今回のめあて達成！

次の２次関数の最大値と最小値を求めなさい。途中式，グラフ，答えを書くこと。解答欄の下のスペースに解答せよ。

今日のイイトコ（授業のために・みんなのために）

＿＿＿＿＿＿さん　です。

理由

ミニティーチャーの振り返り

＿＿＿人に教えました（○つけました）

「めあて」の達成度は？A～Cに○印をつける

A	B	C

自己評価の理由や考えたこと・感想

今回は，教科書 p. 82 の内容を学習しました。ワークは p. 91 までできます。

$y=x^2-2x+4\ (-2\leqq x\leqq 3)$

1 平方完成する。

$=(x-1)^2+3$

2 ＿＿に凸

頂点（　，　）y切片は＿＿＿

3 グラフをかく

4 定義域の端の値を最初の式に代入し値を調べグラフに書き込む

答 $x=$　　のとき最　値＿＿＿

$x=$　　のとき最　値＿＿＿

$x=$　　のとき　$y=$

$x=$　　のとき　$y=$

練習問題

２次関数の最大値または最小値を求めなさい。

教科書 p.82 問３　（答 p.180 を見て丸付け）

(1) $y=(x+1)^2-2\ (-3\leqq x\leqq 2)$　(2) $y=-x^2-6x+3\ (0\leqq x\leqq 2)$

教科書 p.91　Training の２番　（答 p.181 を見て丸付け）

(1) $y=(x-3)^2+5\ (2\leqq x\leqq 5)$　(2) $y=-2(x-1)^2+3\ (-1\leqq x\leqq 1)$

(3) $y=x^2+6x+8\ (-2\leqq x\leqq 0)$

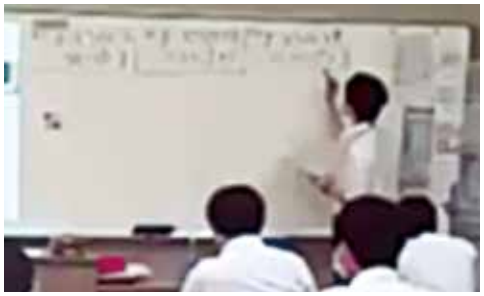
教科書 p.169 演習問題２章２次関数の５番　（答 p.186 を見て丸付け）

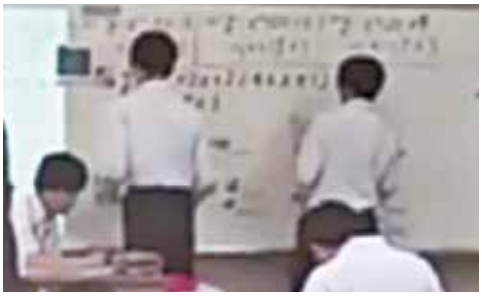
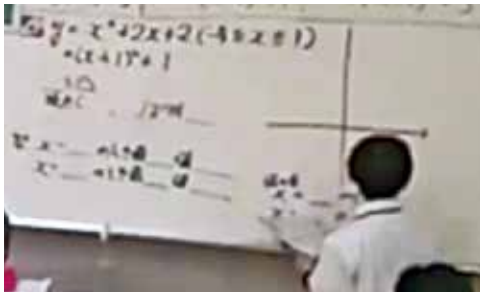
(1) $y=x^2-2x+2\ (-2\leqq x\leqq 0)$　(2) $y=x^2-2x+2\ (0\leqq x\leqq 3)$

２－４　授業のプロトコル分析

本節では、実際の授業のプロトコル分析（Ｔ－Ｓ型授業記録）を以下の表６の通り示す。

表６

0:00	授業開始、号令 （黙想）		Ｔ：はい、となります。じゃ、平方完成は今やったので、それ今日の例題と問でヒントとして使っていきたいと思います。
1:00	Ｔ：数学係さん Ｓ（数学係）：（ワークシート返却、配布）	6:50	Ｔ：では、内容行きましょう。限られた範囲での最大値・最小値です。関数について x が－２以上３以下、x は０未満のような x のとり得る値の範囲。定義域と言います。 $y = x^2 - 2x - 2$ ここにかっこつけて、x は－２以上３以下、式の後ろにかっこで表す。一番左、－２以上－１以下、このような、ここの範囲だけで最大値最小値考えますよっていう。前回はずっと x 軸の範囲でしたけど、この狭い範囲でここで見ると一番大きいので最大値、ここが最小値。
2:00	Ｔ：復習コーナーどうぞ。 Ｓ：（ワークシートの復習コーナーを解く。） Ｔ：（机間指導） 		
5:00	Ｔ：めあてを読みます。定義域がある最大値・最小値をマスターしよう。はい。 Ｓ（全員）：定義域がある最大値・最小値をマスターしよう。 	8:02	Ｔ：真ん中ですとこの黄緑の部分定義域。－２以上２以下ですとここが一番大きいので最大値、頂点の所が最小値。 Ｔ：右ですと２以上４以下では、この範囲。一番大きいのが最大値、ここが最小値となる。
	Ｔ：今日も３つ向けなさいということで、目と耳と心で聞きましょう。聞いて分かる、書いて分かる。声に出して分かる。人に教えて分かるまでやりましょう。	8:42	Ｔ：では、定義域ある中で最大値最小値考える例題が右上。 Ｔ：次の２次関数の最大値と最小値を求めなさい。 $y = x^2 - 2x - 2$ 定義域が－２以上３以下です。では、さっき復習コーナーで平方完成してますので、あれ使っていきますね。ここまでやりました。はい。じゃあ、ちょっと聞きながらやりますね。
6:00	Ｔ：ではまず、復習の答え合わせです。１番○○さん。いきなり答えの方を。 Ｓ：$y = (x - 1)^2 - 3$ Ｔ：はい。となります。２番○○さん。 Ｓ：$y = (x + 1)^2 + 1$ Ｔ：はい、となります。３番○○さん Ｓ：$y = (x - 1)^2 + 3$ 		Ｔ：どちらに凸になるでしょうか？○○さん。どっちに凸でしょう。 Ｓ：下に凸。 Ｔ：はい、こっちの形になります。頂点は。○○さん。ヒント（平方完成した式から矢印を表示）、 Ｓ：（１，－３） Ｔ：はい、じゃあ y 切片は、○○さん。 Ｓ：－２

	T：はい。じゃあ x 軸 y 軸準備して T：（グラフをかきながら）まず頂点書きます。（1，－3）、通る点 y 切片書きます。で、下に凸なので。前回みたいに放物線書いて。で、今日は定義域ありますので、定義域の端の値－2と3の時の y の値調べたいと思います。	18:00	T：（机間指導）
11:30	T：はい、－2のときは最初のこの式の x の所に－2代入します。（式を表示しながら）－2の2乗、－2（－2）－2です。なんでしょうか。○○さん S：4＋4－2 T：4＋4－2は。 S：6 T：はい、－2のとき6。もう1個定義域の端の値3のとき、3を最初の式に代入します。3の2以上、－2・3－2はい。○○さん。 S：9－6－2 T：はい。（ヒントを出しながら） S：1 T：はい。3のとき y は1 T：じゃ、グラフを定義域の範囲に狭めて、わかりやすく。－2のとき、ここからこう、3まで(グラフをかきながら)。 T：前回、全体で見たんですけど、今回はここだけで最大値・最小値を見ていきます。はい、そうすると○○さん、最大値の方は x 何の時でしょう。 S：－2 T：最大値は S：6 T：はい、○○さん最小値の方は x 何のとき。 S：1 T：はい、○○さん最小値は。 S：－3 T：このようにしてやっていきたいと思います。では、例題がうまったら問をやります。（問の式を板書）	21:00	T：できた人は丸もらいに来て、分からない人は質問に来てください。 S：（ワークシートを持って並ぶ） T：（教卓で個別指導しながら丸付けをし、板書する生徒と発表する生徒の指名も同時に行う。） S：（指名された生徒は板書する） 
16:00	T：じゃあ問はこちらの式でやってみます。平方完成はさっきやってたのでこれ使って。 S：（自力解決） T：（ホワイトボードに解答で使う解答欄、座標軸を板書して準備） 	22:00	S：（隣近所の生徒と交流しながら正解にたどり着こうとしている。） S：（列に並ぶ移動時に仲良し同士、話し掛け、教え合いをしている。）

23:00 S：(並ぶ前に確認し合っている。)

24:00 T：(難しいからか、なかなか丸をもらいにくる列が伸びないので、２回目の机間指導。)

26:00 T：(再び丸付け、個別指導)

S：(正解した生徒が、各所で教え合いをしている。)

30:00 T：はい、じゃあ、(コーチングしている生徒に対して) ありがとうございます。じゃあ、○○さんが説明します。

S：まず下に凸、頂点が（－１，１)、y 切片が２でグラフをかいて、定義域の端の値が x ＝－４のときが y ＝10。で、x ＝１のときが y ＝５で、x ＝－４のとき最大値10、で、x ＝－１のとき最小値１となります。

T：ありがとうございます。

S：(拍手)

31:00 T：はい、じゃあ確認問題行きたいと思います。(問題を板書)

S：(できたら手を挙げる)

T：(机間指導、丸付け)

32:40 T：はい、正解です。

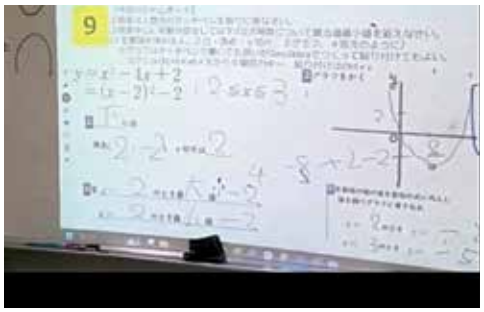
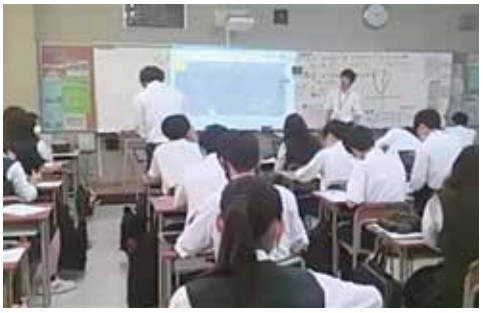
S：(正解した生徒はミニティーチャーとして歩き回って丸付けをする。)

37:00 T：(ミニティーチャーに) ありがとうございました。

S：(自分の席に着く。)

T：では、机をＴ字にしてください。

S：(机を４人グループのＴ字型に組んで、Chromebookを開き、タッチペンを前から持っていき、Google Jamboardの課題に取り組む。)

			S：（机を戻す。） T：自己評価発表です。○○さん。 S：自己評価はＡです。簡単にできたからです。 T：はい、ありがとうございます。 S：（拍手）
42:00	T：すみません、定義域を書き込む欄なかったので画像貼り付けるので、定義域入れてください。大変失礼しました。 T：（各班が書き込んでいるジャムボードをリアルタイムでプロジェクターに投影。） 		 T：はい、○○さん。 S：自己評価はＡです。すらすら解けたからです。 T：はい、ありがとうございます。 S：（拍手） T：プリントは前の人に渡して、タッチペン返して下さい。 S：（ワークシートを前の人に渡して列ごとに集める。）
48:00	T：はい、グループ活動終わります。	50:00	（号令）

２－５　授業検討会

本節では、授業後に行われた授業検討会についてまとめる。

導入については、「（めあて「定義域のある最大値・最小値をマスターしよう」が）明確でやりやすい」「（黙想30秒から）落ち着いてスタートしていた」。

展開については、授業の内容に入ってから例題までが「15分で終えていてスムーズである」「数値のチョイスが本質を捉えさせるのにちょうど良かった」。ただし、例題の後には「どうやって解いたかのまとめをしてから進むと良いのではないか」といった指摘があった。

授業終盤のまとめについては、確認問題のミニティーチャーの活動で「時間を十分に充てていて良い」「教師側にも学びがある」「皆積極的に参加している」。ジャムボードの活動では「メタ文字は投影するまで時間が掛かるが、ジャムボードは生徒側での記入からプロジェクターまで一瞬で投影出来ていて良いと思った。」。

授業全体については、「（教員の）ひきつける力があった」「昨年度も素晴らしかったが、一段と進化している」「憧れると思うし、モチベーションにつながる」「授業公開も良い研修で、意義のある研修だった」等の意見・指導・助言があった。

２－６－１　生徒の授業前後及び授業中の状況

表７

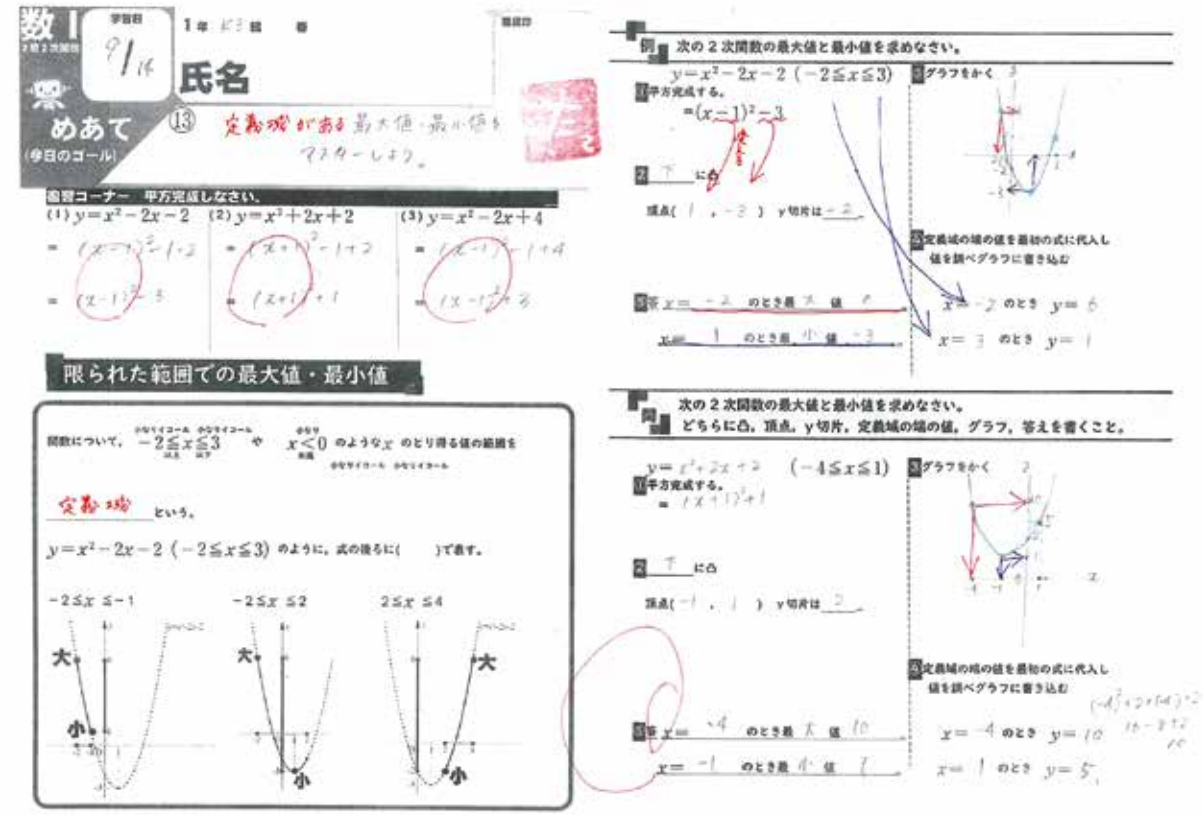
	授業前		授業中			授業後		
※生徒名番号は伏せる	４月 GTZ値	6月 １学期考査点数による分類	問の状況	確認問題の状況	自己評価	11月 ３学期考査該当問題（基本）	11月 ３学期考査該当問題（記述）	９月 GTZ値
生徒A	Ｂ１	◎	正解	正解	A	正解	正解	Ａ２　↑
生徒B	Ｄ１－	◎	正解	正解	A	正解	正解	Ｃ１＋　↑
生徒C	Ｄ２－	◎	正解	正解	A	正解	正解	Ｃ２－　↑
生徒D	Ｄ２－	◎	正解	正解	A	正解	正解	Ｃ３＋　↑
生徒E	Ｄ３＋	◎	正解	正解	A	正解	正解	Ｃ３－　↑
生徒F	Ｄ３＋	◎	正解	正解	B	正解	正解	Ｄ２＋　↑
生徒G	Ｄ３＋	◎	正解	正解	A	不正解	正解	Ｄ２－　↑
生徒H	Ｃ２－	○	正解	正解	無記入	正解	正解	Ｃ２＋　↑
生徒I	Ｄ１＋	○	正解	正解	A	正解	不正解	Ｄ２－
生徒J	Ｄ１－	○	途中（グラフ）	途中（グラフ）まで	B	不正解	不正解	Ｄ２＋
生徒K	Ｄ１－	○	正解	正解	B	正解	正解	Ｄ２－
生徒L	Ｄ２＋	○	正解	正解	A	正解	不正解	Ｄ２＋
生徒M	Ｄ２－	○	正解	正解	A	正解	正解	Ｄ２－
生徒N	Ｄ３＋	○	正解	途中（最大値）まで	A	正解	不正解	Ｄ３＋
生徒O	Ｄ３＋	○	正解	正解	C	正解	正解	Ｄ３＋
生徒P	Ｄ３＋	○	正解	正解	A	正解	正解	Ｄ３＋
生徒Q	Ｄ３＋	○	正解	正解	B	不正解	不正解	Ｄ３＋
生徒R	Ｄ２＋	●	－	－	－	正解	不正解	Ｃ３＋　↑
生徒S	Ｄ２＋	●	途中（グラフ）	途中（平方完成）まで	B	正解	正解	Ｄ３－
生徒T	Ｄ２－	●	正解	正解	C	正解	不正解	Ｄ２－
生徒U	Ｄ２－	●	正解	途中（グラフ）まで	無記入	―	－	Ｄ３＋
生徒V	Ｄ２－	●	正解	正解	B	不正解	正解	Ｄ３＋
生徒W	Ｄ３＋	●	正解	途中（グラフ）まで	C	正解	不正解	Ｄ１－　↑
生徒X	Ｄ３＋	●	正解	正解	B	－	－	Ｄ３＋
生徒Y	Ｄ３＋	●	正解	正解	A	正解	不正解	Ｄ３＋
生徒Z	Ｄ３＋	●	正解	正解	A	正解	不正解	Ｄ３＋
生徒AA	Ｄ３＋	●	正解	正解	A	正解	不正解	Ｄ３＋
生徒AB	Ｄ３＋	●	正解	途中（グラフ）まで	C	不正解	不正解	Ｄ３＋
生徒AC	Ｄ３－	●	最小値不正解	途中（値の手前）まで	B	不正解	不正解	Ｄ３＋　↑
生徒AD	－	●	正解	正解	C	正解	不正解	Ｄ３－
生徒AE	Ｄ３－	△	正解	正解	B	正解	正解	Ｄ３＋　↑
生徒AF	Ｄ３－	△	正解	正解	A	正解	正解	Ｄ３－
生徒AG	Ｄ３－	△	途中（切片）	途中（切片）まで	C	正解	不正解	Ｄ３－
	※表８参照	◎　７人 ○１０人 ●１３人 △　３人	正　解 ２８人 未正解 ４人	正　解 ２４人 未正解 ８人	Ａ１５人 Ｂ　９人 Ｃ　６人 無記入２人	正　解 ２５人 不正解 ８人	正　解 １６人 不正解 １７人	※表８参照

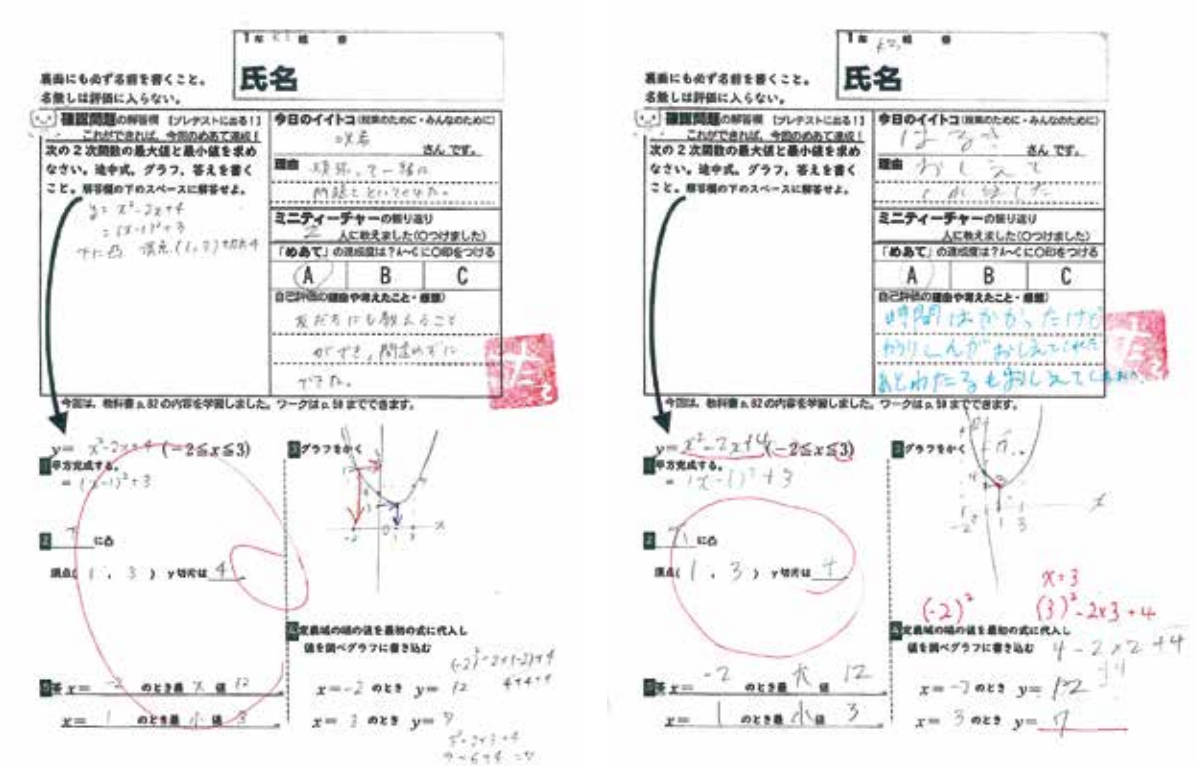
表３列目の分類は、◎最上位群、○上位群、●中位群、△下位群である。

表８　ベネッセ基礎力診断テストGTZ値の変化

GTZ	進学・就職・学力の目安	４月	９月
Ａ２	一般入試で大学合格が目指せる・公務員試験で合格が目指せる・競争率が高い企業で合格が目指せるレベル	０人	１人
Ｂ１		１人	０人
Ｃ１	推薦入試で大学合格が目指せる・一般的な入社試験で合格が目指せるレベル	０人	１人
Ｃ２－		１人	２人
Ｄ１＋	短大・専門学校の合格が目指せる・就職後に仕事に取り組む上で最低限の学力が身に付いているレベル	１人	０人
Ｄ１－		３人	１人
Ｄ２＋		３人	３人
Ｄ２－		６人	５人
Ｄ３＋	義務教育の学習内容が身に付いていないレベル	14人	13人
Ｄ３－		４人	４人

２－６－２　生徒のワークシートの実際

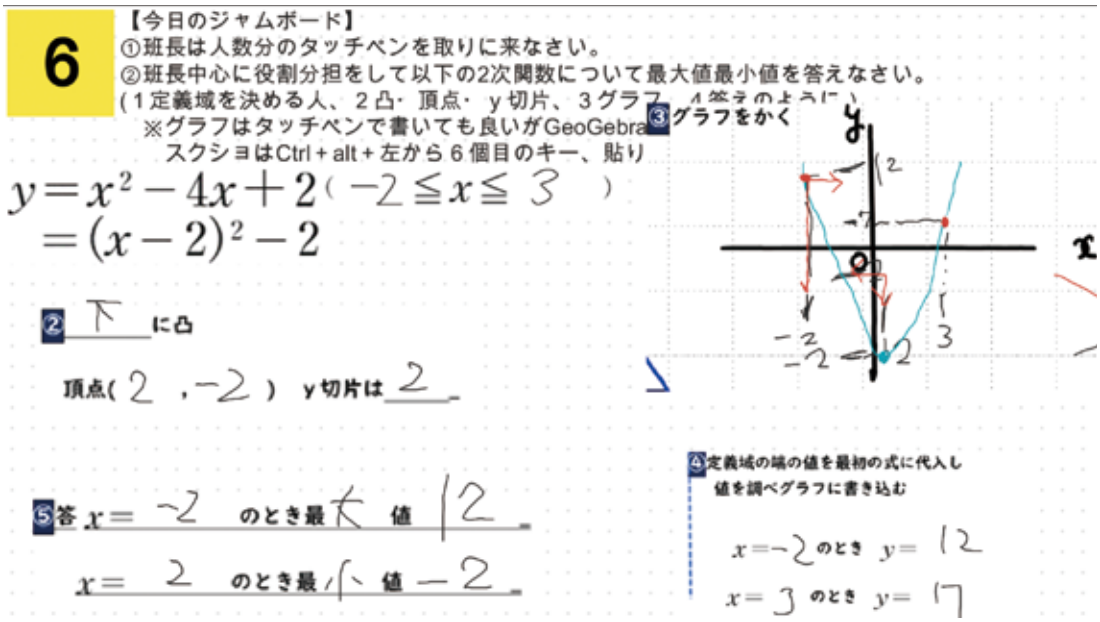




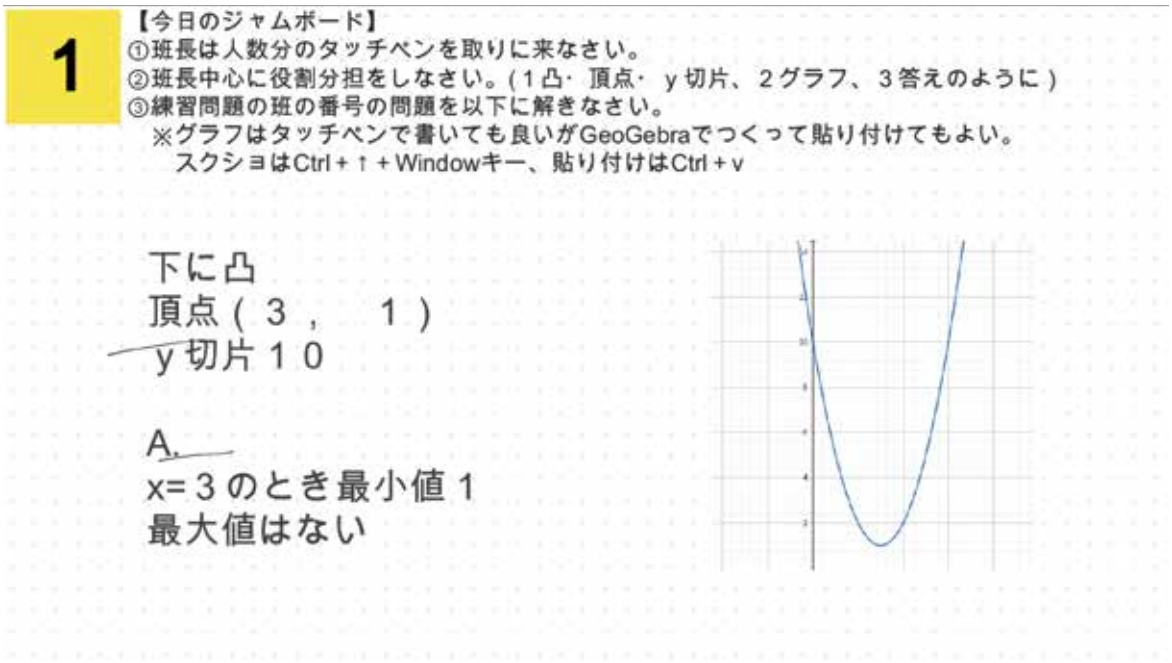
自己評価の理由や考えたこと、感想から

- できなかったところがあったけど、教えてもらって解けました。
- 友達にも教えることができ、間違わずにできた。
- 今日の問題は簡単な計算もできなくなるくらい難しかったので、解けるようになりたいです。
- 時間はかかったけど、佑理君が教えてくれた。あと渉も教えてくれました。
- 悩みましたが、できました。
- 難しかったけど、最後まで解けました。

２－６－３　ジャムボードの実際



※前時の授業のジャムボード　Geo Gebraの活用とジャムボードのテキストボックスを貼り付けた例



２－７　第２章のまとめ

本章では、筆者がどのように『生徒の主体的な学びを支援するツールの有効性とそれらのツールを活用した数学の授業展開』を考え、実践したのかを詳しく述べてきた。令和５年度の１年生に対応したChromebookを活用した授業を準備するための年度当初の授業づくりに始まり、ブラッシュアップ研修の学習指導案、授業検討会、プロトコル分析、生徒の授業前・授業中・授業後の詳細なデータ、更には実際のワークシート、自己評価の理由、実際のジャムボードについて述べた。第１章で示した支援ツール①ワークシートと②教師側のICT機器（Power Pointのスライドショー）、③教え合い活動、④生徒側のICT機器（１人１台端末）、⑤認め合い活動をフル活用した授業を計画し、実際に展開することができた。その結果、授業の問では28人、確認問題では24人が正解し、該当の問題の定期考査での基本と記述の正解率も半数に迫った。また、プロトコル分析からも分かるように、生徒が主体的に教え合いを行ってめあて（目標）の達成に向かう姿があった。本研究の目的『生徒の主体的な学びを支援するツールの有効性とそれらのツールを活用した数学の授業展開』について、５つのツールは生徒の主体的な学びを支援するために十分な有効性を示すと言えると筆者は考える。

終章　本研究のまとめと今後の課題

３－１　本研究のまとめ

本研究は、生徒の主体的な学びを支援するツールの有効性とそれらのツールを活用した数学の授業展開について考えることを意図していた。本章では、前章まで述べたことをまとめ、本研究のまとめと今後の課題について述べる。

第１章では、筆者が本研究のテーマ設定に至る経緯から、５つの支援ツール（①ワークシート、②教師側のICT機器（Power Pointのスライドショー）、③教え合い活動、④生徒側のICT機器（1人1台端末）、⑤認め合い活動）の活用が生徒の主体的な学びの支援に有効に機能するという立場に立つことを述べた。そして、生徒の主体的な学びを支援するツールの有効性とそれらのツールを活用した数学の授業展開を考えることを本研究の目的、基本的立場とした。

第２章では、ブラッシュアップ研修の学習指導案、授業検討会、研究授業のプロトコル分析、生徒の授業前・授業中・授業後の詳細なデータ、更には実際のワークシート、自己評価の理由、実際のジャムボードについて詳しく述べた。問の正解数のデータと実際の授業中の様子から、前述の５つのツールが主体的な学びを支援するために十分な有効性を示していることを明らかにした。

３－２　今後の課題

本研究では、５つの支援ツール（①ワークシート、②教師側のICT機器（Power Pointのスライドショー）、③教え合い活動、④生徒側のICT機器（1人1台端末）、⑤認め合い活動）は、生徒の主体的な学びのために有

効であるという立場から、筆者の実践を紹介し、検証してきた。筆者なりの考えでまとめたが、至らない点は多々ある。以下、今後の課題について述べる。

ICT機器の活用が、主体的な学びを支援する一番のツールなのかどうかは今後更に検証が必要である。更には学力向上の視点からもICT機器の活用が有効かどうかが測れるような研究もしていきたい。ニュース記事によるとICT教育を積極的に取り入れていたスウェーデンでは、「2010年にタブレットやPCを１人１台付与する計画を進め、紙の教科書を原則として廃止するなど、思い切ったIT活用に踏み切った。」[20] しかしその後「2023年８月中旬から始まった新学期では、スウェーデン全土の学校で、印刷された本や静かに本を読む時間、手書きの練習に重点が置かれている。その分、タブレットを使った自主的なオンライン調査、キーボード操作のスキルに割く時間は減らされた。」[21] とあり、「教育へのデジタル化アプローチが基礎的な学力の低下につながっているのではないか」[22]「デジタル情報源から知識を得るのではなく、印刷された教科書と教師の専門知識を通じて知識を得ることに重点を戻すべきだ」[23]「テクノロジーによって何が効果的なのか、よく分かっていない」[24] などと様々な意見間で揺れている状況である。実際、学級の保護者から「デジタルでの勉強がやりづらいようだ」という意見も一部で聞かれた。主体的な学びを支援し、学力も保障するツールの有効性をICTも含め様々な面から更に検証することが、今後の喫緊の課題である。

最後に、本研究で重要なツールの一つであったGoogle Jamboardが2024年10月１日より利用できなくなるという点についてである。ホワイトボードツールの移行先としてFigma、Figjam、Lucidspark、Miroが紹介されている。Google Jamboardでは、無料で20ページまでのホワイトボードが使用でき、自由な書き込みやテキストボックス、付箋、画像の貼り付けなど柔軟な編集が可能であった。先行研究も参考にしながらGoogle Jamboardで取り組んできた活動を同程度で維持できるものかどうか、Google Jamboard以上に学びを支援するツールとなり得るかどうか、こちらも10月までの喫緊の課題である。

以上の課題を踏まえて、今後も更に調べ、考え、実践を通して、研究を深めていきたい。

引用・参考文献一覧

１，斎藤康夫（2014）、生徒の試行を妨げない、学びに機能するワークシートのあり方、数学教育No.685、明治図書、p.10
２，岡寺裕史（2022）、板書を授業モデルと対応させる、数学教育No.778、明治図書、p.36
３，武藤寿彰（2015）、思考がより深まる学習形態の工夫、数学教育No.690、明治図書、p.38
４，諏訪哲也（2022）、ホワイトボードアプリの活用アイデア、数学教育No.781、明治図書、p.24
５，鈴木詞雄（2022）、Chromebookでつくる小学校算数の授業、明治図書
６，文部科学省（2019）、高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説数学編理数編、p.41
７，IDEAS FOR GOOD　IT先進国スウェーデン、学校で紙と鉛筆のアナログ教育に戻る計画を発表｜https://ideasforgood.jp/2023/09/27/sweden-schooling/

[20] IDEAS FOR GOOD　IT先進国スウェーデン、学校で紙と鉛筆のアナログ教育に戻る計画を発表｜https://ideasforgood.jp/2023/09/27/sweden-schooling/
[21] 上掲書
[22] 上掲書
[23] 上掲書
[24] 上掲書

教員１年目の実践と展望

特別進学コース　　佐藤　宏成

１．はじめに

令和５年度は、筆者にとって教員生活の第一歩を踏み出した１年であり、非常に多くの有意義な経験をすることができた。１年間を通して、意図することを実践できたこともあれば、そうはいかずに反省した点も多々ある。本稿では、筆者の教員初年度を振り返り、クラス担任や授業担当者としての実践やそこから得た学び、今後の展望を報告することを目的とする。

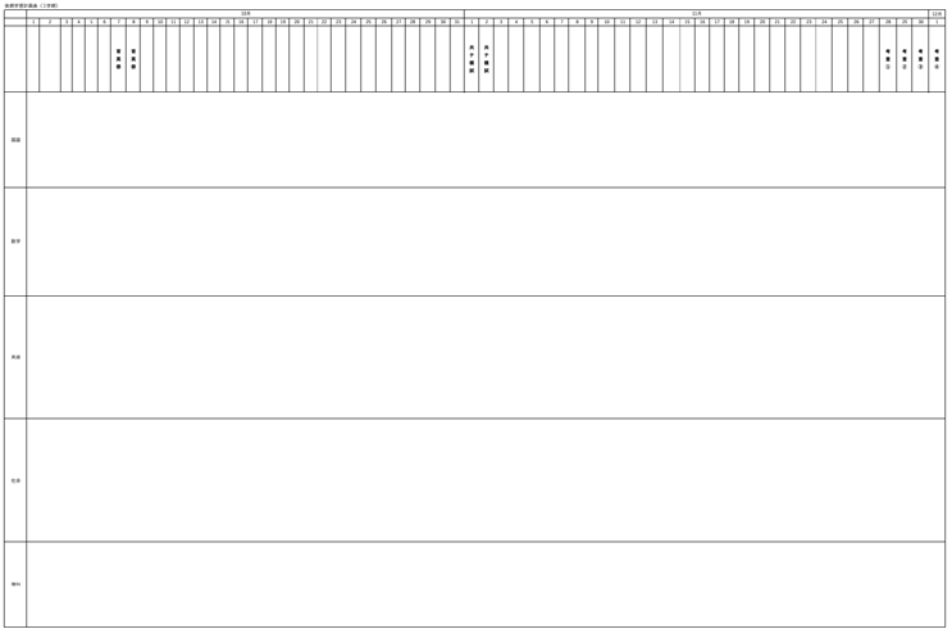
２．実践報告

２－１．クラス運営での取り組み

筆者が担任を受け持った２Ｔ４組の生徒たちは、行事や日頃のクラス運営では頼りになる活発な人物が多かった。一方、学習面では新学期当初の実力考査のクラス平均点で学年最下位であり、１年生の頃から学習に対するモチベーションが上がらず基礎が疎かになっている生徒多く在籍していた。学級の雰囲気としても、全体として学習に向かう姿勢が整っているとは到底言えず、４月の面談の際には、真面目に勉学に励みたい生徒から不満がこぼれることもあった。

そのような状況の中で、生徒たちが自発的に学習し、翌年度受験生としてふさわしいスタートを切れるように、学習に対して「やればできる」という意識を根付かせようということを私自身のテーマとした。これを実現するために「学習進捗の報告」「面談」「放課後特別学習会」の３点に注力した。

まず、「学習計画・進捗の報告」についてであるが、これはA3の学習計画表と自己分析シート（資料１，２）とA4の学習進捗シートを活用した。学習計画表では、学期ごとにどのような学習に取り組みたいかを書かせるのだが、書き出す前に裏面に印刷された自己分析シートに取り組ませた。自己分析シートには、これまでの学習内容を振り返ることで苦手を洗い出す欄を設け、苦手科目に対しても目を向けることや自分の学力・学習状況を理解するメタ認知能力を鍛えさせることを目指した。長期的な視点から学習をとらえる学習計画表と自己分析シートに対して、学習進捗シート（資料３）は短期的な視点（１週間を１単位として）での学習計画や実施記録に用いた。学習進捗シートの教員視点の目的は「生徒の日々の学習を把握し、より具体的かつ適切なアドバイスを送ること」。生徒視点の目的は、「１週間のサイクルの中で学習するリズムを身に着けること」と「自身の学習傾向を知ること」であった。当初はClassiに備えられている「学習記録」を使用していたが、生徒からは「１週間の内容を一目で見れるほうが、より計画的に進められ、モチベーションも上がる」といったフィードバックを受けたため、あえてアナログ媒体を採用した。週に２度回収し、その都度フィードバックを返した。



資料１　学習計画表（令和５年度３学期用）

自己分析シート

入試に必要な科目	

その科目における苦手分野

英語	
数学	
国語	
（社会）	

二学期までの反省点

英語	
数学	
国語	
（社会）	

３学期はどの分野を、何を使って、いつまでに潰す？

英語	分野		手段		期日	
数学	分野		手段		期日	
国語	分野		手段		期日	
（社会）	分野		手段		期日	

資料２　自己分析シート（令和５年度３学期分）

学習進捗シート　　氏名

	月	火	水	木	金	土	日	教科コメント
国語								
数学								
英語								
社会								
理科								
その他								
１日のコメント								

資料３　進捗管理シート

次に「面談」についてである。いわゆる面談週間に行う面談以外にも定期的に生徒と１対１で話す機会を設けた。具体的なタイミングとしては、小テスト後、定期テスト後、模試後など、それまでの学習を振り返り、その後の学習方針を確認するべき時期に行った。面談では、学習習慣のない生徒に対して筆者が具体的な学習事項を提示し、遂行してもらうように促した。それを実際に行ってきた場合には、まるで自分で考えてやってきたかのように生徒を褒め、少しずつ自分で考えて学習することを期待した。また、生徒を褒める際には結果ではなく過程を褒めることに努めた。これは、過程を褒めることで「自分の努力が認められた」という認識を持ってもらい、さらに挑戦しようとする姿勢を育もうと考えたからである。

最後に「放課後特別学習会」についてである。これは小テストなどで基準点に満たなかった生徒を招待し、放課後にHR教室で自習してもらう取り組みである。いわゆる補習のようなものだが、「補習」という言葉は使わず、あくまで積極的に学習することで自らの学習習慣や内容を改善する機会だと位置付けた。また、面談を通して、家に帰ると集中して学習できない生徒が多いことが判明したため、学校に残って学習するきっかけになることも期待した。

２－２．授業での取り組み

昨今の教育業界においては、ICT技術の活用により子供たちに様々な学びの機会が提供されている。大手塾、予備校などでは資金と労力をつぎ込んだ映像授業を展開し、YouTubeでは無料で多岐にわたる学習動画を視聴することができる。デジタルネイティブともいわれる今の生徒たちは、このような映像による学びを抵抗なく受け入れることができることだろう。一方、平成30年に告知された学習指導要領において、生徒の「資質・能力」の育成を目指して「主体的・対話的で深い学びの実現」が示され、生徒同士が対話を重ねながら議題を解決する学習者主体の探究学習が強く求められている。このように、生徒たちは現在および今後の社会で必要とされる、「自ら課題を発見し、周囲の人と協働しながら解決する力」を身に着けていかなければならない。このような状況において、全日制学校が提供できる学びとは何かと考えると、筆者はクラスメイトという他者と協働的に学ぶことができる点であるという結論に至った。

そこで授業時間内に協働的な学びの機会をより多く提供するため、筆者は担任をする２Ｔ４組の英語コミュニケーションⅡにおいて授業動画を作成した。授業動画の役割としては、教科書の英文の解説や文法事項の解説を行い、予習課題として取り組むことで、授業時間内に協働的な学習をする時間を十分に確保し、実りある議論を実施するために必要な知識の定着を期待した。授業動画の作成と導入はコストがかからず、容易に実施することができる。パワーポイントの録画機能を使用し、アニメーションや解説の音声を記録した動画を作成し、YouTubeにアップロードした。この際には、授業時にzoomにログインするために使用されているGoogleアカウントを使用し、YouTubeチャンネルを開設した。動画については、一本の動画が長くなりすぎないようにし、具体的には15分以内に収まることを心掛けた。

以上のような事前準備を行ったうえで、授業ではペアワークやグループワークを積極的に実施した。具体的には、ペアでの音読活動や授業動画で理解しきれなかった部分を共有して教え合う活動、英文から読み取ったことを自身の既存の知識や生活に結びつけるという観点から各自の意見を交換するディスカッションを行った。

３．生徒の様子

３－１．担任として接する中での変化

生徒の変化で特筆すべきものは、学習習慣の定着である。年度末にClassi上で実施した１年間の振り返りアンケートでは、

「１年生の頃より圧倒的に学習時間が増えた」

「２年生になってから学習しない日を作らないようにした」

「計画性を意識して学習するようになった」

など、学習に対して継続的かつ計画的に取り組むことができるようになったという回答が見受けられた。実際に、放課後の自習室利用の様子を見てみると、夏頃から栄光校舎3FのGPホールで学習する生徒の中で一番多いのが２Ｔ４組の生徒であり、生徒たちに学習習慣を身に着けさせることができたと評価できる。上述の３つの取り組みの中で最も効果的だったと考えるのはは面談である。もちろん生徒全体に向けてHR等で様々な話を投げかけていくことも、考え方の共有や認識の一致という点で重要であるが、その後個別に状況を確認することでそれぞれに合ったモチベーションの向上につなげることができた。

３－２．授業を通しての生徒の変化

映像授業の導入に対する生徒の肯定的な反応は、４学期考査終了後にClassi上で行った振り返りアンケートよりおおむね以下の通りである。

「動画視聴形式で授業前に予習ができるので、学習をする際のポイントや活用方法をじっくり確認できた。」

「このスタイルになってから、自分で取り組まないと取り残されるという意識になった。」

「予習の習慣がついた」

多くの生徒は授業スタイルの変更にも順応していたという印象である。また、協働的なペアワークやグループワークが増えたことで、「班員の意外な一面を知ることができた」という意見が挙がった。協働的な学習が級友の再発見につながる機会になり得るということは興味深い発見であった。

４．今後の展望

４－１．クラス担任として

生徒の学習習慣の改革には寄与できたと感じる一方で、進路への意識付けは納得できるほどではなかった。もちろん、生徒からの進路に関する質問に対しては、生徒と一緒に情報収集を行い丁寧な対応を心掛けた。しかし、自身の希望進路が決まっていない生徒や、希望する進路があっても志望理由が曖昧である生徒がはっきりとした回答を出す決定的なきっかけを与えることはできなかった。面談の中でオープンキャンパスの情報を提供したり、自身の興味関心から近い学問を紹介したりしたが、生徒の心にはなかなか響かなかった。以上の反省を踏まえ、今後は生徒が体験を通して進路を意識するような働きかけに力を入れたいと考える。具体的には、「総合的

な探究の時間」を通しての指導である。令和５年度特別進学コースの第２学年では、前期には2,000字の志願理由書を書く活動を行い、後期には自身の興味関心のある学問や社会が抱える問題についての発表活動を行った。特に後期の探究活動においては、生徒が視野を広げ今後の進路と結びつけることができる機会であったため、今後は選んだテーマをいかに自分事としてとらえさせるかという観点から、探究活動の指導力を高めていきたい。

４－２．授業担当者として

上述のように、映像授業を活用して協働的な学習の時間を増やす試みは一定の肯定的なフィードバックを受けたが、中には「グループワークが結局雑談になってしまうこともあった」という指摘があった。このような状況を改善するためには、このような形式を実践する初期段階において、グループワークにおけるチェックポイントをいくつか提示し、議論の方向性をある程度定めた上で実施するのが効果的であると考えた。何度か経験させながら徐々に自由度を高めていくことで、ただの話し合いではなく充実した学びの場になると考えた。

また、今回の実験的な取り組みを行ったのは英語コミュニケーションⅡを担当した２Ｔ４組のみであり、論理表現Ⅱを受け持ったクラスでは、授業動画の効果的な活用までは実行できなかった。そのため、来年度は両科目において授業動画を使用し、授業中の活動的な時間を増加させるほか、個人の進度に合わせて動画を視聴する機会を作り、HRクラス以外の生徒に対しても個別に対応できる時間を捻出することに努めたい。

５．さいごに

１年間を振り返ると、自分なりのテーマを持って生徒指導に当たり、その中で一定の成果として挙げられることと今後の課題を見つけることができた。今後の教員人生においても現状に満足することなく、向上心と実行力を持ち続け成長し続けたい。

謝辞

加藤雄彦理事長・校長先生、沖縄校 加藤聖一校長先生には、１年目からHR担任、研修旅行引率、甲子園応援団引率など様々な機会を提供していただきましたこと、心より感謝申し上げます。また、遊佐忠幸副校長先生、久保義洋教頭先生をはじめとする特別進学コースの先生方には、日頃からたくさんの温かいお言葉やご支援をいただき誠にありがとうございました。

IBDPにおけるICTを活用し主体的学習を重視した授業実践

社会科コンダクター　　小松　　敦

1　はじめに

社会科（地理・歴史科、公民科）のBrush Up研修会は初年度から今年で５年目となる。今回は第１回の研修会で授業公開された、IBDPにおけるICTを活用し、生徒の主体的学習を重視した歴史の授業実践を紹介する。

本校は2015年２月にIBDP（International Baccalaureate Diploma Program）＜国際バカロレア ディプロマプログラム＞が認定された。現在、秀光コースと外国語コースでIBDPが行われているが、拙稿は秀光コースの「Ⅲ個人と社会（教科名）、歴史（科目名）HL（ハイレベル）」ので授業実践について紹介する。

今年度の公開授業の中で、今回、特にこの授業実践を紹介する理由は、IBDPとしての授業としてのみに関わらず、日本の普通科・専門学科などの地理・歴史科、公民科の授業一般において、大いに参考になる授業内容であり、今後の授業の在り方を考える上で、様々な示唆を与えてくれる実践であると判断したからである。

なお、本校では秀光コース以外の６コースにおいても観点別評価において、IBのATL Skillsを活用したシラバスの作成や評価方法を積極的に取り入れて活用している。

2　概要

（1）授業研究（授業実践）

授　業　者　：猿渡　涼香　教諭　（秀光コース所属）
対象クラス　：秀光コース　２Ｍ１（在籍生徒数：18名）
当該授業生徒数：文系選択者　11名
教　科　書　：翻訳教科書（原本は英語）
「THE MOVE TO GLOBAL WAR」出版：OXFORD
内　　容　：指定学習項目３：世界規模の戦争への動き
事例研究１：『東アジアにおける日本の拡政策』
＝ナショナリズムと軍国主義が日本外交政策に与えた影響：その起源（1853～1930年）＝
HL選択項目９：東アジアの初期の近代化と帝国の衰退（1860～1912）
「明治維新と近代化」にかけての内容
（＊HL：Higher level）

（2）Unit planner（ユニットプランナー・単元計画書）の概要

IBでは、普段、私たちが作成している学習指導案に該当するものとして、Unit planner（単元計画書）を作成している。本時のUnit plannerの概要については、以下のとおりである。

○ Inquiry & Purpose（探究と目的）

Essential Understandings（本質的な了解事項）として、DP Historyを本格的に学び始めるため、今後の学習方法の指針として留意すべき点と、単元の中で生徒が探究するInquiry Questions（探究課題）を５点設定している。

○ Curriculum（カリキュラム）

Aims（ねらい）は、IBDPならでは５項目を掲げているが、IBDPに限定されるものとしてではなく、新学習指導要領の目標にも通じる内容であり、大切な視点になると思われるので、以下に列挙しておく。

① 個人と社会の性質と活動に関する理論、概念、議論を識別し、批判的に分析し、評価する能力を身につける。
② 社会に関する研究で使用されるデータの収集、記述、分析、仮設の検証、複雑なデータや資料の解釈ができるようになる。
③ 個人と社会を対象とした研究の内容や方法論は議論の余地があり、その研究には不確実性を許容することが必要であることを認識できるようにする。
④ 多角的な視点に立ち、歴史的な概念、問題、出来事、展開の複雑な性質を理解するよう促す。
⑤ 資料の効果的な活用を含む、主要な歴史的スキルを身につける。

○ Objectives（目標）に関しては「知識理解」・「総合と評価」・「応用と分析」の３項目を挙げている。

○ Content（内容）、Skills（スキル）においては、シラバスにて設定された詳細な学習、活動内容と成長

を期待するATLスキルの繋がりを明示する。Concept（概念）ではIBの提示する「歴史において重点を置く主要概念」である「原因」「結果」「重要性」「視点」を関連付けた単元全体の探究課題を２点設定している。

○ ATL Skillsとしては、Thinking（思考）、Communication（コミュニケーション）、Self-management（自己管理）、Research（リサーチ）の４項目を設定し、それぞれのスキルの生徒目標と教員指示内容を明示している。

他にも、Developing IB Learners profile（IB学習者像の成長）、Assessment（評価）、Learning Experiences（学習経験）などの記載がある。

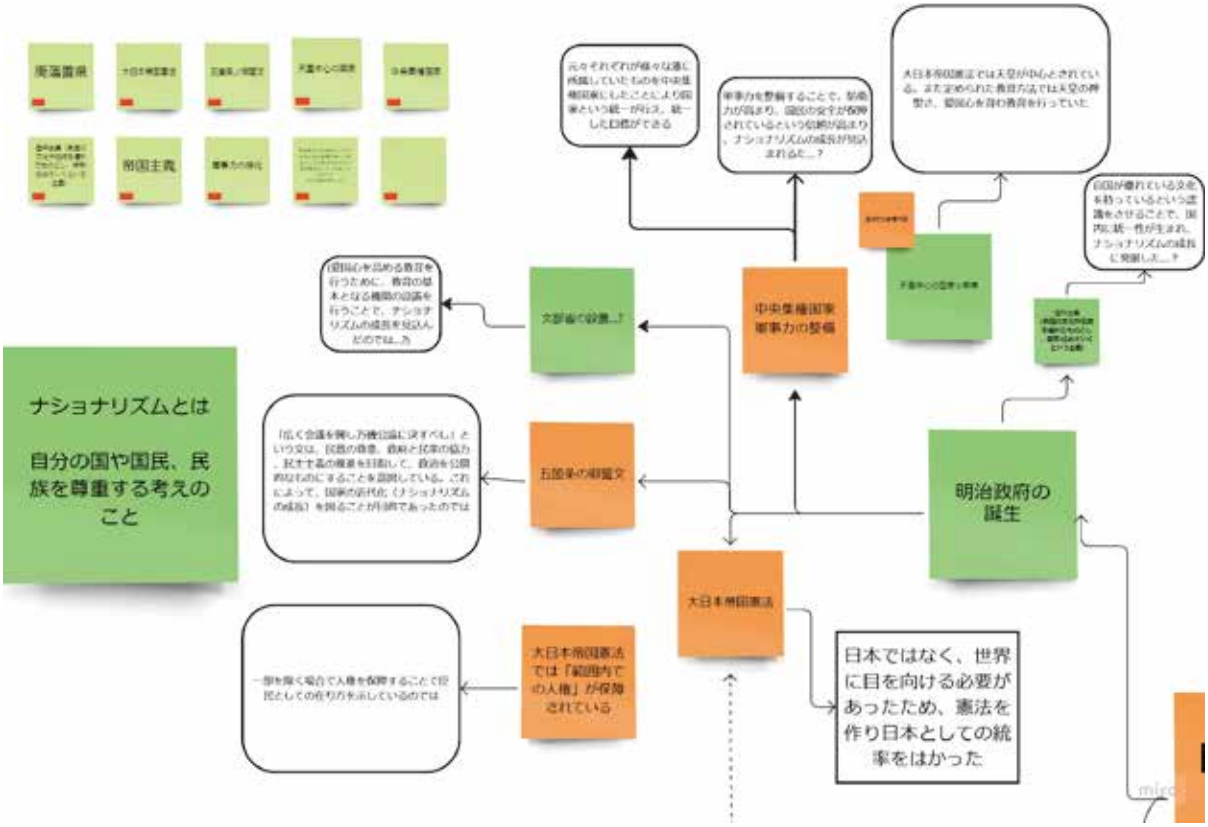
（以上の詳細については、添付資料参照のこと）

３　授業展開の概要

授業内おいては上記の「Unit planner」を実行するためにグループ学習を取り入れ、思考整理や判断の一つのツールとしてICTを積極的に活用し、さらにプレゼンテーションまで行うという生徒の主体性を重視した授業が展開された。書籍を用いた事前学習や、授業時間外でのグループ活動などの自主学習が前提とされている。

公開された実践授業は２時間連続の後半の部分であったが、授業形態として、生徒を４グループに分け、それぞれのグループに本時の学習内容の課題である「明治維新は成功したと言えるか」につながる４つのテーマ（「ナショナリズムの成長」、「封建制度の解体」、「国際関係」、「富国強兵」）を与えて主体的な学習を促すような手法を取っていた。グループ内では授業時間以外の自主的な事前学習も含めて、リモートで共同編集ができるオンライン・ホワイトボードのMiro（＊）を活用して、思考を深める作業を行った。グループ内でディスカッションをしながら、与えられた課題のための考察を共同で進め、意見を集約する活動をするというものである。

その後、グループごとに与えられた課題についてMiroを使用しながら他のグループにプレゼンテーションを



【「ナショナリズムの成長」担当グループのMiro】

行い、情報を共有して質疑応答も行われた。この間、猿渡教諭の学習支援は、必要最小限度の進行やアドバイスのみに留め、あくまでも生徒の主体性を重視した支援に終始していた。

学習内容はかなり高度なもので、豊富な事前学習も含め、幅広い知識と深い思考判断を要するものであった。一般的な歴史学習は、出来事の起因や結果、意義を理解するということに重点を置くという傾向が強いと思うが、猿渡教諭の授業では、様々な歴史的事象を生徒自らが収集し、その因果関係を検討し、歴史的意義を見出すという主体的な学習を主眼とした授業を実践していた。こうした歴史学習は、新課程で求められている学習目標の究極的な形態を具現化しているとも言える内容である。

実際的には、全ての科目で、一年間を通じて同様の形態で授業を展開することは困難であるが、教材の特性に応じて、同様の形態の方式を採用した授業を展開する必要性や重要性を大いに感じさせるものであった。ここにおいて共同作業が可能なICTを活用し、さらにプレゼンテーションまで学習活動の幅を広げるという、一連の授業展開は大いに参考にすべき内容であったと考える。

（＊）「Miro」の機能説明と活用方法については下記のサイトを参照のこと。

Miro公式サイト　：　https://miro.com/ja/

4　本公開授業の特筆する点

（1）令和３年施行の新学習指導要領では、①知識及び技能（何を理解しているか、何ができるか）、②思考力、判断力、表現力等（理解していること・できることをどう使うか）、③学びに向かう力、人間性等（どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか）を育成すべき資質・能力の三つの柱として位置付けている。また、学校教育法第30条第２項では、「生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。」と規定している。今回の猿渡教諭の実践授業は、IBDPのUnit plannerに基づくものであるが、前述の＜３　授業展開の概要＞で記載したとおり、私たち教師が現在求められている上記の新学習指導要領の目標である「育成すべき資質・能力の三つの柱」にも合致した、目指すべき授業を具現化していると言っても過言ではない内容であった。

（2）生徒の主体的学習を促す仕掛けが構造的で効果的であるということである。今回の授業においては、生徒に事前学習として『明治維新の意味』（著者：北岡伸一、発行所：新潮社）という書物を教材として使用している。この書物の内容は、明治維新当時の国際情勢を踏まえて、大きな影響を与えた人物の判断や行動を中心に国家建設の経緯について描かれているものである。高校２年生が読む書物としては多少、難解であると思われるが、日本の教科書とは異なる視点や歴史的評価を見て取ることができ、生徒の幅広い知識の習得や思考を深化させるためには、こうした教材の使用も重要な要素になると考える。生徒には事前にグループごとに複数の情報源から検討すべきテーマを与えており、教科書、資料集、学術論文、ネット検索など様々な教材から必要な情報を取捨選択し思考判断しながら、求めるテーマに対して主体的に取り組む形になっている。

各グループのテーマ学習は、プレゼンテーションの実施によって、最終的に目標としている「明治維新の意味を生徒自ら見出す」という学習目標を実現するようにクラス全体で集約される。その手段の一つとして「Miro」を活用している意味は大きい。「Miro」の共有スペースでの情報共有や作図、ワークショップなど、学習の目的に

応じて生徒の情報処理や思考判断に有効に活用できる。固定しがちな個人の視点を幅広い情報から流動化させ、グループ内やクラス全体で主体的に学びを深化させるツールとしては効果的であったと考える。

5　研究授業検討会

猿渡教諭の実践授業をもとに、宮城教育大学大学院の吉田剛教授の指導の下、授業研究を行った。最初に猿渡教諭から本時の指導のねらいと実践しての感想を話してもらい、それについて社会科（地理・歴史科、公民科）の教諭方らの質問や意見、感想をもとに討議した。
参観した教諭の意見や感想は以下のとおりである。

・Miroを使った授業はとても新鮮だった。
・生徒たちがICTを使いこなし積極的に取り組んでいる様子が印象的だった。
・pick upしたものを教員がどのように補っていくのか、生徒を導くのか、次回の授業の展開も楽しみな授業だった。
・これからの時代の授業に求められる授業の在り方だと感じた。
・大学のゼミのように感じた。
・IBDPの最新の授業内容でとても勉強になった。
・普段とは全く違う授業スタイルで非常に参考になった。
・問いの与え方などによって生徒がここまで動くのかという印象だった。飽きる様子もなく興味をもって授業に臨めているのが素晴らしかった。

これ以外にも多くの質問が出され、活発な質疑応答がなされた。その内容につては割愛する。また、外部講師の吉田剛教諭から、以下のような指導・助言があった。

・指導案に記載されているポイントは、IBならではものであり、日本の指導にはないものである。
・学習内容に対する評価は、スキルを評価する内容になっているが、これはイギリスなど欧米に見られる評価方法である。
・歴史教育において、キーとなるものを最低限押さえれば良いというのが欧米的な教育である。
・日本の歴史学習は、細かいところまで教えるが、IB（欧米）では、重要なところだけを押さえ、歴史的事象の解釈するための設定を多く作るというのが主流である。
・key conceptから考えることが重要である。見方・考え方を重視して、歴史的事象の原因と結果の問いを発することによって、思考させることができる。教師が原因と結果及び意義まで説明してしまうと生徒は考えなくなる。アメリカの歴史教育では、事象の解釈だけを行う。
・参考にする本が難しすぎるように思える。バリエーションを広げてもう少しライトなものを複数与えた方が良いのではないか。
・生徒が難しい参考資料に取り組んでいるのに感心した。
・評価をするときには、総合評価と自己評価を分けて適切に行う必要がある。
・skillsにおいては、思考skillをどのような教科科目でも使用できる汎用的skillを使用するということも考えられる。

以上、本年度の社会科Brush Up研修会の中で実施された、「IBDPのICTを活用し主体的学習を重視した授業実践」を紹介した。

＊執筆協力：猿渡　涼香　教諭（秀光コース所属）

Summary

東アジアの初期の近代化と帝国の衰退(1860～1912) Current Draft

2 of 6 weeks

Subject	Year	Start date	Duration
History	Grade 11	Week 2, May	6 weeks

Course Part

Inquiry & Purpose　探究と目的

Essential Understandings本質的な了解事項

DP Historyを本格的に学び始める最初のユニットであるため、今後の学習方法の指針となる点に留意する。

特に生徒自身による調査・探究活動に重点を置き、文献の検索方法や必要な情報を選択するなど、メディアリテラシースキルや情報リテラシースキル、および転移スキルの育成が期待される。生徒は資料からの情報の読み取り方を学び、視点の違いによる差異を意識できるようになる。また、事実を理解した上で自身の歴史学的見解を持ち、根拠を以て述べる経験を持つ。

日本がアジア唯一の列強となりえた理由は何か、18世紀まで隆盛を誇った清はなぜ衰退したのかなど、このユニットを多面的に考察し理解することは、日本の大陸進出のプロローグとしての役割をもち、国際的視野を養ううえでも重要であることに気づきたい。

Inquiry Questions　探究課題

Type	Inquiry Questions
Content-based	洋務運動が失敗したと言われるのはなぜか
Content-based	明治維新は完全な成功といえるか
Debatable	日清戦争より明らかになった近代化の限界
Concept-based	韓国は併合を免れることができたか
Concept-based	清朝末期(1900-1912)の革命が長期化した最大の理由はなにか

Curriculum　カリキュラム

Aims　ねらい

個人と社会の性質と活動に関する理論、概念、議論を識別し、批判的に分析し、評価する能力を身につける。
社会に関する研究で使用されるデータの収集、記述、分析、仮説の検証、複雑なデータや資料の解釈ができるようになる。

個人と社会を対象とした研究の内容や方法論は議論の余地があり、その研究には不確実性を許容することが必要であることを認識できるようにする。
多角的な視点に立ち、歴史的な概念、問題、出来事、発展の複雑な性質を理解するよう促す。
資料の効果的な活用を含む、主要な歴史的スキルを身につける。

◇ Objectives　目標

知識と理解
詳細で適切かつ正確な歴史的知識を身につける
歴史的な概念と背景を理解する
歴史的資料の理解を深める

統合と評価
歴史的な問題や出来事に対するさまざまな視点を評価し、その評価を回答として効果的に統合することができる
歴史的証拠としての資料を評価し、その価値と限界を認識する

応用と分析
関連する歴史的知識を用いて、効果的に分析をサポートすることができる
様々な資料を分析し、解釈することができる
適切なスキルの使用と応用
問題の要求に効果的に応えるために、焦点を絞ったエッセイを構成し、作成することができる
リサーチスキル、構成、参照、適切なソースの選択の証拠を示す。

Syllabus Content　シラバスの内容

HL選択項目3：アジアとオセアニアの歴史

9．東アジアの初期の近代化と帝国の衰退(1860～1912)

同治中興と洋務運動（1861～1894）/愛新覚羅奕訢/西太后
日清戦争敗北の影響（1894～1895）/光緒帝と戊戌の変法（1898）
義和団事件（1900～1901）/清朝末期の改革（1901～1911）
孫文と辛亥革命（1911）の原因/革命失敗の理由
明治維新の原因（1868）/大日本帝国憲法（1889）
明治時代の日本の社会、文化、経済の発展
日本の軍事力増強/日清戦争（1894＝1895）と日露戦争（1904～1905）の勝利/地域への影響
朝鮮の鎖国：閔妃/鎖国（1876）/甲午農民戦争（1894）/日本の韓国併合（1910）

Content　内容

19世紀半ばから20世紀初頭までの中国と日本の歴史的展開に焦点を当てる。

中国においてほぼ不成功に終わった近代化と改革について考察する。保守派と大衆による変化への抵抗は、洋務運動や戊戌の変法の頓挫、義和団事件の発生からもうかがえる。一方で、中国とは対照的に、日本はこの時期に急速な近代化に成功し、アジアの中で欧米列強の権力に対抗する国家へと成長した。

Skills　スキル

適切な資料を取捨選択して解釈・統合したうえで一貫した分析を行う。（メディアリテラシー、情報リテラシースキル）

東アジアの近代化についてそれぞれのテーマに従って論点を整理し、根拠を用いて意見を述べる。（批判的思考スキル）

プレゼンテーションの発表を通して他者の見解を深く理解した上で互いの価値感を認める。（協働、コミュニケーション）

他のグループの発表を踏まえて自身の学習を見直すことを意識したリフレクションを提出する。（振返りスキル）

Concepts　概念

東アジアの近代化に関わる諸事象の因果関係（「原因」と「結果」）や背景はどのようなものがあるか。それらの「重要性」はどのようにはかることができるのか。

東アジアの近代化の原因、経過、結果に関する考察において、どのようなものの見方や立場の違い（「視点」）があるのか。それによって捉え方はどのように変化するのか。

ATL Skills　学習の方法

Approaches to Learning　学習の方法

Thinking　思考

このユニットでは、以下のことを行います。
- 自分の意見や結論を支持するために、根拠のある議論をするよう生徒に求めます。
- ある問題に対して、新しい個人的な理解、解決策、アプローチを提示する。
- 高次の思考スキル（分析や評価など）を必要とする課題を生徒に設定します。
- 生徒が自分の考えをより明確にできるようにする
  （例えば、思考ルーチンなどのストラテジーを使用する）。
- 振り返りのアクティビティを取り入れる

Communication　コミュニケーション

このユニットでは、以下のことを行います。
- テキストやアイデアの理解度を生徒同士で説明するよう求める。
- 簡潔に話したり書いたりすることを評価したり、フィードバックしたりします。
- さまざまな種類のテキストを読み、理解する機会を提供します。
- すべての生徒がディスカッションに参加できるようにする。

Self-management 自己管理

このユニットでは、次のことを行います。
生徒が守るべき期限を設定する。
生徒が自分で学習目標を設定するよう促す。
課題への取り組み方について、生徒にフィードバックする。
生徒が失敗や間違いから学べるようにサポートする。
生徒が最初からすべてを正しく理解する必要がないと思うような雰囲気を作ります。

Research リサーチ

このユニットでは、次のことを行います。
正しい引用と参照に報いる、または奨励する。
効果的なオンライン検索スキル（例：ブーリアンや検索リミッターの使用）を練習させます。
出典の質をどのように判断するか、または矛盾する出典をどのように分析するかについて、生徒に考察させる機会を提供します。
管理しやすいように課題の範囲を狭めることについて、生徒にアドバイスを与える（または生徒が実践する機会を提供する）。

Developing IB Learners IB学習

Learner Profile 学習者像

Inquirers	探求する人
Knowledgeable	知識のある人
Thinkers	考える人
Communicators	コミュニケーションができる人
Reflective	振り返りができる人

Assessment 評価

Formative assessment 形成的評価

資料読解課題

ディスカッション、質疑応答

Summative assessment　総括的評価

プレゼンテーション、質疑応答

論述課題

Peer and self assessment　相互評価と自己評価

質疑応答

リフレクション

Standardization and moderation　標準化と適正化

個人、グループ、全体に分けたフィードバック

総括的評価においての採点基準の提示及び擦り合わせ

Assessment criteria　評価基準

External Assessment

Paper 3: Three essay questions based upon one of the selected options

History of Asia and Oceania

Description

Learning Experiences　学習経験

Prior learning experiences　事前の学習経験

明治維新や日清戦争などの非常に基礎的な知識は中学校過程の学習によって有しているが、間があいているため期待できない。中国史に関しては辛亥革命などの大項目のみの知識であることに注意する。

令和５年度数学科ブラッシュアップ研修・研究授業報告

数学科コンダクター　　牛来　生人

令和５年度数学科ブラッシュアップ研修は計６回、実施された。職員研修において、教育顧問の江川博康氏、外部講師の渡邊幸雄氏からご指導いただき、生徒、教員双方が大いに刺激を受け、学習活動や校務改善の機会となったことについて、この場を借りて謝意を申し上げたい。

また、各コース教員による研究授業の実践は、それぞれのコースの特性を生かしたものであり、参加者にとって、各自の在り方について振り返るよいきっかけとなった。

1　数学科ブラッシュアップ研修会・概要紹介

第１回　令和５年６月16日（金）

研究授業　授業者　武田　若葉　教諭（情報科学コース）
対象クラス　情報科学コース１Ｊ１組
内容　数学Ⅰ（1次不等式）

集中講義　講師　江川　博康　氏（中央ゼミナール理事長兼校長・教育顧問）
対象クラス　特別進学コース２Ｔ１組、２Ｔ５組
内容　大学入試共通テストに向けた学習

職員研修　講師　江川　博康　氏
テーマ　大学入試共通テスト分析と中位層の底上げに向けた指導

第２回　令和５年７月６日（木）

職員研修　講師　渡邊　幸雄　氏（元東北工業大学教授・外部講師）
テーマ　観点別評価について

第３回　令和５年９月14日（木）

研究授業　授業者　舘　和廣　教諭（フレックス・技能開発コース）
内容　数学Ⅰ（２次関数）

職員研修　講師　渡邊　幸雄　氏（元東北工業大学教授・外部講師）
テーマ　数学Ⅰ・Ａの基礎・基本とその指導について

第４回　令和５年10月20日（金）

研究授業　授業者　菅原　真英　教諭（特別進学コース）
対象クラス　特別進学コース２Ｔ５組
内容　数学Ｃ（空間ベクトル）

集中講義　講師　江川　博康　氏
対象クラス　特別進学コース３Ｔ１組、３Ｔ２組
内容　大学入試共通テストに向けた学習について

職員研修　講師　江川　博康　氏
テーマ　国公立大学一般選抜個別試験に向けた指導について

第５回　令和５年11月10日（金）

集中講義　講師　江川　博康　氏（中央ゼミナール理事長兼校長・教育顧問）
対象クラス　英進コース３Ｇ１～４組、外国語コース３Ａ５～７組
内容　大学入試共通テストに向けた学習について

職員研修　講師　江川　博康　氏
テーマ　新学習指導要領に基づく授業実践と評価

第６回　令和５年12月８日（金）

研究授業　授業者　下浅　雄大　教諭、ダリスザル講師（秀光コース）
対象クラス　秀光コース２Ｍ１組
内容　2 Representing relationships：function

集中講義　講師　渡邊　幸雄　氏
対象クラス　秀光中学校生徒（１年～３年）
内容　高校数学入門

職員研修　講師　渡邊　幸雄　氏
テーマ　主体的・対話的な深い学びを目指した授業研究と実践

これらの研修はいずれも担当教員による工夫が生きた、優れた実践であった。その中で、第１回、及び第３回研修における授業実践を以下、紹介したい。

２　研究授業紹介①

第１回研修における武田若葉教諭（情報科学コース）の授業実践紹介

（１）　授業テーマと展開

数学Ⅰの１次不等式の解法を扱った。計算問題だけでなく文章で書かれた情報を数式に書き表したり、問題に適した答えを検討することを指導の主眼とした、数学を活用した問題解決学習、グループワークを行った。

one noteなどICTを活用した授業であり、ホワイトボードにPCからの映像を映し、内容の説明を行った。生徒とのやり取りにもPCを駆使し、個々の取り組みの進行状況や習熟度等を的確に把握して授業が行われた。

冒頭､Microsoft forms　のクイズを用いて不等式の性質についての確認を行い、生徒の理解状況を把握した。その後、例題・応用例題の解説を教員が行い、生徒個別に問題演習を行った。

その後、グループごとに分かれ、協力し合って問題に取り組み、生徒同士による教え合いや、異なる解法についての議論がグループ内で行われた。

さらに代表生徒の解答をホワイトボードに書かせ、教員の解説が加わった。

最後にMicrosoft formsのアンケートを用いて、学習の振り返りが行われた。

（２）　検討と分析

PCを介して個々の生徒の取組状況、理解の度合いを的確に把握して授業が行われており、効果的かつ効率的に授業改善を行うことができる実践が実現していた。

事前事後のアンケートにより、教員にとって知っておきたい学習項目が整理され、簡潔な質問を行うことでクラス全体の学習状況の把握、及び個々の生徒の習熟状況の把握を容易に行うことができ、授業改善だけでなく、生徒の成績評価の合理化にもつながっていることは参加教員にとって大いに参考になった。

one note の利用により、出席した生徒だけでなく欠席生徒への学習支援を行うことができるなど、丁寧な指導がなされ、メリハリある授業構成で生徒の向学心を刺激している点など、教育顧問等研修出席者から高評価を得た授業実践であった。

PCを効果的に使うことで、生徒とのコミュニケーションが適切に行われ、生徒の学習状況の把握、個別指導の充実につながることを、当研究授業が示した、と言ってよい。数学授業の新たな形態の可能性を示したものと言える。

３　研究授業紹介②

第３回研修における舘和廣教諭（フレックス・技能開発コース）の授業実践紹介

（１）　授業テーマと展開

２次関数の最大値と最小値を２次関数のグラフと関連付けて求めること、定義域に制限のある場合の最大値・最小値を求めることを目標とし、その過程で２次関数のグラフを活用しようとする姿勢を養うことを目標とした。

事前に、進路希望調査及びベネッセ基礎力診断テストにより、全生徒の進路希望と学習習熟状況を把握していた。

冒頭、数学係生徒によりワークシートが配付され、生徒は復習問題に取り組んだ。プロジェクターで授業の狙いを明示することで、学習への動機づけを高めていた。

その後もプロジェクター上で、関数や定義域などの説明が適切に行うなど、生徒の学習支援が効果的に続けられた。奇をてらうことのない基本的な教材が選択され、教員による誘導も相まって、数学の苦手な生徒も無理なく問題に取り組むことができていた。

室内での生徒の移動や会話は相当程度許容されるなど、生徒の学習スタイルは、かなりの自由度が認められており、生徒同士が教え合う場面が数多く見受けられた。また、早めに解き終わった生徒、あるいは問題の解けない生徒は、教卓の前に並び、個別指導を受け、個々の理解力応じた学習がなされていた。

学習の進んだ生徒は、教員からミニティーチャーに指定され、他の生徒に説明を指導するなど、主体性や表現力を高める実践も効果的に行われていた。

授業の最後に、確認問題により理解度の確認、及び、振り返りと自己評価を書かせることでまとめとした。

（2） 検討と分析

当該クラスは技能開発コースで、数学学習について、中学時より苦手意識を持っている生徒の割合が高いクラスであった。当該単元は、文字式の計算や根号を含む計算、関数の理解と計算などの抽象的な概念を必要とする個所であり、中学校時の学習に不安を残している生徒にとって取り組みやすい分野ではない。舘教諭は、PCを活用しながら丁寧に指導を進めていた。

まず、授業冒頭の「平方完成」に関する復習問題をほぼ全員が把握していることに驚かされた。数学を苦手とする生徒が平方完成を行うことは容易ではない。どのような指導を行っているのか興味を掻き立てられた。続いて関数の定義域についての説明し、さらに例題を説明し、式の値、説明、グラフの穴埋めなどを配付したワークシートに記入させた。説明は淡々とした調子で進められたが、生徒の学習の現状に合っているのか、戸惑うことなくスムーズに学習に取り組む生徒が多かった。穴埋めの際は生徒を指名し、口頭試問の形でやり取りを行った。

舘教諭の指導では、例題の選び方に特徴の一つがあったように思える。計算のポイントを把握しやすいように、関数の係数等が計算しやすいものが選ばれ、無駄に計算技術で混乱しないよう配慮されていた。どのような計算を行うことが考え方の要なのか、を生徒自らとらえることができるよう、配慮が払われていた。

授業は流れるように進み、生徒それぞれのペースで問題に取り組んでいた。生徒同士の教え合いを許容し、学び合いを積極的に活用した授業は、現学習指導要領の掲げる主体的な学びの実現といってよい。

事前にベネッセ基礎力診断テストの結果を活用し、クラスの生徒の学習到達度を詳細に把握し、理解の進んだ生徒、数学の苦手な生徒に応じた指導、対応を心がけていた。学習の苦手な生徒であっても、的確な指導によって意欲を高め、定着を進めることが可能であることを、当研究授業の実践から感じた次第である。

令和５年度 ILC沖縄 eフレックスコース 探究学習プログラムの報告

広域通信課程　ILC沖縄　　與那城慧太

１．プログラムの概要

株式会社ギルドヒーローズと本学園（総合的な探究の時間）における共同教育研究を行い、ILC沖縄eフレックスコース探究学習において、「SDGsヒーローを活用した産官学・地域連携型探究学習」を実施。また、今回の探究学習プログラムは、2024年度に仙台育英学園沖縄高等学校（全日制課程）で引き続き導入を予定。

２．対象生徒

ILC沖縄ｅフレックスコース６名（男１名、女５名）

３．スケジュール

期間：2023年10月～2024年１月にかけて実施

時間：毎週水曜日の４時間目　13時00分～13時50分

回数：全12回（授業は全てオンラインで実施）

※12回のうち、１回は沖縄市役所による出張講座。１回はプロ講師によるプレゼンテーションの練習

４．学習内容の目標

（１）自ら考えて未知の課題を解決する力を養う探究学習において、地元沖縄市の現状と課題を理解することで、世界的な課題であるSDGsを地元沖縄市で達成するための方法を学び、考える。

（２）SDGsの目標を達成するためのアイデア、ストーリーを、アートの力（マンガスキル・キャラクター制作）によって可視化する方法を学び、考える。

（３）地方創生に欠かせない要素である地域連携・産官学連携のパートナーシップにより、地元沖縄市のPR/シティプロモーションを体験する。

5．実施概要

	内　容	概　要
1回	オリエンテーション 自己紹介 想像力の準備運動	① プログラム概要の説明 ② 担当者の自己紹介と生徒自己紹介 ③ 想像力の準備運動（キャライラストからキャラ性などを想像する）
2回	ストーリー基礎	① 人に伝える/興味を持ってもらうためのストーリーの組み立て方を身に付ける ② マンガや小説などのストーリー作成方法をもとに、必要な情報の選び方を学び、他人にスムーズに伝えるためのテクニックを習得する
3回	キャラクター作成法基礎	① ストーリーを効果的に伝えるためのキャラ作成法を学び、必要な要素を考えられるようになる ② キャラ作成方法の基礎を学び、印象に残るキャラに必要な要素が何なのかを考える ③ ストーリーや伝えたいことに合わせたキャラ作りについて理解する
4回	イラスト表現基礎	① ストーリーを絵で表現するための考え方を学び、必要な情報を反映できるようになる。 ② 文字やアイデアを人に伝わるイラストにするために必要なテクニック、盛り込むべき情報、構図と演出の基礎について学ぶ。 ③ １人１つ絵コンテを作成する
5回	作品講評会	① 担当者からの講評をもらう ② 講評内容を全体にフィードバックし、作品のブラッシュアップを行う
6回	SDGs基礎思考法と SDGs課題の考え方	① SDGsについて学ぶ ② SDGsについて、どういった取り組みが行われているのかを理解し、身近な（地元）での問題から取り組みの案を考える ③ ボードゲームの材料となる課題をグループで考えていく
7回	作品制作用 地方自治体、企業取材	① 沖縄市役所による出張講座「沖縄市の都市計画（沖縄市のSDGsの活動含む）」 ② 出張講座後、沖縄市の課題解決について、生徒一人一人がオリジナルキャラクターを考える
8回	プレゼン用作品制作進捗確認① ストーリー・キャラ作成	① プレゼンに向けた作品制作の準備 ② 取り上げるSDGsの取り組みを決め、それをもとにしたストーリーとキャラを作成する ③ 作成➡提出➡添削➡ブラッシュアップといった流れで作品を仕上げていく。
9回	プレゼン用作品制作進捗確認② 絵コンテ作成	① プレゼンに向けた絵コンテ制作を行う。 ② 作成➡提出➡添削➡ブラッシュアップといった流れで作品を仕上げていく ③ 絵コンテについてＯＫをもらった生徒は、イラスト作成と発表の準備を進める
10回	起業家入門/プレゼン入門	① 起業とは何かという基本的な部分・起業家マインドについて学ぶ
11回	作品発表会	① プレゼン用のイラスト、説明文を完成させ、プレゼンテーションによる発表会
12回	ボードゲーム試遊会	① 生徒たちのアイデア、キャラを反映したボードゲーム（SDGsWorld）の試遊会。

６．授業の進め方と教育パートナー及び成果

（１）高校生たちが沖縄市のSDGsについてゲームで学び、SDGsの目標を達成するアイデアやストーリーを考え、マンガの主人公（ヒーロー）を描くようなイメージで、沖縄市のPR・シティプロモーションにつながるSDGsキャラクターを生み出す。その過程の中で、SDGs、地元沖縄市のこと、課題を発見・解決する方法を学び、考える。

（２）パートナーシップとして、仙台育英学園の先生方や、沖縄市役所、沖縄市教育委員会、沖縄振興開発金融公庫、日本グローバル演劇教育協会、民間企業（ギルドヒーローズ）といった学校内外と連携し、１つのキャラクターを生み出す体験で構成

（３）今回の授業は、高校生、沖縄市、地域のパートナーとの「協働」がテーマになっており、学習の成果として、沖縄市のシティプロモーションの実施および産業振興にもつながる。

７．プログラム受講の生徒の様子

■沖縄市役所による「沖縄市の都市計画（沖縄市のSDGsの活動含む）」授業

沖縄市役所の職員（政策企画課）の２人の方から沖縄市のSDGsの取組みと都市計画についての話を聞き、地元沖縄市の現状と課題について考えました。授業の内容を踏まえながら、沖縄市の課題を解決するキャラクター作りに生徒達は一生懸命取り組みました。

■自ら考えるSDGsゲームの制作　「SDGs ワールドクエスト」

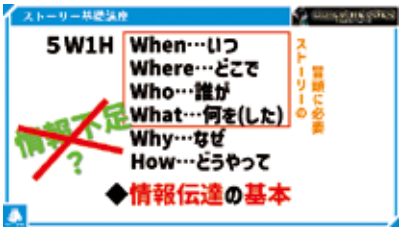
沖縄市役所による沖縄市の都市計画（SDGs準拠）での学びを参考に、生徒たちが地元沖縄市のSDGsの取組を個人、企業、国家の視点で考えて洗い出し、SDGsをテーマにした教育ボードゲーム「SDGsワールドクエスト（非売品）」のカードとしてのゲームを製作しました。

SDGsワールドクエストは、実際にSDGsの推進活動に行動することを目的としたボードゲームで、プレイヤーが直接SDGsの目標達成に向けたリアルな活動に参加し、その過程で学び、SDGsに関する自身の体験やアイデアをゲームに採用できるボードゲーム。SDGsゲーム制作により意識を高めることを促す設計になっており、ゲームを通じて、SDGsに必要な知識と理解を深めるとともに、実世界での行動変容へと繋がる内容となっています。

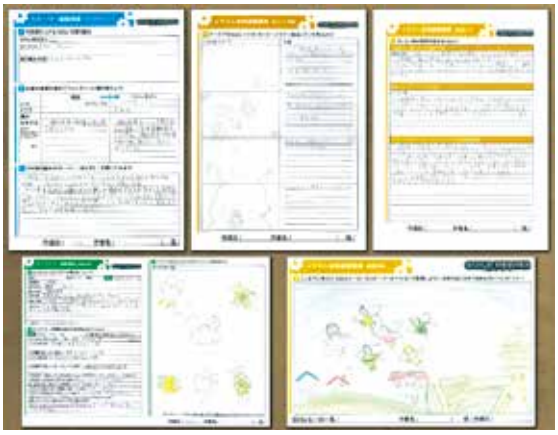
生徒たちは、自ら考え作ったゲームで遊びながらSDGsについて身をもって学習（ゲーミフィケーション）。笑顔で遊びながら知識の吸収と定着も早くなります。

■マンガスキル講座　「ストーリー / キャラクター / イラスト基礎」

ストーリーやキャラクター、イラスト表現に必須となる「読者に伝えるテクニック」は、創作の分野に限らず、社会生活においても非常に有用なスキルとなる。ファンタジー要素を含むオリジナルストーリーを筋道立てて考え発表することで、論理的思考、国語力と伝達力も磨く。



オンライン授業を重ねながら、ギルドヒーローズが描くマンガやキャラクターの世界観を参考に、生徒たちが自ら考えたオリジナルのSDGs物語をつくりました。



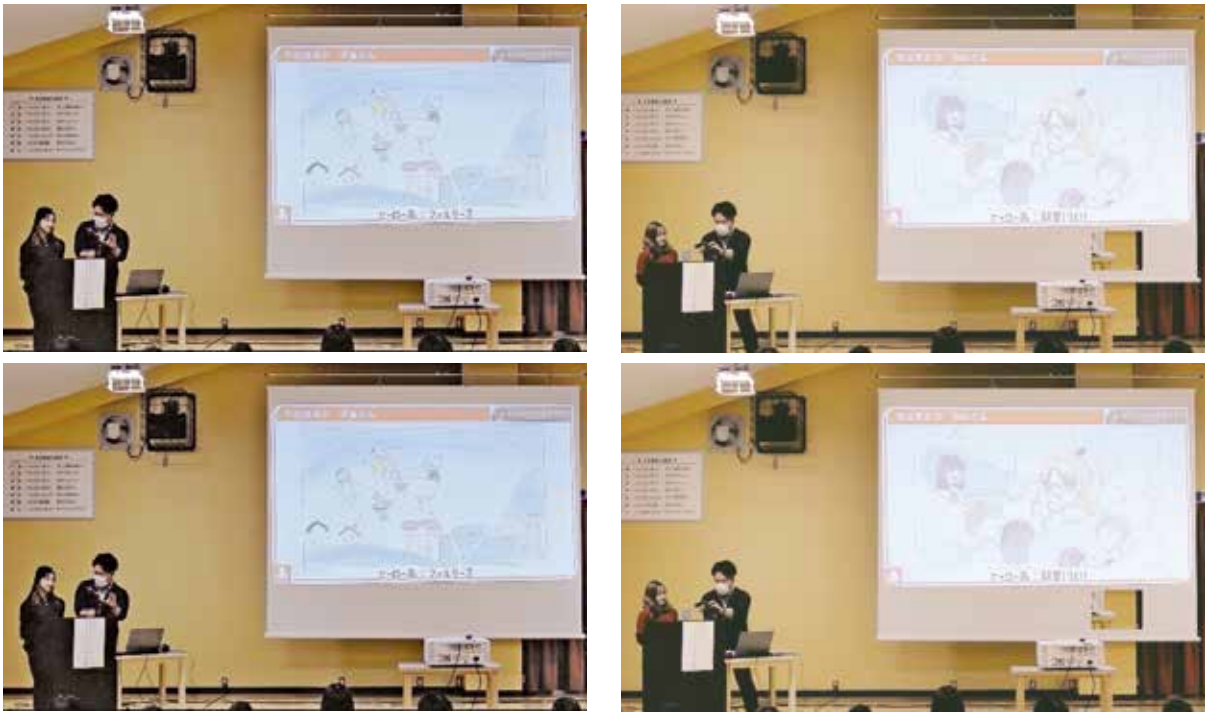
高校生たちが描いたキャラクター、ストーリー設定/絵コンテ作品例

■起業家入門授業　「起業家マインド / パートナーシップ形成 / プレゼンテーション」

起業するしないに関わらず、これからの不確実な時代を生き抜くためには、起業家のように自ら行動し、課題を発見・解決できる能力と考え方が必要となる。起業家マインドをはじめ、行動を成功に導くためのパートナーシップ形成の方法、相手の意識に訴えかけるプレゼンテーションの方法を学びました。プレゼンテーションは、表現のプロである日本グローバル演劇教育協会による指導を受けました。

■SDGsヒーローイラスト最終制作および発表（プレゼンテーション）

令和６年１月18日（木）に「探究学習発表会」を栄光校舎体育実習室１で行いました。当日は４名の生徒が参加（２名は体調不良のため欠席）。探究学習発表会には、株式会社ギルドヒーローズ社長様、沖縄市教育委員会教育長様、沖縄振興開発金融公庫課長様にもお越しいただき、貴重な講評を頂きました。生徒たちはとても緊張しながらも、授業で学んできたことを生かし、自分が考えたキャラクターやストーリーについて、しっかりとプレゼンテーションを行うことができました。



沖高１年生35名と校長先生、教育長、金融公庫、ギルドヒーローズの前で発表するｅフレックスコース生徒

沖縄市教育委員会 比嘉教育長による講評　沖縄振興開発金融公庫　安里課長による講評

沖縄市教育委員会比嘉教育長および沖縄振興開発金融公庫安里課長より、制作したキャラクターへの講評を頂き、２つのSDGsヒーローが採用されました。

最優秀に選ばれたSDGsヒーロー２作品

８．プログラム終了後の振り返り（アンケート調査に基づいて）

本プログラム終了後、受講者の振り返り及び来年度に向けて、受講生６名にアンケート調査を実施。アンケート調査はGoogleクラスルームにて行い、受講生３名から回答を得た。アンケート調査実施時期と質問内容を下記に記す。

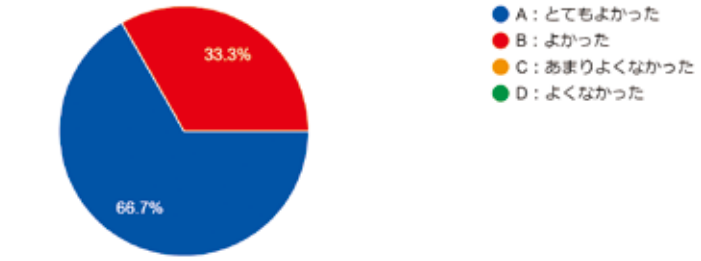
【実施時期】令和６年１月18日（木）～１月20日（土）
【回答フォーム】Google froms
【質問内容】
① 自身の取り組みについて
② オンライン講座の内容について
③ 沖縄市役所出張講座について
④ 印象に残っているまたは楽しかった講座内容について
⑤ 半年間取り組んで中で、良かった点、改善点等について
⑥ 事前に学んでいた方がいいこと、やっておいた方がいいこと、準備しておいた方がいいことなどについて
⑦ 今回の講座を通して大変だったこと、楽しかったこと、自分が成長したところについて
⑧ 自由記述

９．アンケート調査結果について

９－１　自身の取り組みについて

・進んで課題に取り組み完成に向けて頑張れたから。
・SDGsのことも考えて、それをからめたヒーローを作ることができたから。
・後半あきらめてもうそのまま出してしまおうかと思ったけど、最後までやろうと頑張ったから！

９－２　オンライン講座の内容について



・オンラインなのでたまに声が聞こえづらかったり画面が固まったりした。
　それ以外は逆にオンラインなので言いやすかったりするとこなどもあったので良かった。
・講座を受けることで１から勉強できたので良かったです。添削してもらえたことで、ヒーローに足りないところはなにか考えることができました。
・オンライン授業でしたが講師の先生が分かりやすく教えてくれた。

9－3　沖縄市役所出張講座について

・説明はとてもためになることばかりで良かった。しかし、全体的に話が難しかった。
・沖縄市役所さんの話を聞くことで、沖縄市の問題を知ることができた。
・少し難しかった。

9－4　印象に残っているまたは楽しかった講座内容について

・自分が描いた絵の評価や、直した方がいいところなどを教えていただいた講座のときが楽しかったです。自分が直したらいいところや、アドバイスなどを聞けてとてもわかりやすく細かく教えていただいたのでよかったです。
・添削が印象に残っています。自分が作ったキャラ（ヒーローを）について添削をしてもらうことで、自分で気付けなかったところまで知ることができたので、よい経験になった。
・自己紹介が楽しかったので印象に残っています。

9－5　半年間取り組んで中で、良かった点、改善点等について。

・改善点はオンラインの環境です。ラグが起きて思うように授業がすすまなかったため。
・良かった点はSDGsについて学べたことです。
・改善点は、もう少し早めに取り組みたかった。あと、自分が講座を欠席する回数が多かったので、体調を整えて参加できれば良かった。

9－6　事前に学んでいた方がいいこと、やっておいた方がいいこと、準備しておいた方がいいことなどについて

・SDGsについてよりしておくことや、身の回りの問題に目を向けること。
・SDGsを学ぶこと
・事前にSDGsについてめっちゃ学びたかった。（学んでおく必要性あり）

9－7　今回の講座を通して、大変だったこと、楽しかったこと、自分が成長したところについて

・大変だったことは、絵を描くこと。楽しかったことは、オリジナルのキャラクターを考えること。講座を通しながら成長でき、問題にしっかりと取り組む姿勢でできた
・大変だったことは説明文を作ることやSDGsと絡めてキャラ（ヒーロー）を作ることが大変だった。楽しかったことは、絵を描くことや自分なりのオリジナルヒーローを作れたこと。
・人前で自分の意見を伝えるということができるようになった。ある程度の緊張に耐性ができた。

9－8　自由記述

・特になし（２名）
・こんな素敵な体験は今後なかなか出来ないと思う。貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。

10. 次年度に向けて

次年度に向けて受講生からの改善点をまとめてみました。

（１）SDGsについての学習を事前に行うことが大切。オンライン講座だけでは内容が十分把握できないため、事前にHRや総合的な探求の時間等を利用し学習していく必要性を感じた。
SDGsについてより理解を深めることで、自身のオリジナリティー溢れるキャラクターやストーリーをスムーズに作ることができる

（２）１人１作品ではなく３名ずつ程度のグループを作成し、１グループで１つのキャラクター・ストーリーを作成するのが望ましいと感じた。苦手な課題に直面すると
生徒が悩み、前に進まない場合が多々あった。グループを作成することで、それぞれの特な分野がやりやすい。みんなで関わることができる。などのメリットがあると思う。

11. 最後に

今回の探究学習プログラムを経て、「沖縄市の地方創成に貢献するSDGsヒーローを作成する」を目標に、課題を解決するため何が必要なのかという探究活動に取り組めたことは、生徒たちにとってかけがえのない経験になったかと思います。地域の課題（沖縄市の課題）について調べるだけでなく、その課題を解決するためにどのような取り組みをしていくべきかについて生徒自身が考え、オリジナルのストーリーとヒーロー（キャラ）を作成できた経験は、今後の高校生活または人生において大変貴重な体験になりました。今回の探究学習プログラムで得た経験をもとに、次回は沖縄振興開発金融公庫様のワークショップ「創業計画書の作成の仕方」に参加し、更なる学習に繋げていく予定です。

コンピテンシー測定ツール「Ai GROW」の活用事例

仙台育英学園沖縄高等学校　　栗本　崇雅

１．はじめに

「コンピテンシー」とは資質や行動特性を指し、自他共に気付きにくい能力である。1950年代に心理学の専門用語として誕生し、1970年代にアメリカを中心に世間一般に広く認知されるようになった。また、業務における思考や価値観といった個人の能力を明確化、評価するために多くの企業が注目し、測定されるようになった。そして、1990年代に日本でも導入する企業が増えてきた。[1]　一方、教育業界ではOECD（経済協力開発機構）が2015年から始まった「OECD Future of Education and Skills 2030」プロジェクトでコンピテンシーについて言及しており、昨今多くの学校で取り入れられるようになったと同時に、大学入試でも取り入れられつつある。[2]

沖縄高等学校では、様々な企業でも導入されているIGS株式会社が提供する「Ai GROW（アイグロウ）」を利用して、生徒のコンピテンシーを定期的に測定している。

２．測定について

（１）測定項目の選択

下記25項目のコンピテンシーから測定したいものを教員が選択する。

分野	コンピテンシー	詳細
認知	課題設定★	状況を的確に把握しながら「何をすべきか」「どうやって成し遂げるか」を自ら考え出せる能力
	解決意向	課題を解決するために必要な計画や方法を自ら具体的に立案しながら取り組むことのできる能力
	論理的思考★	道理や筋道に即って物事を深く考えることができ、複雑なことでも分かりやすく説明できる能力
	疑う力★	他者の意見をそのまま鵜呑みにすることなく、必要に応じて建設的な反論をすることのできる能力
	創造性★	自分ならではの独自性に加えて、実現可能な生産性を伴ったアイデアを出すことのできる能力
自己	個人的実行力★	自らの意思によって行動を起こして計画を進め、何事にも自ら進んで取り組むことのできる能力
	内的価値	物事を自分の価値観で判断し、情熱・才能・知識・人脈・人柄・目的の要素から分析できる能力
	ヴィジョン	将来、自分がどのように成長していたいかなど、未来の目標を明確に持つことのできる能力
	自己効力★	何らかの課題に直面しても、「自分ならできる」と自信を持って物事を進めることのできる能力
	成長	どんな難題に対しても「自分の成長につながる」と信じて積極的に取り組むことのできる能力
	興味	自分が知らない・興味のない分野のことであっても、情報を積極的に収集することのできる能力
	耐性★	困難な状況であっても、自分で決めたことは最後までしっかりとやり抜くことができる能力
	感情コントロール	負荷が掛かる状況であっても、自分のストレスを自分自身でコントロールすることのできる能力

分野	コンピテンシー	詳細
	決断力★	自分の考えと客観的な事実とを照らし合わせながら判断し、物事を決めることのできる能力
他者	表現力★	自分の考えや思いはもちろん、どんなことでも相手が理解しやすいように伝えることのできる能力
	共感・傾聴力★	相手の話を真剣に聴き、相手を深いレベルで理解し、相手の気持ちを尊重することのできる能力
	外交性	たとえそこが未知の環境であったとしても、自ら進んでその環境に飛び込むことのできる能力
	柔軟性★	変化への対応力とともに、その場その場で機転を利かせて行動を適宜修正することのできる能力
	寛容	自分とは考えや意見の異なる相手に対しても理解を示し、それを許容する能力を持てる能力
	影響力の行使★	他者に対して自分の考えや目的を伝えながら、ともに協働して物事を進めることのできる能力
	情熱・宣教力	揺るぎない情熱をもって自分の考えを他者に広め、それを納得させることのできる能力
コミュニティ	組織への働きかけ	目標を達成するためにチームワークを高め、前向きな雰囲気を作り出すことのできる能力
	地球市民★	自分が住む地域や日本のことはもちろん、世界の一員として何ができるか考えられる能力
	組織へのコミットメント	組織の目的や目標を正しく理解した上で、その実現のために真剣に動くことができる能力
	誠実さ	どんな状況であっても、周囲に正しい行いをするように働き掛けることのできる能力

★：お薦めコンピテンシー（13項目）

【資料１】コンピテンシー説明

今年度は導入初年度ということもあり、提供企業から勧められた項目を中心に15項目の測定（資料５・６参照）を行った。上記コンピテンシーの組み合わせ次第で、「主体性」「協働性」「リーダーシップ」「イノベーション」「批判的思考力」「創造的思考力」「協働的思考力」の定量化（資料７参照）も可能。また、学校独自の設定も可能であり、生活信条７箇条に対応したコンピテンシー設定（資料８参照）を行い測定した。

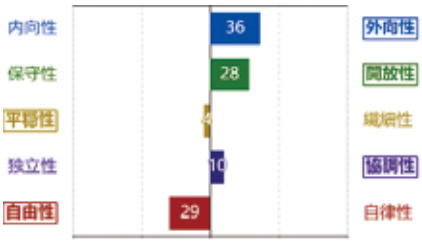
（２）測定の流れ

専用URLからWeb上で３つの診断測定に取り組む。所要時間としては約１時間である。

① 気質診断

診断を通して下記５項目の気質結果が分かる。

【資料２】気質説明



【資料３】気質診断結果例

② 自己評価

（１）で指定したコンピテンシーに応じた問題について回答する。

③ 相互評価

「Ai GROW」では、自己評価と他者から評価された結果をもとにAIの補正を加えて定量化する。最大10人まで他者評価できるが、自己評価と同じ問いについて他者評価するため持続集中時間を考慮して最少人数の３人としている。また、評価者を生徒自身が選択できるが、評価者の偏りをさけるべく教員側で評価者を選択している。なお、評価される側は誰から評価されたか分からない仕様になっているため、匿名性を保ち私情を挟むことなく評価できる。

【資料４】コンピテンシー診断結果例

（３）実施時期

・１回目（５月中旬）

３年間の成長比較のために入学して日が浅いうちに実施。クラスメイトについての情報が少なく、測定精度が低くなるため「相互診断」は実施せず。

・２回目（７月中旬）

高校生活に慣れ始め交友関係も広がり、また初めての評価期間を経験したことから、相互評価含めて実施。

・３回目（12月上旬）

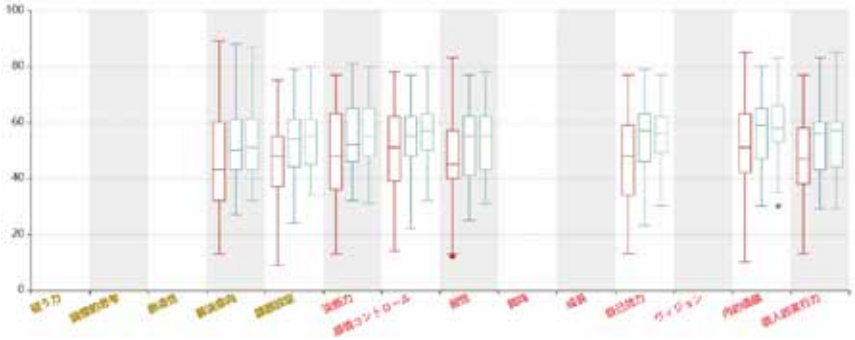
オープンキャンパスや文化祭など多くの行事をクラスメイトと協働して乗り越えたことから、その成長を測定するために実施。

・４回目（３月上旬）

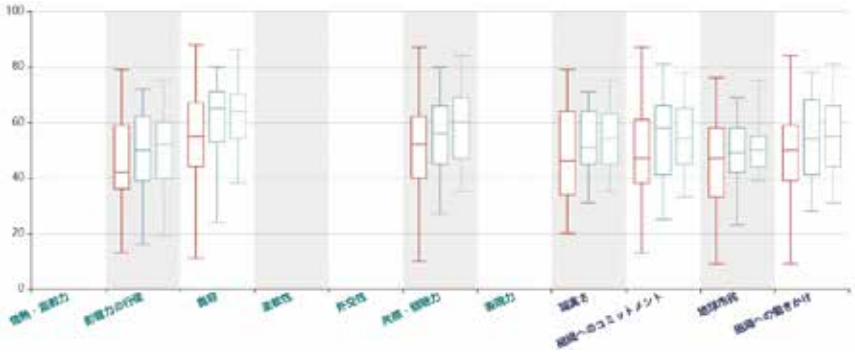
１年間の成長を測定するために実施。

３．測定結果

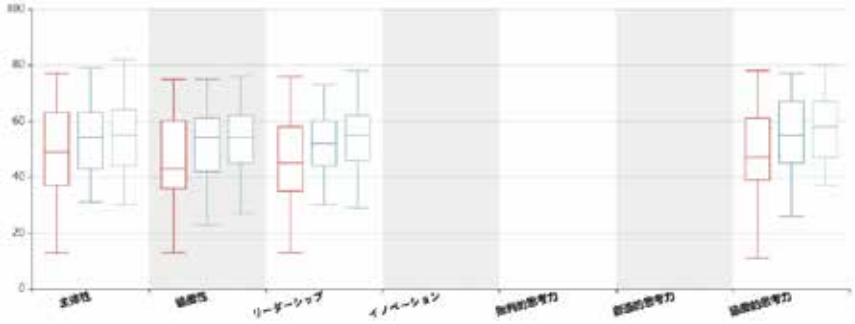
各項目の箱ひげ図は、７月・12月・３月の学年結果を表しており、縦軸はコンピテンシースコアを表示している。



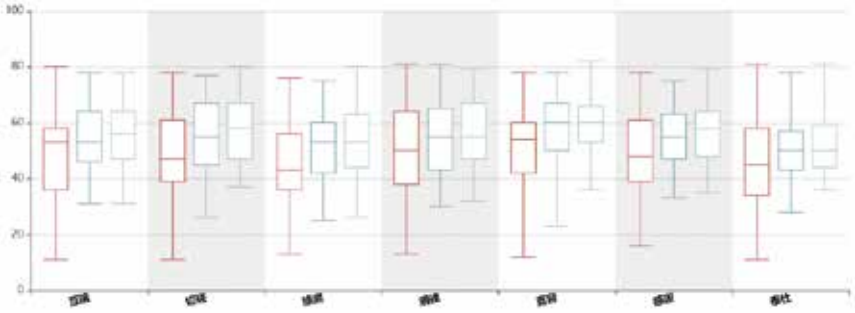
【資料５】認知・自己項目の結果



【資料６】他者・コミュニティ項目の結果



【資料７】複数コンピテンシーを合わせた結果



【資料８】生活信条に対応したコンピテンシー結果

資料５～８において、全ての項目で最大値と最小値の幅が縮小し、中央値が上昇していることから、教育活動を通して生徒たちは意図を汲み取って取り組むことができており、それがクラス全体の成長へ繋がっていると言える。特に７月から12月にかけて成長が顕著であり、10月の宮城大学と連携したアントレプレナーシップのワークショップや、ハロウィンイベント、11月の文化祭といった大きなイベントを経験したことが要因と考え

られる。一方で12月から３月にかけてスコアが微増に終わっていることについては、生徒主体で取り組む行事が無かったことが挙げられる。

その他、生徒同士の気質の差異が分かる分布結果も把握でき、またコンピテンシーをもとにしたグループワークにおけるメンバー選定を自動で行ってくれる機能もある。

４．次年度に向けて

コンピテンシーの選定含め手探り状態で利用したが、オンライン研修プログラムへの参加を通して他校の実践事例など多くの学びを得たことから、次年度以降は測定項目や実施時期を以下の通り変更して行う。生活信条と対応するコンピテンシーの再検討、そして沖縄高等学校のグランドデザインにある「U-ICT」スキルの取得や教育特色である「Ｉ（自立）・Ｃ（チャンス）・Ｔ（挑戦）」と関連性のある項目の検討を行った。

互譲	自己効力	共感・傾聴力
切磋	課題設定	表現力
練磨	耐性	影響力の行使
規律	決断力	組織へのコミットメント
寛容	感情コントロール	柔軟性
感謝	個人的実行力	地球市民
奉仕	創造性	外交性

【資料９】生活信条との対応表

コミュニケーションスキル	自己効力	表現力
社会性	個人的実行力	組織へのコミットメント
リサーチスキル	疑う力	地球市民
自己管理能力	感情コントロール	柔軟性
思考力	創造性	決断力

【資料10】U-ICTとの対応表

分野	コンピテンシー	ICT	計測項目		
			１年	２年	３年
認知	課題設定	C	○	○	○
	解決意向	T			
	論理的思考	I			
	疑う力	I	○	○	○
	創造性	T	○	○	○
自己	個人的実行力	T	○	○	○
	内的価値	I			
	ヴィジョン	I			
	自己効力	C	○	○	○
	成長	C			
	興味	C			
	耐性	T	○	○	○
	感情コントロール	I	○	○	○
	決断力	I	○	○	○
他者	表現力	I	○	○	○
	共感・傾聴力	C	○	○	○
	外交性	T	○	○	○
	柔軟性	T	○	○	○
	寛容	I			
	影響力の行使	T	○	○	○
	情熱・宣教力	T			
コミュニティ	組織への働きかけ	C			
	地球市民	C	○	○	○
	組織へのコミットメント	C	○	○	○
	誠実さ	C			

【資料11】資料９・10をもとにした測定項目

		１年	２年	３年	備考
1学期	４月	○			相互評価は実施しない。結果を「学び方を学ぶ月間」で活用。
	５月		○	○	前年度の３月に実施しているため期間を空けている。新学年スタートの始値を測定。
	６月				
2学期	７月	○			相互評価も取り入れる。学校生活に慣れ始め、初めての評価期間を終えた後に実施。
	８月		○	○	２年生はインターン後に実施。３年生は就活・入試が始まる前に実施。 いずれも８月下旬～９月上旬で実施。
	９月				
3学期	１０月				
	１１月	○	○	○	文化祭終了後に実施。
	１２月				
4学期	１月				
	２月			○	３年間の成長を把握するために実施。
	３月	○	○		１年間の成長を把握するために実施。

【資料12】実施時期

５．終わりに

スコアに一喜一憂するだけで終わらすのではなく、コンピテンシーの意味や測定の意義を事前に生徒へ伝え、測定後もスコア変動の考察や今後の目標設定といった振り返りを行わせることで、初めて有益な測定となる。また、「生きる力」をデータ化できる時代に突入していることから、行事だけでなく日頃の授業においても観点別評価項目に加え、内容に対応するコンピテンシーを勘案し目的意識を持って展開する必要性が高まっている。一方でAIに一任し、スコアを鵜呑みにすることは危険であり、日頃の教育活動で実際に生徒と関わり特徴を感じ取った上で、スコアを参考にしてアドバイスを送ること重要である。

＜参考文献＞

“Ai GROW”. Institution for a Global Society 株式会社　https://www.aigrow.jp/aigrow

[1] “コンピテンシー”. 日本の人事部. 株式会社HRビジョン. 2023/8/29　https://jinjibu.jp/keyword/detl/14/

[2] “OECD Education 2030 プロジェクトについて”. 文部科学省初等中等教育局教育課程課教育課程企画室
翻訳 https://www.oecd.org/education/2030/OECD-Education-2030-Position-Paper_Japanese.pdf
原文 https://www.oecd.org/education/2030/E2030%20Position%20Paper%20(05.04.2018).pdf

Ⅱ　令和５年度　研修報告

外国語コース　第１学年　ハワイ研修報告

外国語コース　　鈴木　杏子
川村くるみ

１．はじめに

外国語コースのハワイ研修はコロナ禍のため４年ほど見送られておりましたが、前年度からようやく再開することができました。外国語コースのハワイ研修は、元々１年次に希望者対象で実施される研修ですが、第２学年の生徒たちはコロナ禍の影響を受け10、12月に研修を実施することができました。その後本年１月に第１学年の生徒たちも無事に研修を実施することができました。生徒たちはESL（English as Second Language第二言語としての英語）と校外学習を主としたアクティビティを体験しながら、グローバルシチズンとして必要な特性である、オープンマインド、偏見を持たない、好奇心を持つ、リスクを恐れない、コミュニケーションスキルという５つの目標を掲げ、パーソナルサクセスを実現するための独自のプログラムを約２週間学びました。生徒たちは日々前向きに自分と向き合い、四六時中英語でコミュニケーションを図ることができる環境に大きな価値を実感しておりました。今回は第１学年のＧ１組14名とＧ２組15名の研修について、それぞれ担任の鈴木と川村がご報告いたします。

２．研修期間と参加人数及び引率教員

① 第　1　班：令和６年１月13日（土）～令和６年１月25日（木）11泊13日
　参加人数：14名、　　引率教員：鈴木　杏子

② 第　2　班：令和６年１月27日（土）～令和６年２月 8 日（木）11泊13日
　参加人数：15名、　　引率教員：川村くるみ

３．事前研修

研修の２か月前より２回、国際センターの小畑亜紀先生から事前研修を受けました。人生初の海外研修に出かける生徒たちも沢山いたので、まずはハワイ渡航のためのESTA取得や必要書類などの手続きに関して学び、続いて、歴史や文化、自然などに加えて安全で効果的なホームステイの送り方やバスの乗り方など、現地での生活の仕方について詳しく学びました。生徒１人１人が有意義なホームステイを心待ちにしており、どんなお土産を持参するかペアの生徒と共に、ホストファミリーとの２週間をどのように実りあるものにしていくか試行錯誤しておりました。

４．訪問地

○ アラモアナショッピングセンター
○ アラモアナビーチ
○ ダイヤモンドヘッド
○ パールハーバー
○ ハワイ日本文化センター
○ ハワイ大学マノア校
○ Sacred Hearts Academy（SHA：ハワイ聖心女学校）

５．全日程の報告

出発日・週末（１日目・２日目）

保護者の皆さまや先生方の温かいお見送りを受け、皆元気に出発し、バスで成田空港まで向かいました。そこから日本を出発し、翌日ハワイに到着いたしました。ハワイは日本と19時間の時差があるため、２度目の１月13日（土）を過ごすことになります。空港でレインボーアカデミーの先生方から諸注意や登校の説明を聞き、説明が終わる頃にはホームステイ先の方々にそれぞれ迎えに来て頂き、解散しました。生徒たちは英語で挨拶し、緊張している様子でしたが、懸命に受け答えをしていました。皆ホームステイ先で過ごす週末をとても楽しみにしている様子でした。週末は各家庭でのルールと学校までのバスの乗り方を確認し、ビーチやショッピング、観光などをしながら、各ホストファミリーとの親交を深める時間となりました。

写真１：ダニエル・K・イノウエ国際空港にて

３日目

校長先生のご指示により、週末に生活リズムを整えた生徒たちは、遅刻せず無事に授業を開始することができ、Hawai'i Rainbow Academyでの授業が開始されました。９時からEmma先生のショートホームルームに始まり、続いてAngel先生とのESL最初の授業となりました。ペアワークで緊張がほぐれたからか、その後の授業は和気あいあいとした雰囲気となり、生きた英語を学びながら積極的に会話しようとする生徒たちの姿が印象的でした。２校時目は、Earl校長先生からグローバルシチズンの特性について学びました。当然ながら全て英語での講義であり、生徒たちにとっては少し難しい内容ではありましたが、奥様のToyoko先生の翻訳サポートもあり、グローバルシチズンの資質や成功と失敗の意義について何とか理解しようと努力している生徒たちの姿が見られました。Askingが非常に重要であると繰り返しご指導頂きました。翌日の現地の高校生との交流会に向けた課題も出されました。ランチタイムは近くのアラモアナ・ショッピングセンターに出かけ、フードコートなどで各自好きなものを食べることになりました。ペアの生徒や仲良しグループの友人同士、それぞれの英語力を駆使して店員と会話し、好きなものを購入して食べていました。午後は、近くのアラモアナビーチまで徒歩で移動し、海水浴を楽しみました。今年は例年に比べ寒いらしく少々水が冷たかったようですが、生徒たちは大いに満喫しておりました。

写真２：Earl先生・Toyoko先生の授業

写真３：Angel先生の授業

4日目

まず８時からSacred Hearts Academy（SHA：ハワイ聖心女学校）の日本語履修生との交流会がありました。現地集合ということもあり、早朝のバスに乗り遅れた生徒も若干おりましたが、生徒全員がいくつかのグループに分かれ、地元の高校生と英語と日本語の両方でコミュニケーションを図りながら、それぞれの文化の違いを学び合いました。地元の高校生たちの案内でキャンパスツアーに出かけ、SHAの校内や授業見学もすることができました。カトリックの学校ということもあり、ステンドグラスのある素敵なチャペルもあり、生徒たちは魅了されているようでした。交流後は再びアラモアナ・ショッピングセンター内で昼食をとり、午後はSHA訪問の感想発表やWho Am I Gameなどをし、Earl校長先生からはPersonal Developmentに関する講義を受けました。初日よりも緊張感が取れ発言も少しずつ増えているように感じました。生徒たちはこの数日で、バスの乗り方やホストファミリー宅から学校までの通学ルートにも慣れ、毎日課題と格闘しながらも様々なアクティビティに参加しつつ、英語を使う生活を楽しめるようになってきました。

写真４：交流の様子

写真５：校内見学の様子

5日目

午前中はAngel先生とのESL授業で、英文を読みながらハワイの衣食住などの文化について学びました。皆リスニングに慣れてきてはいるものの、まだ言葉として発するには恥ずかしさがあるように感じられます。生徒たちの様子を見て授業を工夫してくださったため、積極的に授業に参加していました。その後は再びEarl校長先生のPersonal Developmentの授業でした。成功するためには自分の特性を知ることやPositive Thinkingが重要であると学びました。いつものようにアラモアナ・ショッピングセンターで昼食をとり、午後はバスでダイヤモンドヘッドまで移動し、ハイキングを楽しみました。ハワイに到着して以来連日晴天に恵まれ、今回のハイキングも最高のアクティビティとなりました。疲れと暑さで体調を崩す生徒がいるかもしれないと心配していましたが、全員で頂上にたどり着くことができました。最初は岩場の足元の悪さや急な階段などに不安を感じる生徒もいましたが、全員怪我も無く、無事に山頂まで登り切れたことで自信に繋がったようです。頂上からの景色には皆感動していたようで、疲れも吹き飛んだのかとても清々しい様子でした。本日はハワイ滞在５日目となり、体を使ったアクティビティを行ったこともあり、十分な休養を取るよう指導しました。

写真６：ダイヤモンドヘッド登山口

写真７：ダイヤモンドヘッド山頂

6日目

午前中はEarl校長先生からCritical Thinkingの重要性について学び、Angel先生からはハワイにおける日系移民の歴史やハワイに根付いた日本文化について学びました。生徒たちは、『Gannenmono』と呼ばれる明治元年にハワイに渡ってきた日本人たちの歴史を学びながら、アロハシャツやスパムむすびの語源が日系移民にあるということを興味深そうに聞いていました。アクティビティでは、前に話した人のコメントに自分のコメントを付け加えてどんどん話をつなげていくゲームをしましたが、生徒たちが日々の活動を通して発言に自信が持てるようになってきたのか、非常に活発な発言が多く大いに盛り上がりました。午後はバスでハワイ大学のManoaキャンパスのツアーに出かけました。カフェテリアなどで各自ランチをとった後、与えられたミッションをクリアしていくというアクティビティをしながら、広大なキャンパスの中を見学しました。ミッションの内容は在学生と一緒に写真撮影をしたり、国際色豊かな建物の前で指定されたポーズで写真を撮るというものです。海外大学進学や留学を視野に入れている生徒たちにとっては、アメリカの大学を体感することができたことで、今後の選択肢が広がることを期待したいと思いました。

写真８：ミッションに挑戦する様子

写真９：大学内購買部にて

7日目

本日は今週最後の登校日となりました。Earl校長先生からPearl Harborについて学んだ後、Japanese Cultural Centerを訪問しました。様々な展示を通して、日本人がハワイに移住した経緯や当時の彼らの生活ぶりに触れ、真珠湾攻撃以降、太平洋戦争下で日系移民がどれほどの苦難に直面していたのか詳しく学びました。午後はAngel先生とWho Am I Gameを楽しみ、AlohaやMahaloなどのハワイ語についても学習しました。この１週間、様々な角度でハワイのことや日系移民のことなど学び、生徒たちの英語や異文化理解に対する意欲もどんどん高まっているようでした。２度目の週末は、ホストファミリーと過ごす生徒や、友人同士で出かける生徒など、各自が自由にスケジュールを組んで活動することになりました。また学校最終日には各自ハワイに関するプレゼンテーションを行うことになっているので、自分の興味のある分野について調査することも重要です。苦戦している生徒もいましたが、パワーポイントの使い方や英単語などを互いに教え合う姿も見ることができました。

写真10：館内入口にて

写真11：館内見学の様子

２度目の週末（８日目・９日目）

週末は最終日に行うプレゼンテーションの準備をしながら、それぞれ自由に過ごしたようでした。ホストファミリーや仲間同士で楽しい思い出を作った生徒も多かったようです。コミュニケーションをたくさん取れたよう

で、少し自信もついたように感じます。ショッピングに連れて行ってもらったり、ホームパーティーを開いてもらったりと、ハワイでの最後の週末を満喫したようでした。私もあるグループのメンバーと共に活動し、生徒たちの希望する話題のハワイアンパンケーキを食べに出かけ、その後は有名な観光地であるワイキキに出かけました。生徒たちはスマートフォンを片手に色々な情報を集め、自分たちの回りたいルートを素早く確認しながら、リサーチしていた商店などを見て回りました。彼女たちの行動力には感心しきりで、安全面に注意できてさえいれば、どこででも生活できるのではないかと感じました。

10日目

本日はパールハーバーを訪問し、戦艦『ミズーリ』と沈没した戦艦『アリゾナ』の２つの記念館を見学しました。到着するまで小雨が降っていたのですが、あっという間に天気が回復し25、26℃になりました。最初は日本人ガイドの方に解説して頂きながら、戦艦ミズーリを見学しました。パールハーバーは太平洋戦争開戦の場所であると同時に、日本の降伏文書署名の場所として終戦を象徴するところでもあり、生徒たちはその歴史と重さを実感していました。当時の歴史に興味を持った生徒も多く、貴重な経験をすることができたと嬉しそうに話す一方で、日本人としてパールハーバーを訪れることへの複雑さも感じていたようです。昼食後は、米海軍が運航するボートで『アリゾナ』記念館に向かいました。アリゾナはまさに日本軍の奇襲攻撃を受けた戦艦であり、多くの米兵が亡くなった場所です。真珠湾攻撃で生き残った米兵たちも、死後は多くの仲間たちが眠るこの場に埋葬されたと記されておりました。生徒たちもこの場所の意味を理解し、厳粛な気持ちで訪問しました。

写真12：パールハーバーにて

写真13：展示を見学する様子

11日目

本日は、とうとう研修最後の日となりました。全員元気に登校し、各自選択したテーマについて英語でプレゼンテーションを行いました。テーマは、ハワイの食事やハワイ語、海、ビーチ、サンゴ礁、文化や歴史、日本とハワイの相違点、ハワイでのホームルーム、ハワイの好きな場所などなど様々な内容でした。発表中も非常に堂々としており、約２週間前の授業で緊張し、恥ずかしがっていた様子からは想像できないほどでした。日本を出発した時よりも確実に成長した生徒の姿に、胸が熱くなりました。どの生徒も興味深い内容のプレゼンテーションを行い、ゲストの皆さまから沢山のお褒めの言葉を頂きました。生徒たちのスライドの出来栄えは言うまでもありませんが、発表時の発音の素晴らしさに感銘を受けた方が多かったようです。まさに外国語コースでの日頃の学習活動の賜物だと痛感いたしました。生徒たちはハワイ研修で多くのことを学び充実した日々を送りました。多くの学びを得たこの研修をこれからの人生に活かしたいと考えている生徒が沢山おります。Earl校長先生から卒業証書を頂き、ハワイ伝統のレイを身につけた生徒たちの姿は堂々としていて、充実した研修が無事に終了した安堵感と達成感で誇らしげでした。

写真14：第１班集合写真

写真15：第２班集合写真

12日目

ハワイでのスケジュールが無事終了し、９時頃ホノルル空港に集合しました。ホストファミリーの方々に送迎してもらいダニエル・K・イノウエ空港に集合し、日本へ向けて飛び立ちました。空港では皆、ホストファミリーとのお別れを皆惜しんでいました。朝食を持たせてくださる方やプレゼントをくださった方もいらして、ホストファミリーの皆さまが生徒のことを大切にしてくださったことが伝わってきました。滞在中お世話になったEmma先生とTricia先生も駆けつけて下さり、全員でお別れをしました。この後出国手続きを済ませ、いよいよ日本へ向かいます。無事に成田空港に到着することができましたが、ハワイとの寒暖差が激しく、生徒たちはあまりの寒さに絶句していました。その後バスで仙台駅まで移動し、保護者の方々に引き渡したのは23時頃でした。生徒たちは長時間のフライトやバス移動、寒さなどで疲れてはいましたが、保護者と会った瞬間の表情は何とも言えないほど充実した笑顔でした。

写真16：空港での様子

写真17：日本へ帰国

終わりに

長いような短いような２週間のハワイ研修は、異文化理解はもちろんですが、更なる英語学習への意欲と、自ら挑戦することの大切さ、そしてそれをやり遂げた自信を生徒たちに与えてくれたように感じます。留学や海外大学進学に対しても親近感を覚え、国内大学と同様に海外大学を選択する生徒たちも出てくることと思います。グローバル化の進む国際社会で活躍できる人材になるためにも、ますます外国語のスキルを磨き、異文化理解を深め、国際的な視点やものの考え方を身につけていくことが重要だと痛感しました。生徒たちもこの研修を通して、自ら考え発言すること、自ら考え行動することの大切さを噛みしめ、これからの人生に活かそうと決意したようでした。また研修を終えて、グループとして一致団結し協力することの大切さ、ホストファミリーの皆様からの愛情、そしてこの研修に行かせてくださった保護者の皆様への感謝の気持ちなど様々な気づきもあったようです。この気づきを大切に、ハワイ研修で学んだことを今後の人生に生かしていけるよう、ますます努力してほしいと思います。最後に、加藤雄彦理事長校長先生をはじめ、沖縄校加藤聖一校長先生、諸先生方や保護者の方々、Rainbow Academyの諸先生方など沢山の方々の多大なるご支援を頂戴し、無事ハワイ研修を終了することができました。また、滞在中、ホームページにも生徒たちの活動の様子をアップして頂き、おかげ様で新鮮な情報をお届けすることができました。この場を借りて、感謝申し上げます。ありがとうございました。

写真18：ハワイ研修の思い出　アラモアナビーチにて

情報科学コース　沖縄研修旅行報告

情報科学コース第３学年　　菅　　光朗

期　　間　：　令和５年４月16日(日)　～19日(水)　３泊４日
場　　所　：　沖縄県（那覇市～名護市）
参加生徒　：　93名（男子73名／女子20名）
引 率 者　：　犬飼ユウ子　　菅　光朗　　加藤芳己　　白岩幸浩　　高橋良太　　金福　瞭

１．はじめに

本研修旅行に参加した第３学年は、新型コロナウイルスの影響を大きく受けてきた学年である。入学直後からオンラインで授業や分散登校が進められ、２学年の途中まで学年行事もほとんど中止かオンライン実施となっていた。２学年の後半から徐々に行事も行うようになっていき今回の沖縄旅行も無事開催される運びとなった。
以下に本年度の沖縄研修旅行について報告する。

２．研修目的

・沖縄の風土と歴史に親しみ、文化・自然・産業に理解を深める。
・研修を通じて豊かな感性と情操を養い、見識を広げる。
・集団行動や様々な交流を通じて、協調性を養う。
・体調はもとより、貴重品の管理や時間配分等、自己管理の能力を養う。
・公衆道徳を守り、社会性を身につける。

３．事前指導

LHRや総合的な探求の時間を利用して以下の事前指導を行った。
１）　健康調査（アレルギー調査を含む）
２）　自主研修の班編成
３）　自主研修の計画
４）　研修の目的・心得・諸注意等の指導
５）　沖縄研修旅行結団式

４．行程

令和５年度沖縄研修旅行行程表

月日	行　　程
１日目 ４月 16 日 (日)	10:05-11:55　15:10-16:00　18:30 仙台空港　＝　那覇空港　＝　ホテルオーシャン那覇国際通り
２日目 ４月 17 日 (月)	8:15　9:30-10:30　10:45-13:30 那覇市　＝　平和祈念公園　＝　ひめゆりの塔/資料館/優美堂(昼食・買物) 14:30-19:00　19:00 ＝　那覇市内:班別自主研修　＝　ホテルオーシャン那覇
３日目 ４月 18 日 (火)	8:15　9:20-11:00　12:00-13:00 那覇市　＝　仙台育英学園沖縄高等学校　＝　御菓子御殿恩納店　＝ 14:00-16:30　17:00 ＝　沖縄海洋博記念公園(美ら海水族館等)　＝　ホテルリゾネックス名護
４日目 ４月 19 日 (水)	8:45　10:00-11:00　12:00-14:10　16:50 名護市　＝　琉球村　＝　那覇空港　＝　仙台空港

１日目

研修旅行初日、仙台空港にて出発式を行った。空港へ直接の集合であり、生徒が乗った電車が止まるアクシデントもあったが、参加予定生徒が誰もかけることなく無事に離陸できた。３時間超のフライトを経て那覇市に降り立った生徒たちは、仙台との気候の違いを肌で感じ取り、驚いているようだった。

仙台空港にて

夕食会上にて

２日目

平和祈念資料館では、沖縄戦についての講話を聴き、館内見学を行った。生徒らは真剣な表情で話に聴き入っていた。「自分たちの平和が尊いものであることを深く感じた」と話す声が聞かれた。午後は那覇市内で班別自主研修を行った。初めて沖縄を訪れる生徒も多く、ホテルへの集合時間直前まで楽しんでいる様子が見られた。

ひめゆりの塔講話会場にて

班別自主研修にて

３日目

３日目は、仙台育英学園沖縄高等学校の訪問から始まった。沖縄校では総合探究の時間にまとめたSDGsについての発表を行い、沖縄校のｅ－スポーツ部の生徒たちと交流し、楽しく話している姿が見られた。白壁に赤瓦の屋根という沖縄らしい校舎の風貌は、生徒の印象に強く残ったようだ。その後は、沖縄海洋博記念公園にて美ら海水族館を見て回ったり、ホテルの砂浜でバーベキューを楽しんだり、沖縄の自然に触れる一日となった。

沖縄高等学校にて

バーベキュー会場にて

4日目

琉球村での体験は、沖縄の伝統文化に多く触れる機会となった。急な雨に見舞われエイサーショーを最後まで観ることはできなかったが、生徒たちは沖縄の独特な方言や文化に驚きながらも、親しみが沸いたようだった。仙台に移動する道中も、教わったばかりの沖縄の方言を取り入れながら研修旅行の思い出話に花を咲かせる様子が見られた。

美ら海水族館にて

琉球村にて

5．おわりに

沖縄の歴史・文化・風土に触れた今回の研修旅行は、生徒らの見識を広げ考え方を豊かにするために有効であったといえる。特に仙台育英学園沖縄高等学校への訪問は、遠く離れた沖縄の地を自分たちの身近な存在として捉える大きなきっかけとなった。これにより、研修旅行での体験がより地に足のついた出来事として昇華されたようだ。また、時間や公衆道徳を遵守することで、集団としても成長したと考える。本研修旅行の経験は、生徒にとって忘れられない思い出と今後への糧となることだろう。

6．謝辞

本研修旅行を実施するにあたり、加藤雄彦理事長校長先生の多大なるご配慮、ご指導を賜り、心より感謝申し上げます。また、沖縄校の加藤聖一校長先生をはじめ、沖縄校の諸先生方、東部トップツアーズの皆様、現地のスタッフの方々、お世話になった諸先生方にも深く御礼申し上げます。

英進進学コース　沖縄研修旅行報告

英進進学コース　　八代　杏里

１．研修日及び参加人数

研修日：男子　令和５年４月２０日（木）～２３日（日）
　　女子　令和５年４月２１日（金）～２４日（月）
旅行先：沖縄（本島）
参加者：Ａ１、Ａ２、Ａ３、Ａ４、Ａ５、Ａ６、Ａ７　計７クラス
　　男子８７名、女子７８名
引率者：男子：渡邊　明、笹原　義巳、金澤　瞭、糟川　拓也、遠藤　英樹
　　女子：佐藤　真弓、八代　杏里、青山　汐里、村松　昌子

２．研修目的

１）　沖縄海洋博記念公園やおきなわワールドでの研修を通して沖縄の自然に触れ、沖縄独自の文化やリゾート産業についての理解を深める。
２）　旧海軍司令壕やひめゆり平和祈念館での研修を通して太平洋戦争（第二次世界大戦）中の悲惨な状況や戦後の本土とは異なる歴史を理解し、平和であることの尊さを感じ、平和を希求することの重要性を実感する。
３）　集団行動を通じて連帯感を養い、生徒同士または生徒と教師の人間的な交流を深め、協調性を養う。
４）　グループ活動や研修を通じて自己を理解し、また自分の体調を自分で管理自生する。
５）公衆道徳と学校の規則を守り、一人の社会人としての社会性を身に着ける。

３．旅行行程表

第１日目（男子：４月20日（木）・女子：４月21日（金））
　仙台空港集合10：00（１階中央噴水広場）
　仙台空港出発11：55---ANA1863便---15：10那覇空港到着
　＝貸し切りバス＝17：00ホテル到着…夕食18：30より…
　夕食会場　男子：別館３階プルメリア
　　女子：２階パレスコート
　宿泊　　男子：COMMUNITY & SPA　沖縄セントラルホテル　　TEL：098-862-6070
　　女子：ホテルサンパレス　球陽館　　TEL：098-863-4181

第２日目（男子：４月21日（金）・女子：４月22日（土））
　朝食７：00より　男子：別館３階プルメリア
　　女子：２階パレスコード
　ホテル出発８：30＝貸し切りバス＝９：00旧海軍司令部壕・ひめゆりの塔【平和講話】
　12：00～13：00昼食＜沖縄そばセット＞＠優美堂---13：45ホテル到着
　---那覇市内【班別自主研修】＜各自夕食＞19：00ホテル集合
　宿泊　　男子：COMMUNITY & SPA　沖縄セントラルホテル　　TEL：098-862-6070
　　女子：ホテルサンパレス　球陽館　　TEL：098-863-4181

第３日目　（男子：４月22日（土）・女子：４月23日（日））

朝食７：00より　男子：別館３階プルメリア

女子：２階パレスコード

ホテル出発８：30＝🚌貸し切りバス＝９：30ブセナ海中公園（グラス底ボート・海中展望台）

11：00～🍙車中昼食＜タコライス弁当＞---12：30沖縄海洋博記念公園（美ら海水族館）

16：30お菓子御殿名護店（ショッピング）＝17：20ホテル到着

夕食18：30より　男子：ホテル貸し切りビーチ

女子：ホテル貸し切りビーチ

宿泊　男子・女子：ホテルリゾネックス名護　　TEL：0980-53-8021

第４日目　（男子：４月23日（日）・女子：４月24日（月））

朝食７：00より　男子・女子：別館１階多目的ホール

ホテル出発８：00＝🚌貸し切りバス＝９：30おきなわワールド（玉泉洞・城下町・ショー）

12：00那覇空港＜🍙各自昼食＠空港内＞---14：10✈ANA1864便---仙台空港16：50

４．旅行記録

◎第１日目

10時に仙台空港１階中央噴水広場に集合し、遅刻者等もおらず予定通り11時55分に仙台空港を出発しました。生徒の多くが初めて飛行機に搭乗したことで、離陸する際の大きな揺れや音に驚く生徒もいましたが、飛行機からの景色を楽しんだり、これからの沖縄での日々を想像してワクワクしている様子が見られました。

沖縄に到着すると、蒸し暑い気候に驚いたとともに、楽しんでいるようでした。その後、貸し切りバスで国際通りに近いホテルに到着いたしました。夕食はバイキング形式で、ソーキそばやラフテー、サーターアンダギー等、早速沖縄料理を楽しむことができました。消灯時間は23時に設定していましたが、長いフライトの疲れのためか、22時に点呼に来てほしい。と希望を出す班もあり、22時から23時までに消灯しました。

写真１　仙台空港飛行機内

写真２　那覇空港内

写真３　夕食の様子①

写真４　夕食の様子②

写真５　夕食の様子③

写真６　夕食の様子④

◎第２日目

８時30分に貸し切りバスでホテルを出発し、９時に海軍壕公園に到着しました。海軍戦没者慰霊之塔に手を合わせました。その後、ガイドさんの説明を聞きながら海軍公園ビジターセンター、資料館そして、旧海軍司令部壕を歩きました。実際に軍人など多くの人々がここで生活していたこと、また多くの人がここで命を落としたことを知り、生徒たちは真剣な表情でガイドさんの話を聞き、壕の中にある写真やその当時についての説明文を見ていました。ひめゆり平和祈念資料館では、ひめゆり学徒隊だった宮城久美子さんの証言映像を見ました。あまりにも残酷な話で目を背けたくなるような内容も多かったですが、生徒たちはまっすぐ映像を見つめ、メモをとりながら熱心に話を聞いていました。

戦争は多くの人の命を奪い、いかにおろかでもう絶対に起きてはならない。という戦争体験者の方々の気持ちを受け取り、平和の尊さを感じたはずです。

写真７　海軍戦没者慰霊之塔

写真８　旧海軍司令部壕

写真９　ひめゆりの塔

写真 10　平和講話

写真 11　優美堂での昼食

写真 12　班別自主研修

12時：優美堂へ移動し、昼食に「沖縄そばとジューシーのセット」をいただきました。その後は各自おみやげを見たり、ブルーシールアイスを食べたりと楽しみました。

13時45分：ホテルへ戻り、その後班別自主研修へ出かけました。国際通りを探索したり、アメリカンビレッジや首里城を訪れる班があったり、伝統工芸品館で実際に沖縄ガラスのグラスを作った班もいました。それぞれ沖縄独自の文化を体験し、夕食は沖縄のステーキやハンバーガーを楽しみました。

19時にホテルへ集合し、23時に消灯しました。

◎施設紹介①
＜海軍壕公園＞
旧海軍司令部隊は、悲惨な戦争をなくし、恒久平和を祈念する戦跡地として、昭和45年３月に修復、公開されました。この一帯は県の海軍壕公園整備計画に基づいて整備され平成15年４月に供用開始して、戦跡公園として多くの県民の憩いの場として広く利用されています。また、平和学習の場として、県外から多くの修学旅行生が海軍壕を訪れています。

＜旧海軍司令部壕＞
旧海軍司令部壕は、太平洋戦争において最後の戦場となった沖縄戦で、日本海軍沖縄方面根拠地司令部のあった場所です。昭和20年６月13日午前１時頃、司令官大田實少将をはじめ多くの将兵や軍に召集された住民が、この土地で最後を遂げました。

＜ひめゆり平和祈念資料館　ひめゆりの塔＞
ひめゆりの塔は、1945年の沖縄戦で亡くなった沖縄師範学校女子部・沖縄県立第一高等女学校の生徒や教師のための慰霊碑です。沖縄戦の翌年、両校で最も多くの犠牲者を出したガマ（鍾乳洞）の上に建てられました。ひめゆり平和祈念資料館は1989年６月23日ひめゆり同窓会によって設立されました。証言映像や当時の写真、壕の実物大模型などを通して、ひめゆり学徒隊が体験した沖縄戦の実相を伝えています。

◎第３日目
８時30分に貸し切りバスにてホテルを出発し、ブセナ海中公園に到着しました。透き通った水色の美しい海に一同感動いたしました。さらにグラス底ボートに乗り、海の中を悠々と泳いでいる沖縄の綺麗な魚を見ることができました。その後、海中展望塔へ赴きボートで見たよりも深い海の中で泳いでいる魚を見ることができました。
11時：バスの中で「タコライス弁当」を昼食にいただきました。今まで食べたタコライスよりもスパイシーでおいしく、生徒たちも喜んで食べておりました。
12時30分：沖縄海洋博記念公園に到着し、美ら海水族館を見学しました。本土ではなかなか見ることのできないジンベエザメやマンタは非常に迫力があり、生徒たちも感激していました。さらに今年で28年間飼育されているジンベエザメの世界最長飼育記録を見ることができ生物においての学びも深めることができました。
16時30分：お菓子御殿名護店に到着し、生の紅芋タルトの美味しさに感動したり、家族へのお土産を買ったりと楽しい時間を過ごしました。
18時30分：夕食はホテルの貸し切りビーチにてバーベキューを堪能しました。夕焼けの美しい海、白い砂浜、自分たちで焼いたお肉、野菜、やきそばの味は格別でした。忘れられない夕食となったと思います。

写真 13　ガラス底ボート

写真 14　ガラス底ボート内

写真 15　海中展望塔

写真 16　タコライス弁当

写真 17　美ら海水族館①

写真 18　美ら海水族館②

写真 19　集合写真①

写真 20　集合写真②

写真 21　集合写真③

写真 22　貸し切りビーチ

写真23　貸し切りビーチでBBQ①

写真24　貸し切りビーチでBBQ②

◎施設紹介②

＜ブセナ海中公園（グラス底ボート・海中展望塔）＞

沖縄県名護市の部瀬名岬にある海中公園で、沖縄観光開発事業団（現・沖縄観光コンベンションビューロー）により建設され、本土復帰以前の1970年にオープンしました。沖縄本島唯一の海中展望塔とクジラ型のグラス底ボートから沖縄海岸国定公園に指定されている自然豊かな海を服を着たまま気軽に観察できます。

＜沖縄海洋博記念公園・美ら海水族館＞

1975年に沖縄国際海洋博覧会が沖縄県本部町で開催され、博覧会終了後の1976年にその会場跡地に海洋博公園（国営沖縄記念公園海洋博覧会地区）が国営公園として設置されました。

海洋博公園は「太陽と花と海」をテーマに沖縄にふさわしい公園として計画され、（旧）水族館はその「海」の部分を担う施設としてスタートし、海洋博公園の人気スポットとして数多くの方に親しまれてきましたが、施設の老朽化のため2002年8月に閉館し、その年の11月から二代目の水族館が「沖縄美ら海水族館」として新たにスタートしました。沖縄美ら海水族館は、登録博物館に認定されています。

◎第４日目

８時にホテルを貸し切りバスにて出発し、９時30分におきなわワールドに到着しました。おきなわワールドでは、まず玉泉洞（鍾乳洞）を見学しました。その他にもおきなわワールドには琉球王国時代の古民家を見ることのできる城下町や熱帯エリアならではの熱帯フルーツ園を見学することができました。

中でも沖縄の伝統芸能であるエイサーショーは迫力のある音楽とパフォーマンスで大いに盛り上がりました。

12：00：那覇空港に到着し、空港内で昼食をとり、お土産を購入しました。そして、14時10分に那覇空港を出発し、16時50分に仙台空港に到着しました。迎えにこられた数名の保護者の方々に見守られながら解散いたしました。

写真 25　おきなわワールド①
（琉球王国城下町入口）

写真 26　おきなわワールド②
（エイサーショー客席）

写真 27　仙台空港（帰り）

５．研修成果発表

まとめとして、グループごとに沖縄研修旅行の新聞を作り、育英祭にて展示しました。

６．最後に

今回の「英進進学コース第３学年沖縄研修旅行」におきまして、実施のご許可をくださり、生徒たちに貴重な研修の機会を与えてくださった加藤雄彦理事長校長先生に心より感謝申し上げます。また、東武トップツアーズの庄司さんをはじめ、添乗していただいた方々、ホテルやバス会社・各施設の方々、そして生徒と教員の健康を見守っていただいた看護師の方々等、沖縄研修旅行に際してお世話になった皆様に深く感謝申し上げます。

高校入学時より新型コロナウイルスの感染が拡大し、なかなか学校行事ができなかったため、この研修旅行が実施できたこと、生徒にとっても教員にとっても大きな喜びで、一生忘れられない経験となりました。沖縄で学んだ悲惨な戦争の歴史、独自の文化は生徒にとってこれからの未来を創造する大きな一歩になったと確信しております。このような素晴らしい機会をいただき誠にありがとうございました。

フレックス・技能開発コース　沖縄研修報告

技能開発コース　　小原沙希子

1．はじめに

この学年はコロナウイルス感染症により様々な行事が行われず、この研修旅行が初めての大きな行事だった。そのフレックス・技能開発コース第３学年の沖縄研修旅行は、男女別に分かれて実施された。参加者は体調管理に気を配りながら日々生活し、当日は無事、希望者全員が沖縄研修旅行に参加することができた。今回は女子の沖縄研修旅行の報告である。（※行程は男女共通である。）

2．研修期間と参加人数及び引率教員

研修日：女子　令和５年４月14日（金）～17日（月）
　　男子　令和５年４月15日（土）～18日（火）

研修先：沖縄県（沖縄本島）

参加者：女子　45名（フレックス24名、技能開発コース21名）
　　男子　89名（フレックス18名、技能開発コース71名）

引率者：女子　◎青木康博、寺澤信枝、小原沙希子
　　男子　◎郷古武、佐々木寛史、志村大海、今かえで

3．研修目的

（１）班別活動を通じて、問題解決に必要な情報収集、処理能力を身につけ、協調性や自主性・責任感を養成する。
（２）団体行動を通して、クラス・学年の和を大切にする心を培う中で、友情を深めると共に集団行動のきまり・公衆道徳を身につける。また、集団の構成員としての健康管理や安全確保のあり方を考える
（３）沖縄の自然・文化・産業・生活などに触れることで視野を広めると共に、日本における沖縄の歴史の重要性について、体験学習や研修を通して理解を深める。

4．事前指導

LHRや総合的な探求の時間を利用し、以下の事前指導を行いました。
（１）健康調査（アレルギー調査を含む）
（２）自主研修の班編成
（３）自主研修の計画
（４）事後レポートの作成について
（５）研修の目的・心得・諸注意などの指導
（６）沖縄研修旅行結団式

5．行程表

第１日目（女子：４月14日／男子：４月15日）
集合…10：15仙台空港１階センタープラザ噴水前
仙台空港11：55→→→15：20那覇空港15：50＝＝＝16：20ホテルオーシャン那覇国際通り
到着後、国際通り散策（16：50～18：30）

第２日目（女子：４月15日／男子：４月16日）

那覇市内８：30＝＝＝９：00旧海軍司令部壕９：50＝＝＝10：20平和祈念公園12：20＝＝＝11：30ひめゆりの塔・資料館13：00＝＝＝13：50ホテル出発・・・那覇市内：班別自主研修・・・19：00ホテルオーシャン那覇国際通り

第３日目（女子：４月16日／男子：４月17日）

那覇市８：40＝＝＝10：00琉球村12：10＝＝＝12：40御菓子御殿恩納店13：30＝＝＝14：30沖縄海洋博記念公園16：45＝＝＝17：15ホテルリゾネックス名護

第４日目（女子：４月17日／男子：４月18日）

名護市８：00＝＝＝９：30おきなわワールド11：30＝＝＝12：00那覇空港14：00→→→16：50仙台空港

６．旅行記録

第１日目　４月14日（金）　天気：曇り

10時15分。参加生徒は予定通り仙台空港１階センタープラザ噴水前に集合し、出発式が行われた。その際に、東武トップツアーズの方から搭乗手続きや機内でのマナーといった諸注意を受けた。その後、手荷物検査場に移動し手荷物を預け、搭乗時刻までロビーで各自用意した昼食を摂るなどして待機していた。定刻になり、誰一人乗り遅れることなく全員搭乗した。初めて飛行機に乗った生徒が多く、離陸した瞬間大きな揺れに驚き「キャー！」と叫ぶ生徒が多数いた。

15時20分。那覇空港に到着し、現地ガイドのてぃーだ観光の方と合流をしてホテルオーシャン那覇国際通りに向かった。そして各自部屋に荷物を置いて18時30分の夕食の時間まで国際通りを散策した。夕食はバイキング形式で沖縄ならではの料理があり、生徒達は好きなものを選んで取り、班の仲間と歓談しながら食事をした。サプライズで地元の民謡歌手の方が登場し、三線の生演奏を披露していただいた。この時「ゆいゆい」という歌を一緒に歌い手踊りも覚え、その場が一体感に包まれた。ゆいゆいとは、助け合いの精神という意味の「ゆいまーる」が由来となっている。

研修旅行初日ということもあり、生徒達は移動で疲れていたのか、すぐ就寝していた。

第２日目　４月15日（土）　天気：雨

研修旅行２日目の行程は平和学習と班別自主研修で、天気は生憎の大雨。８時30分にホテルを出発し、旧海軍司令部壕に向かった。壕内は湿度が高く、地面も湿っており、足元に気を付けながら見学した。旧海軍司令部壕は日本海軍沖縄方面根拠地隊司令部のあった場所である。壕内は当時のまま残されており、幕僚室では自決した時の手榴弾の跡がくっきりと残っていた。戦時中ここで生活していたという事実を生徒達は間近に触れ、今ある生活がどれだけ恵まれているのか知ることができた。

平和祈念公園には平和の礎（いしじ）があり、そこには戦没者の氏名が刻銘さている記念碑がずらりと並んでいた。生徒達は手を合わせ戦没者のご冥福を祈った。記念碑には同じ宮城県出身者の方もおり、日本各地からこの沖縄戦に動員されていたことがわかった。

ひめゆりの塔・資料館では、ひめゆり学徒と呼ばれる10代の少女たちが看護要員として戦場に動員された時の当時の資料や映像を見ることができた。同年代の少女たちが戦争によって亡くなったという事実を知り、涙を流す生徒の姿が見られた。戦争の恐ろしさ、命の尊さ、平和の大切さを知ることができた貴重な時間であった。

班別自主研修では、事前に各班で考えたルートで那覇市内を散策した。雨の中傘を差し、移動が大変ではあったが、ブルーシールアイスを食べたり、お土産を買ったりと生徒達は沖縄を満喫していた。

第３日目　４月16日（日）　天気：晴れ

研修旅行３日目は天気に恵まれ、風景を楽しみながら琉球村に向かった。事前に希望をとっていたシーサーの絵付けやキャンドル作りなどを体験した。生徒達は真剣に制作活動に取り組み、個性豊かな作品を完成させていた。その後琉球村内を散策して昼食を摂りに御菓子御殿恩納店に向かった。ここではきれいな沖縄の青い海を見ながら沖縄ソーキそばとじゅーしぃ（沖縄の炊き込みご飯）を堪能した。昼食後は沖縄の名産のお菓子を購入している生徒もいた。

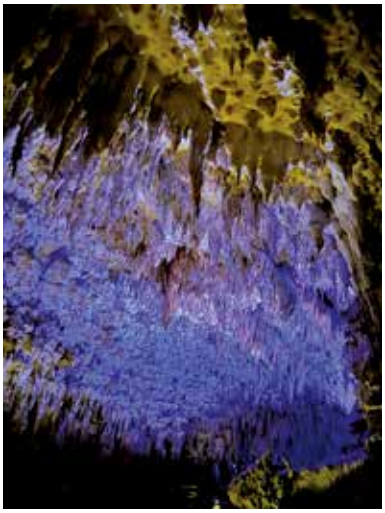
沖縄海洋博記念公園に行き、美ら海水族館の大水槽でジンベイザメを見たり、オキちゃん劇場でイルカショーを見たりするなどして、宮城では見ることができない多種多様な沖縄の海洋生物に触れることができた。生徒たちは写真を撮ったりお土産を買ったりして楽しんでいた。お土産コーナーにはジンベイザメのぬいぐるみくじがあり、１等を当てた生徒がいて大変喜んでいた。

夕食は夕日を見ながらビーチでバーベキューをした。各々好きな具材を鉄板で炒め、途中食材をアレンジして調理を楽しんでいた。怪我や事故がなく無事に３日目を終了することができた。

第４日目　４月17日（月）　天気：晴れ

最終日はおきなわワールドに行き、沖縄県で最大の鍾乳洞を散策したり、幸運の白ヘビと触れ合ったりしていた。他にも沖縄ならではの植物やフルーツが植えられている熱帯フルーツ園もあり、どのように実が付いているのかなど植物を観察することができた。実際に売店でフルーツを購入し、食べている生徒も見受けられた。

14時10分。両手にたくさんのお土産を抱え、名残惜しそうに那覇空港を後にし、16時50分に仙台に帰ってきた。仙台は寒く、沖縄との気候が違うということを改めて実感した。そして、解散式をして無事４日間の沖縄研修旅行を終えた。



７．終わりに

生徒達は普段の学校生活では味わうことができない沖縄の自然や文化、歴史に触れるなど貴重な体験をたくさんしたと思う。特に、戦争により亡くなった方がたくさんいるという事実を目の当たりにし、今ある環境がどれだけ恵まれているのか、命の大切さを学ぶ良い機会であった。沖縄には命こそ宝という意味の「命どぅ宝（ぬちどぅたから）」という方言がある。今を大事に生きようと生徒達は思っただろう。

沖縄研修旅行を実施するにあたり、コロナウイルス感染症の影響もある中、加藤雄彦理事長・校長先生の多大なるご配慮をいただき、心より御礼申し上げます。また、東部トップツアーズの依田さんをはじめ、現地バス、ホテル、各施設のスタッフの方々、沖縄研修旅行に際してお世話になった皆様方にも深く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

秀光コース２・１学年、秀光中学校３学年　カナダ研修報告

秀光中学校　３Ｓ１　担任　　伊藤　沙絵

はじめに

令和５年７月１日（土）より７月16日（日）まで14泊16日にて行われた秀光コース第２学年生徒14名、第１学年生徒10名、秀光中学校第３学年生徒11名によるカナダ研修について、ご報告申し上げます。

参加者　秀光コース　　第２学年　男子９名　女子５名
　　秀光コース　　第１学年　男子５名　女子５名
　　秀光中学校　　第３学年　男子４名　女子７名　　合計35名
引率者　団長：石田　真理子　（秀光コース教頭）
　　伊藤　沙絵　　（３Ｓ１担任）
　　Bryan Stevens　（IB MYPコーディネーター）

１．パワフルユース・グローバルリーダーシップ研修説明会

令和５年５月13日（土）10：00～12：00　宮城野校舎　栄光２階　大会議室にて実施

実行委員長の久保茉織の「全力で楽しみ、全力で学び、全力で思い出を作り、たくさんのことを持ち帰ることができる有意義な研修にしましょう。」という挨拶から始まり、引率教員の紹介と研修日程の確認を１時間ほど行った。

また、事前学習として、LHRや総合学習の時間を使って行った調べ学習を生徒一人一人が新聞の形にまとめたものを冊子にして保護者の方にお配りした。生徒の興味・関心に合わせて４つの分野「①カナダ・言語②文化③社会④その他」に分け、それぞれテーマを決めて行ったことで、グループ毎協力して調べ学習を進めることと、全員が異なるテーマについて詳しく調べることが実現した。

「カナダ研修のしおり」作成においては、実行委員の生徒たちが自主的に進めたことで大変有意義な内容となった。「持ち物のチェックリストを作成すること」「研修先についてまとめたものをつくること」「研修日誌は成長したＡＴＬスキルや学習者像の振り返りを入れること」「研修から学んだ、リーダー像について自分が体現できたことの振り返りを入れること」といった生徒たちの工夫が詰まったしおりとなった。研修の目標は「積極的に海外文化に触れ、主体的な行動で自身を成長させよう」に決まった。

２．研修日程

令和５年７月１日（土）

7：00	宮城野校舎集合、出発式	7：30	出発
13：30	成田空港　着	16：55	成田空港　発
7：50	バンクーバー空港　着	11：30	バンクーバー空港　発（バス）
15：00	ツワッセン　発（フェリー）	16：35	シュワルツベイ　着
17：30	Brookes Westshore　着		

７月２日（日）～７月14日（金）

Brookes Westshoreにて「Global Leadership Academy_2023」研修

７月15日（土）

6：00	Brookes Westshore　発（バス）	7：00	シュワルツベイ　発（フェリー）
8：35	トワッセン　着	9：20	バンクーバー空港　着
12：40	バンクーバー空港　発		

７月16日（日）

14：55	成田空港　着	16：30	成田空港　発
21：30	宮城野校舎到着・解散		

３．研修報告

第１日目　７月１日（土）

ほぼ定刻通りバンクーバー空港に到着後、トワッセンのアウトレットモールにて昼食を済ませ、フェリーにてバンクーバー島まで、それからバスでIB校Brookes Westshoreに到着した。カナダは７月１日が建国記念日ということで町中盛り上がっていた。カフェテリアで夕食をいただき、明日の予定についての連絡を受けた。生徒たちは学校のスタッフより一人ひとり面接を受け、部屋まで案内してもらった。

～１日目～

～１日目～

第２日目　７月２日（日）

朝食後、学校寮から車で１時間ほどの山の森林を40分ほどトレッキングし、ミスティックビーチに到着した。かなりハードな登山だったが、海を見ると生徒たちはテンションが上がり、ビーチサンダルで波打ち際で足を浸していた。夕方のオリエンテーションでは担当の先生方より明日から始まるプログラムの説明を受けた。生徒たちは皆元気で、空き時間はジムや外のバスケットコートなどのスポーツエリアで汗を流していた。

～２日目～

～２日目～

第３日目　７月３日（月）

いよいよグローバルリーダーシップアカデミーのプログラムが開始された。朝食後、シニア（高校）とジュニア（中学）に分かれてグループワークで「リーダーシップとは何か」を探究した。ランチ後は異文化理解のためにグループごとに異なるルールのトランプゲーム、15：00からエスキマルトの湖のほとりの広場まで散策し、手つなぎ鬼や綱引きなどアイスブレイクの大人数ゲームを楽しんだ。夕食後、色によりステータスを分けてそれぞれの家の絵を描き込む活動を行い、20：00から男女に分かれ、寮でのルールを話し合いポスターを作成した。

～３日目～

～３日目～

第４日目　７月４日（火）

ランチボックスを持ってWild Play ビクトリアにて活動を行った。カナダならではの自然の中でのジップラインやアスレチックで心も身体もリフレッシュできた。シニアの生徒たちは戻ってから７グループに分かれマシュマロチャレンジ（パスタ、テープ、紐、マシュマロを使ってタワーを立てるチームビルディングのゲーム）を行った。夕食後はシニアとジュニアの教室に分かれて自分のパーソナリティを振り返る仮面づくりに取り組み、完成後は自分の作成した仮面をかぶって集合写真を撮った。

～４日目～

～４日目～

第５日目　７月５日（水）

今日はパワフルユースの赤いTシャツを着て、２つのグループに分かれて奉仕活動を行った。ビーチのグループはプラスティックとガラスのごみ拾い、森林グループは専用手袋をはめてヘッジハサミで根やツタを伐採する作業を行った。特に伐採作業は日本ではなかなかできない体験で、夢中になって取り組んだ。午後はサービスラーニングでお世話になった方へのThank youカードを作成した後、ジムでエクササイズを行い、週末に行う文化交流の準備に取り組んだ。夕食後には振り返りを行い、19：30から近くのプールに行き、それぞれ楽しんだ。

～５日目～

～５日目～

第６日目　７月６日（木）

午前中は名前呼びゲームや目隠しチャレンジなど様々な活動を体験することで、対人関係のコミュニケーションを学んだ。昼食後は中庭にマットを敷いて２人１組のアクロ・ヨガを行った。２名のヨガ講師のもと、アクロバティックなポーズに挑戦した。それから、シニアは土曜日に行う奉仕活動の準備作業に取り組み、ジュニアは４日目にシニアが体験した「マシュマロチャレンジ」の後、カインドネスチャレンジの計画を立てた。

～６日目～

～６日目～

第７日目　７月７日（金）

バスでビクトリア市街へ移動し、10：00からグループごとに様々な指令をクリアして集合場所に戻るスキャベンジャーハントを行った。その後ダウンタウンで買い物をし、16：00 にブルックスに戻った。夕食後、ジュニアは想像と創造を駆使して取り組むマーシャンチャレンジ、シニアは奉仕活動の準備を行った。20：00 から文化交流ナイトという各々出身のグループに分かれ、その国の文化について紹介プレゼンテーションを行った。各国とも説明やパフォーマンスはもちろんのこと、食べ物や音楽も用意した。トップバッターは日本で、着物、たたみ、アニメなどのほかスポーツでは仙台育英学園のなぎなたや野球も説明した。秀光生のプレゼンテーション能力の高さが感じられた。

～７日目～

～７日目～

第８日目　７月８日（土）

シニアは早めの朝食を取って最終準備をした後、10：00にビクトリア市街にて奉仕活動を開始、ジュニアはマーシャンチャレンジの続きを行い、準備をして11：00に同場所でカインドネスチャレンジを開始した。なかなかうまくいかず涙する生徒もいたが、取り組みに賛同してくれる方もいて非常によい経験になった様子であった。公園でランチを取り、グループごとに輪になってSWOTの振り返りを行った。15：00にはビーコンヒルに移動し夕飯は屋外でのピザをいただいた。17：30にはブッチャートガーデンの広大な植物園を散策し、22：00にはそこで行われる花火を鑑賞した。

～８日目～

～８日目～

第９日目　７月９日（日）

９：00に出発し、２時間後に広場で１週間のリフレクションを行い、トレッキングでリトル・クアリカム・フォールズまで行き、滝を楽しんだ。その後屋根にヤギが乗っているのが特徴的なクームズマーケットで買い物をした。遠浅のラスターバービーチではみな足をつけたり軽い水浴びをした。ビーチで夕食のバーベキューのハンバーガーをいただいた。

～９日目～

～９日目～

第10日目　７月10日（月）

今週のテーマである「情熱、価値そして周囲の問題」の導入の説明があった。13：00よりゲストスピーカーとして先住民族の商業概念を尊重する投資家のためのスキルを提供する団体のCEOのSage Lacerteさんから話を聴いた。14：00からシニアはいよいよ個々人で取り組むDREAM Projectの準備、ジュニアはデザイン思考、プロジェクトの導入を行った。夕食後は部屋の掃除とチェックの後、シニアは自分が外科医チームのメンバーだったら２個の心臓を６人のどの人物に移植するかという問題にグループに分かれて議論し、ジュニアは自分なりのゴールをどのように設定するかという課題に取りんだ。

～10日目～

～10日目～

第11日目　7月11日（火）

今日はチームで10種目競技を楽しんだ。好きなチームに分かれ、チームカラーを決めて服も合わせ、それぞれのエリアで別のゲームを行い高い点数を目指した。ランチ後はそのグループでボールを飛ばす発射台を作成してどれだけ飛ばせるかを競う、カタパルトビルディングを行った。グループで戦略を立てることで、協働の難しさや利点に気づくことができた。夕食後は個々でDREAM Projectをさらに進めていった。20：00からはムービーナイトで、パワフルユースが本日誕生日を迎える生徒とスタッフのためにケーキを用意してくれ、みんなでお祝いをした。

～11日目～

～11日目～

第12日目　7月12日（水）

午前中、ジュニアは個人作業のポスターセッションの準備を開始し、シニアは引き続きDREAM projectのスライド作成を行った。また、全員でゲストスピーカーのKhatira Daryabiさんからオンラインで上手なプレゼンの仕方の話を伺った。ランチの後、ジュニアは渡された絵をつなげていく問題解決ゲーム、シニアはもし海で遭難したら必要なアイテムは何かを考える思考問題に取り組んだ。14：00から音楽、ダンス、美術、ゲーム作り、シアターのそれぞれ好きなグループに分かれて創作活動に取り組み、タレントショー参加の準備をした。16：00からはアートルームでTシャツの色染めの活動（Tie-Dye）。夕食後はプレゼンのフィードバック、そして20：00からはいよいよタレントショーで、秀光生らしくバイオリンや合唱など多才な面を発揮し拍手喝采を浴びていた。

～12日目～

～12日目～

第13日目　7月13日（木）

午前中、ジムで昨日のスポーツグループからの発表があり、その後シニアとジュニアに分かれてビジョンを話し合った。11：00からはシニアがDREAM project、ジュニアがDesign thinking に取り組んだ。ランチ後にフィードバックを行い、15：30からはハトレー城に散策に出かけた。その後も男女に分かれての夜のお楽しみ会boys'/girls' nightまでは、引き続き明日発表するためのスライドやポスター作りに励んでいた。

～13日目～

～13日目～

第14日目　7月14日（金）

午前中、シニアは５つの教室に分かれ一人ひとり作成したスライドでDREAM Projectのプレゼンテーション、ジュニアはデザイン思考の発表をポスターでギャラリーウォークの観客に説明をした。午後はTOPプロジェクトに選ばれた５名が全員の前で再度発表を行った。メキシコから２名、台湾から１名そして日本の秀光から２名の生徒が選ばれ、堂々と最終プレゼンを行うことができた。その後振り返りを行い、明日早朝の出発に向けて部屋の整理とパッキングを行った。19：00からの修了式は制服で臨み、一人ひとりが頂いた修了証書には異なるコメントが記してあり、とても感動的なものであった。夜は思い出深いカナダ研修の締めくくりのパーティーをし、それぞれ別れを惜しんでいた。

～14日目～

～14日目～

第15日目　7月15日（土）

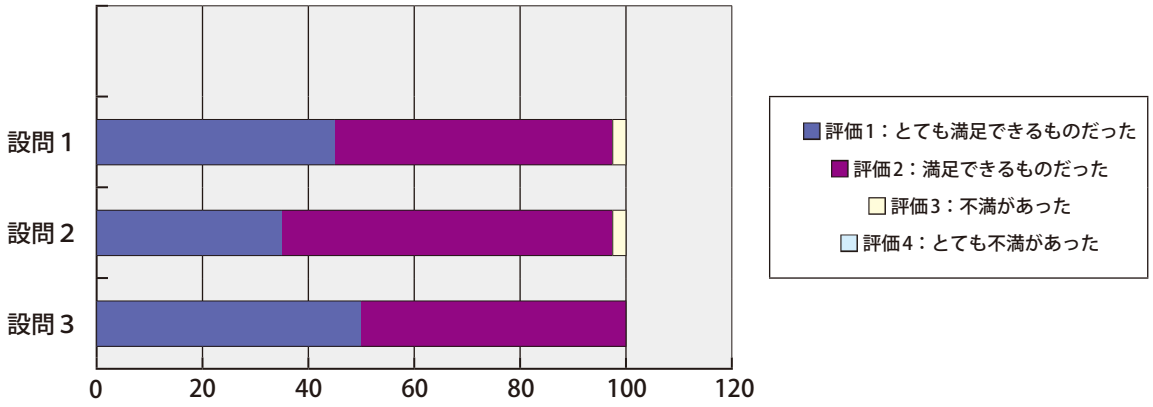
仲良くなった各国の生徒たちや先生方との別れを惜しみながら早朝、出発した。その後、バンクーバー空港で最後の買い物を楽しんだ。日本到着後は皆一様に日本の暑さに驚いた。22：00頃宮城野校舎到着後、解散とした。

4．総括

4.1．生徒へのアンケート結果より（抜粋）

（1）選択式アンケートへの回答

	設問内容	評価１	評価２	評価３	評価４	有効回答数
設問１	Powerful Youthのプログラム内容について	15	18	1	0	34
		44.1%	52.9%	2.9%	0.0%	
設問２	研修全体の理解度について	12	21	1	0	34
		35.2%	61.7%	2.9%	0.0%	
設問３	研修全体を通した内容について	17	17	0	0	34
		50.0%	50.0%	0.0%	0.0%	



設問１では、33名の生徒がPowerful Youthのプログラムの内容に満足していた。その理由としては、「英語力の向上だけでなくIB学習者として成長を実感できるプログラムだったから。」「様々な人と話し合い意見を述べることでコミュニケーション能力が身についたから。」「リーダーシップ研修ということで、自身がリーダーであるという自覚を持つことの大切さを学ぶことができたため。」といったものであった。一方で、不満があったと答えた生徒は、「活動がリーダーシップを発揮することに直結するのかわからなかった。」という理由であった。

設問２では、研修内容を理解できた生徒は33名であった。英語の語学力の差によって内容を十分理解できた生徒とおおむね理解できた生徒で分かれたようであった。

設問３では、研修全体を通した内容について全員の生徒が満足していた。海外へ行き実際に異文化に触れたことや初対面の人ともコミュニケーションをとろうとした経験を通して精神的に成長し、諦めない心を手に入れられたと考える生徒が多かった。

(2) 自由記述式アンケートへの回答

設問１：今回の研修内容はあなたの将来にどのように役立つと思いますか。(回答抜粋)

「母国語ではない言語の中で親から離れた環境で過ごした二週間では、何としてでも自分の伝えたいことを伝えなければならないという状況の中で何にでも挑戦するということを学べた。」

「普段海外の自由な発想や行動力に触れる機会が少なく、初めて海外へ向かった私にとって、自分の固定概念を変えるきっかけになった。」

「他の国の人たち、特にルームメイトと言語の壁がありながらも交流できたことは、異文化理解や英語をツールとしてコミュニケーションを取る良い機会になった。これらは、将来留学をしたり、また国内で外国人と関わったりする上で自分から話しかけに行ったり、英語を学んだりする上でのきっかけやモチベーションになると思う。」

設問２：今回の研修内容はあなたが英語力を身につける上でどのように役立つと思いますか。(回答抜粋)

「経験や自信を持つことができるきっかけの１つになるし、もっと話せるように、聞き取れるようになりたいという気持ちがモチベーションに繋がると思う。」

「日常会話やグループワークでの会話で英語を沢山聞いたり、使ったりしたので教科書で学べる基礎英語のようなものだけではなく、ネイティブが使うナチュラルな英単語や文法を知ることができた。」

設問３：今回の研修をより充実させるためには何が必要だと感じましたか。(回答抜粋)

「英語力」と「積極性」と回答している生徒が非常に多かった。

設問４：今回の研修全体を通じて、気づいたことや感じたこと、伝えたいことなどがあれば自由に記述してください。(回答抜粋)

「英語を学ぶだけでなく、さまざまな人と出会い、経験をしたことで視野が広がった。色んな国の学生と交流できたことが、自分の自信やモチベーションにも繋がった。」

「海外の友達だけでなく、一緒に行った秀光生のなかでも仲良くなることができて良かった。」

「親元を何週間も離れて海外で勉強するということはほとんどの人にとって未知の世界で、行くという決断に至るのは難しいと思いますが、私は海外研修に行って後悔は１ミリもしなかったし、行く前の不安より行った後の学びや楽しみが断然上回ったので興味がある人はぜひ行くことをおすすめします！」

４.２．引率より

(1) Powerful Youthプログラムについて

Powerful Youthのプログラムは座学と外でのアクティビティがバランスよく組み込まれているため、生徒たちは充実した日々を送ることができた。生徒アンケートからも分かるように素晴らしいプログラム内容であり、次年度以降もぜひ継続すべきだと思われる。

(2) 寮生活について

現地の先生方が寮の鍵を管理しており、22時以降に外出することはできない。また、日中も基本的には施錠する決まりとなっていた。また、体育館やミーティングルームを生徒が使用する際や、寮の部屋に忘れ物があった際にはその都度鍵を開ける必要があった。

(3) パソコン及びスマートフォンについて

現地の学校には使えるパソコンが数台に限られていたため、秀光生はスマートフォンや、Own PCを持参した。ジュニアもシニアも発表ではパワーポイントを用いることが多いため、PCの持参は必須であると感じた。

(4) 生徒の活動時間および健康管理、服装について

基本的には朝8：00に朝食を摂り、外が明るい21：30頃までフリータイムで遊んだあと、22：00には就寝というスケジュールであったが、ブッチャートガーデンでの花火鑑賞や、最終日のパーティーなど、深夜0時を過ぎるまで活動することもあった。また、日中は日差しが強いため日焼け止めやサングラスは必須である。一方で室内は冷房がかなり効いているためパーカーなど暖かい服装を多く準備する必要がある。(暖かい服を数枚しか持ってこないで困っている生徒もいた)

5. 謝辞

カナダ研修において、結団式で他国の生徒との関わり方や学ぶべきことの指針をご教授下さり、あらゆる面において生徒たちを導き、私たちにご指導頂きました加藤雄彦校長先生に心より感謝申し上げます。また、カナダ研修に関わりご協力、ご支援いただきましたすべての方々に御礼申し上げます。

新型コロナウイルス感染拡大後初めての海外研修となった今回、３学年合同ということもあり生徒たちは他国の生徒だけでなく、秀光生としても交流を深められたように感じます。協力して物事に取り組むことの楽しさ・大切さ、人前で話すことの難しさや英語の伝わらない悔しさなど、さまざまな感情を抱くことができました。今回の経験を忘れることなく、世界の中で自分は何ができるか・何をしなければならないのかをよく考えて、次に活かしていくよう教え導きたいと思います。

総目録（第1号～38号）

１９８６年3月　第1号

巻　頭　言……加藤　昭

Ⅰ．各種研修会・研修講座に参加して
・全国私立中高全国私学教育研究集会……2
第33回　全国私立中学高等学校
全国私学教育研究集会山口大会参加報告（1）
柏倉　拓
全国私学教育研究集会山口大会参加報告（2）国語部会
－新学習指導要領における文学教育－　青野　宏一

・全国私立中高国際教育研修会……7
第7回全国私立中学高等学校
国際教育研修会に参加して　教諭　宝槻　隆史

・第12回「米国における社会研修講座」……10
第12回アメリカ社会研修講座に参加して
副題日米社会の相違と文化摩擦　佐々木　豊

・第7回「私学の新任若手教員の研修講座」……12
第7回私学の新任・若手教員研修講座に参加して
渡部　進

・「名取平野の文化財」史跡見学会の記録より ……14
渡邊　泰伸

Ⅱ．昭和60年度職員研修会
・授業研究・各科研究会……27
国語科（現代文）学習指導案　遣水　満雄
社会科（日本史）学習指導案　駒板　泰吉
数学科（数学Ⅰ）学習指導案　乾　敬
数学科学習指導案　鈴木　襲治
理科学習指導案　丸山　実信
TEACHING PLAN　By Akiyoshi Ohmi
情報処理科　研修のまとめ
公開授業　教科：ベーシック
担当者：野村コンピューターシステム㈱西村　昌郎
保健体育科柔道学習指導案　佐々木　豊
芸術科研修のまとめ

編　集　後　記

１９８７年3月　第2号

巻　頭　言……加藤　昭

Ⅰ．研究
・宮城県加美郡中新田町熊野堂遺跡調査略報……2
渡邊　泰伸
・コンピュータによる学業成績処理 ……28
瀬戸　信男
佐々木一郎

Ⅱ．各種研修会・研修講座に参加して
・第13回米国における社会研修講座に参加して ……39
沢田　敏明
・英語教師のための夏期セミナー講演会報告 ……42
山田　昇
・第24回全国私立中学高等学校
保健体育科研修会に参加して ……50
阿部　俊英
・第28回全国私立中学高等学校
理科（生物）研修会に参加して……52
今野　良裕
・第1回全国私立中学高等学校
ニューメディア教育研修会に参加して……54
瀬戸　信男

Ⅲ．昭和61年度職員研修会
・授業研究・各科研究会 ……59
国語科研究会報告　遣水　満雄
社会科研究会報告　渡邊　泰伸
数学ＩＣ不等式の表す領域　中川　良雄
代数幾何学習指導案　渡部　進
数学科研究会報告　中川　良雄
理科Ⅰ学習指導案　砂沢　準助
英語科研究会報告　宝槻　隆史
芸術科研究会報告　安倍　一男
情報処理Ⅰ（BASIC）　小林　慶三
佐々木一郎
保健学習指導案　佐々木松治

編　集　後　記

１９８８年3月　第3号

巻　頭　言……加藤　昭

Ⅰ．研究
・仙台市安養寺下窯跡……2
渡邊　泰伸
研究発表
・大学入試に取り扱われたカテナリー・サイクロイド・インボリュート曲線について ……22
鈴木　弘

Ⅱ．各種研修会・研修講座に参加して
・第十四回　米国における社会研修講座（CIAA主催）に参加して ……29
今野　良裕
・アメリカテキサス大学語学研修報告 ……60
柏倉　拓
・第二十五回全国私立中学高等学校
保健・体育科研修会報告 ……71
沢田　敏明

・第二十一回全国私立中学高等学校
生徒指導研修会報告 ……76
佐々木　豊
・第二十三回全国私立中学高等学校
道徳宗教教育研修会報告 ……78
及川千一郎
・第二回全国私立中学高等学校
ニューメディア教育研修会報告 ……81
大場　幸
・第九回国際教育研修会報告 ……86
出井まち子
・ジェラルド・ロビンス　ピアノリサイタル報告
……89
荒井　恵子

Ⅲ．昭和62年度職員研修会
・授業研究・各科研究会 ……91
・短歌教材指導について……高橋　正幸
・社会科研究会報告……柏倉　拓
・数学科（基礎解析）学習指導案……乾　敬
・校内公開授業……中川　良雄
・数学科研究会報告……佐藤　亘
松尾　勝郎
・理科（化学）学習指導案……櫻井　忠良
・理科研究会報告……砂沢　準助
・英語科研究会報告……小野　明夫
・書道Ⅱの学習指導について……安倍　一男
・ワープロ学習指導案……遠藤　卓
大場　幸
・保健体育指導……阿部　由晴

編　集　後　記

１９８９年３月　第４号

巻　頭　言

Ⅰ．研究発表……1
加藤　昭
1．安養寺下窯跡第３次調査 ……2
渡邊　泰伸
2．同一素材の外国語翻訳を試みて……28
波里　光彦

Ⅱ．海外研修 ……45
1．アメリカ夏期語学研修についての報告と所感‥46
坂爪　英夫
2．地球の裏から「オブリガード」……51
宮本　昇

Ⅲ．全国私学研修報告 ……63
1．ニューメディア教育研修会報告 ……64
大場　幸
2．現代社会とこれからの体育……96
丹野　博太

Ⅳ．第36回全国私学教育研究集会新潟大会 ……99
1．特色教育部会報告……100
高山　直光
2．福祉活動を中心として……110
小林　慶三
3．教育課程部会報告……114
庄司　均
4．国語分科会……121
笠岡　庸志
5．英語分科会……134
宝槻　隆史
6．商業部会報告……138
遠藤　卓

Ⅴ．校内公開授業各科研究会……141
・国語科研究会報告
北欧の国語教育と日本……遣水　満雄
・国語研究会報告
ソビエト連邦の教育事情と日本……中津川清風
・社会科研究会報告……小野寺文雄
・数学科研究会報告
校内研究授業［数学Ⅰ］学習指導案‥‥岩渕　定義
校内研究授業［確率・統計］学習指導案
……鈴木　弘
・理科研究会報告……砂沢　準助
・理科授業研究…〝ヒトの生殖と発生〟を行うにあたって
……横澤　秀夫
・英語科研究会報告……宝槻　隆史
谷津　繁勝
小野　明夫
大沼　洋二
・芸術科研究会報告
時代に即した音楽教育……武藤　信子
・保健体育科研究会報告
保健体育「柔道」指導案……沢田　敏明
・情報処理科研究会報告
「進化する紙」……佐々木一郎

Ⅵ．編集後記・奥付……176

１９９０年３月　第５号

巻　頭　言……加藤　昭

Ⅰ．研究
・仙台市安養寺下窯跡　第４次調査概報……1
渡邊　泰伸

Ⅱ．各種研修会・研修講座に参加して
・全国私学教育研究集会講演（教育課程部会）より
……25
小林　慶三
・平成元年度　高等学校学習指導研修会……27
渡部　進
・私学経営研究会教員研修セミナー

第11回私学の新任・若手教員研修講座報告 ····35
若澤　幸弘・及川　隆夫
・第37回全国私学教育研究集会大阪大会
岩渕　定義
〔1〕数学分科会報告 ·····49
〔2〕進路指導部会報 ·····63
・全国私立中学高等学校
第4回ニューメディア研修会に参加して·····74
渡部　　進
・第30回東北地区私学教育研究会に参加して ····86
山田　　昇
・第25回全国私立中学高等学校家庭科研修会 ····90
庄司　　均
・カナダ語学研修について ·····93
佐々木清彦
・英国語学研修報告 ·····102
阿部　　徹・出井まち子
・カー先生の日本体験記 ·····117
波里　光彦

Ⅲ．授業研究・各科研究会
・国語科学習指導案 ·····143
千田　亥彦
・数学科学習指導案 ·····146
渡部　　進
・数学科学習指導案 ·····152
菅井　　了
・数学科研究会報告 ·····157
・理科（化学）学習指導案 ·····161
半澤　　健
・化学実験の一考察 ·····167
半澤　　健
・情報処理科（薄記会計）学習指導案 ·····173
佐々木英明
・保健体育科学習指導案 ·····177
丹野　博太

編　集　後　記

１９９１年3月　第6号

巻　頭　言 ·····加藤　　昭

Ⅰ．国際化教育への模索
・日本の「国際化」に思う ·····1
波里　光彦
・創立85周年記念事業 国際理解のための講演会··17
研　修　課
・全国私立中学高等学校
第12回国際教育研修会に参加して ·····34
佐々木清彦
・夏期イギリス語学研修（女子）·····60
関谷　照夫
・夏期イギリス語学研修（男子）·····73
桜井　忠良
・女子卓球部中国遠征報告 ·····85
若澤　幸弘
・仙台育英学園高等学校創立85周年記念
日本，カナダ国際親善ラグビー遠征記 ·····89
伊藤挺一朗
・第31回東北地区私学教育研修会　英語分科会
「How to give the motivation to the students」
·····104
キャム・カー

Ⅱ．多賀城フォーラム
・「多賀城フォーラム21」行わる ·····121
加藤　雄彦

Ⅲ．研究・研修
・第25回全国高等学校体育学科連絡協議会に参加して
·····137
丹野　博太
・平成2年度　研修課年間計画
情報処理研修報告 ·····144
佐藤　正行
・平成2年度全国私立中学高等学校
第5回ニューメディア教育研修会報告 ·····167
佐藤　正行
・私学経営研修会教員研修セミナー
第12回私学の新任・若手教員研修講座報告····222
佐藤　正行
・第12回私学の新任・若手教員研修講座 ·····227
佐々木英明
・西多賀養護学校を訪問して ·····228
若澤　幸弘
・宮城県生徒指導研修会に参加して ·····230
佐々木英明
・国語科（漢文）公開授業並びに教育研究会····241
寺尾　幸吉
・数学科公開授業並びに教科研究会 ·····248
近藤　精宏
・英語科公開授業並びに英語科教科研究会 ·····255
立谷　　翆
・理科科公開授業並びに教科研究会 ·····260
男澤　文義
・社会科教科研究会 ·····263
阿部　　徹
・保健体育科（保健）公開授業並びに教科研究会··266
沢田　敏明

編　集　後　記 ·····269

１９９２年3月　第7号

巻　頭　言 ·····加藤　　昭

Ⅰ　研究
・仙台市安養寺下窯跡 ·····1
渡邊　泰伸

Ⅱ　多賀城フォーラム
・第２回多賀城フォーラム　……37
加藤　雄彦

Ⅲ　講演「山形の一教師の実践論」……55
山形県生涯学習人材育成機構専務理事　打田　早苗

Ⅳ　研修報告
・平成３年度高等学校教育課程講習会　……75
凌　　時哉
・東北国語教育研究会　……83
佐々木隆男・板橋　敏男
・平成３年度宮城県高等学校教育課程講習会外国語部会
……94
関谷　照夫
・第13回私学の新任・若手教員研修会　……120
佐藤　　弘

Ⅴ　海外遠征報告（平成３年度）
・夏期カナダ語学研修……125
関谷　照夫
・夏期イギリス語学研修（男子）……135
山田　紀英
・夏期イギリス語学研修（女子）……150
砂金　　紀
・オックスフォード紀行……162
高平たつみ
・軟式庭球部台湾遠征……172
佐藤　正行
・女子卓球部スウェーデン遠征……176
大岡多津子
・イタリア知識旅行事前調査……180
小林　慶三・渡部　　進・佐々木順子
武田　美法・加藤　晃孝
・女子卓球部中国（上海市）遠征……191
若澤　幸弘

Ⅵ　研究・研修
・校内研修会実施要……193
・国語科公開授業並びに教科研究会……194
及川千一郎
・数学科公開授業並びに教科研究会……224
佐藤　　孝
・英語科公開授業並びに教科研究会……230
秋山なみ江・出井まち子
・理科科公開授業並びに教科研究会……232
渡辺　重隆
・社会科教育研究会……238
加藤　晃孝

Ⅶ　論文
・国語科短歌鑑賞会
－高校生の読み物として－名歌少考……245
高橋　正幸
・「うたごころ」……256
加藤　武夫

編　集　後　記……259

１９９３年３月　第８号

巻　頭　言……加藤　　昭

Ⅰ　研究
・仙台市安養寺下窯跡（第７次調査概報）……1
渡邊　泰伸

Ⅱ　研修・遠征報告
・第14回私学の新任・若手教員研修講座……47
槙　　統
・全国高等学校選抜卓球大会二連覇を達成して……50
大岡　　厳
・オーストラリア英語に接して　……52
庄子春一郎
・平成４年度夏期イギリス語学研修　……54
渡邊　泰伸
・男子陸上チームのカナダ・バンクーバー遠征……106
二階堂　進

Ⅲ　校内研修会
・平成４年度校内研修会実施要項……109
・国語科教科研究会……110
佐藤　秀一
・数学科公開授業並びに教科研究会……154
加藤　晃孝
・理科科教科研究会……163
八木　　浩
・社会科教科研究会……203
佐藤　林平
・保健体育科公開授業並びに教科研究会……212
槙　　統
・情報処理科公開授業並びに教科研究会……217
佐々木英明

編　集　後　記……223

１９９４年３月　第９号

巻　頭　言……加藤　　昭

Ⅰ．加藤利吉先生生誕111年　学園創立88周年記念事業
・多賀城校舎グロリーホール落成を記念して……1
半沢　　健
・記念講演－大きく変わりつつある世界そして学校のゆくえは……7
ロバート・カークナー
・平成５年度父母教師会総会講演　……26
トミー植松

Ⅱ　研究
・仙台市安養寺下窯跡（第８次調査概報）……37
渡邊　泰伸
・宮城県志田郡松山町下伊場野窯跡調査略報　……58
渡邊　泰伸

Ⅲ　海外研修・遠征報告
・女子バレー部韓国研修旅行……105
佐藤　幸雄
・サッカー部ドイツ遠征……107
佐藤　脩
・中国グランプリ国際大会報告書……123
大岡　巌
・ボーンマス再訪……124
渡邊　泰伸
・平成５年度イギリス語学研修に参加して……180
高谷　功
・平成５年度カナダ研修旅行……195
今野　仁
・クリスマスをアメリカの一家庭で過ごして……206
庄子春一郎

Ⅳ　研修報告
・平成５年度私立学校初任者研修全国研修会（第２回）……209
庄司　和良
・平成５年度私立学校初任者研修全国研修会（第２回）……214
寺内るみ子
・第15回私学の新任・若手教員研修講座　……219
寺内るみ子
・第15回私学の新任・若手教員研修講座を受講しての報告……223
松原潤一郎
・全国私立中学高等学校性教育研修会参加報告……226
柏倉　拓
・平成５年度全国私立中学高等学校生徒指導研修会……230
宝槻　隆史
・私学の特色ある教育課程の実践に向けてⅡ……233
佐々木　豊
・平成５年度全国私立中学高等学校数学科研修会報告……248
加藤　晃孝・鈴木　孝司
・全国私立中学高等学校英語科研修会……252
武田　美法

Ⅴ　校内研修会
・平成５年度校内研修会実施要項……255
・効果的国語指導の在り方……256
及川千一郎・清水　初治
・社会科教育研究会……266
高谷　功・渡邊　泰伸
・数学科研究会記録……271
佐々木順子
・地学学習指導案……276
武田　要吉
・英語科研究会……285
武田　美法
・総合実践業務処理システム実習概要……293
瀬戸　信男
・保健体育科学習指導案……325
庄司　和良
・保健体育科柔道学習指導案……327
松原潤一郎

編　集　後　記……330

１９９５年３月　第１０号

巻　頭　言……加藤　昭

Ⅰ　研究
・仙台市安養寺下窯跡（第９次調査概報）……1
渡邊　泰伸

Ⅱ　海外研修・語学研修
・英国語学研修［ボーンマス］の記録　……31
渡邊　泰伸
・カナダ語学研修旅行を共にして　……93
日下　英夫
・カナダ語学研修報告……105
柏倉　拓
・CBS杯招待遠征報告（韓国(ソウル)雑感）……115
丸山　博史
・韓国CBS杯全国高等学校バレーボール大会に参加して……121
藤屋　秀人
・ニュージーランド語学研修／姉妹校訪問……124
二階堂　勉
・ニュージーランド語学研修……129
小野　裕子
・ハワイ修学旅行下見についての報告と雑感……131
坂爪　英夫
・ラグビー部ニュージーランド遠征についての報告……136
丹野　博太
・ヨーロッパ・橋紀行……145
関根　一郎
・オーストラリアの高校生活－公立キルコイ高校の場合……154
庄子春一郎

Ⅲ　研修報告
・平成６年度私立学校初任者研修北海道東北地区研修会報告……163
引地　由佳
・平成６年度私立学校初任者研修北海道東北地区研修報告……167
中村　千恵

・第35回東北地区私学教育研修会 ……171
今野　仁
・第35回東北地区私学教育研修会参加の報告‥‥180
佐藤　林平
・第35回東北地区私学教育研修会進路指導部会‥199
大場　幸
・第35回東北地区私学教育研修会学習指導部会理科分科会……205
大沼　正行

Ⅳ　校内研修会
・平成6年度校内研修会実施要項 ……209
・「国語科」研究会 ……210
鎌田　敬
・数学科研究会記録……215
佐藤　孝
・英語科研究会……220
砂金　紀
・理科研究会……226
横澤　秀夫
・社会科研究会……235
阿部　徹
・情報処理科研究会……242
佐藤　正行・内海　利男
・保健体育科指導計画……256
中村　光男

１９９６年3月　第１１号

創立90周年特別号
巻　頭　言……加藤　昭

Ⅰ　研究
・「世界史」探訪の旅 ……1
武田　義之
・不登校児への対応を探る……8
半澤　健
・宗教と人生 ……20
小柳　俊夫
・文学教材指導法雑感 ……34
伊藤源太郎
・補助教材として授業中に使用した参考作品集‥‥48
丹野　将範
・生活史に反映する伝承音楽の役割 ……94
鎌田　敬

Ⅱ　海外研修
・カナダ研修旅行……111
太宰　芳郎
・イートン校サマースクールを終えて……121
加藤　晃孝
・ オーストラリアの中学生活
公立モーソン中学の場合 ……125
庄子春一郎

Ⅲ　研修報告
・平成7年度『財政経済セミナー』に参加して
我が国財政の現状と課題……129
小嶋　聡悦
・全国私立中学高等学校国語科研修会研修報告書
……170
引地　由佳
・「性教育研修会」に参加しての報告 ……174
出井まち子

編　集　後　記……177

１９９７年3月　第１２号

巻　頭　言……加藤　雄彦

・授業の活性剤……1
半澤　健
・世界史探訪の旅Ⅱ……6
武田　義之
・修学旅行事前調査報告 ……21
沼田嘉一郎
・韓国スポーツ交流団へ参加して ……26
坂爪　英夫
・韓国修学旅行事前調査に参加して ……53
宝槻　隆史
・Memories of Canada ……59
清水　初次
・学校茶道の果たす役割 ……63
佐藤　宗秀
・茶事の研修 ……69
岡崎　宗豊
・裏千家今日庵を訪ねて ……71
馬淵　宗友
・21世紀にお茶の心をつなごう ……74
木村　宗智
・カナダ研修旅行報告 ……78
山田　昇
・イギリスアップランズカレッジ語学研修事前調査にいって ……82
小嶋　哲朗
・「私学教員のめざすもの」についての一考察‥‥85
下平　孝富
・北海道・東北地区研修会 ……88
富澤　良江
・当世イングランド南西地区環境状況 ……91
内海　利男
・宮城野校舎での「LD学習」の利用の現状について‥94
工藤　敏夫
・『第1回実用英語技能検定』の結果を振り返って‥100
尾形　照子
・異文化体験……102
庄子春一郎
・『ライオンの晴』発行について ……108
山本吉之助

・CS向上めざして教養コースからの提案 ……113
坂爪　英夫
・多賀城セクション生徒寮保護者懇談会概要報告‥126
守　喜美夫・加藤　晃孝
・教育実習（養護教諭）期間中に行った研究について
……137
指導　木村　保子・佐藤　雅美
・KOREA旅行雑感・1996年 ……145
阿部　俊徳
・長春外国語学校との姉妹校締結記念
中国訪問親善交流・研修の記録……152
曾我　道雄
・那須研修の現状について ……166
藤岡　昌之

編　集　後　記……186

１９９８年3月　第１３号

巻　頭　言……加藤　雄彦

・演題「180°変わる進学英語」……1
佐藤　良明
・世界史探訪の旅Ⅲ－チュニジア共和国とカルタゴの
遺跡－ ……10
武田　義之
・雄と雌の話 ……25
半沢　　健
・高校生の喫煙についての一考察 ……52
富澤　良江
・平成８年度教養コースにおける生徒指導の一つの試み
……59
沼田嘉一郎
・平成８年度修学旅行 ……75
瀬戸　信男・小川　久松・渡邊　泰伸
・カナダ日記　1997年夏……84
阿部　俊徳
・アンコール・ワットへの旅 ……94
佐藤　雄三
・CS向上をめざす物理教育の一試案 ……102
高橋　　明
・英国語学研修実施報告……121
千代窪敏光
・平成９年イギリス夏期語学研修（ボーンマス団）
……125
遊佐　隆司
・松島研修センターの概要……133
榊井　庸彦・渡辺　章紀・佐々木英明
千葉　　浩・青木　康博
・オーストラリアのハイスクール……149
庄子春一郎
・ペルシアの風－イラン旅情……158
伊藤源太郎
・授業における吹奏楽の試み……212
牛渡　　純
・はじめてのクロアチア国際交流……218
澤口　　衛・藤屋　秀人
郷古　　武・木村　美知
・国際ゆめ交流博覧会の報告……230
ジェシンタ　ワンジロ　ムタヒ

編　集　後　記

１９９９年3月　第１４号

巻　頭　言……加藤　雄彦

・初任者研修……1
PART Ⅰ　宮城野中学校での中高連携授業研究会に
参加して
日比野曜子　　鈴木　暁子　　佐々木順子
引地　由佳　　下平　孝富　　佐々木順一朗
富澤　良江　　箱島　道泰　　槙　　統
藤屋　秀人　　千葉　　浩　　岡崎　由起
古宮　紀子　　池口真理子　　鈴木　保恵
松原潤一郎　　吉田　　淳　　郷古　　武
望月久美子
PART Ⅱ　三色最中を訪ねて
望月久美子　　下平　孝富　　古宮　紀子
池口真理子　　槙　　統　　鈴木　暁子
松原潤一郎　　佐々木順子　　鈴木　孝司
鈴木　保恵　　岡崎　由起　　引地　由佳
・数学嫌いをつくり出す原因を本校生徒よりさぐる
……33
渡部　　進
・ Message from Mahurangi College, NZ ……45
ジョン・スコベル
・ニュージーランド修学旅行 ……48
庄子春一郎
・ドイツ滞在３年あれこれ ……54
佐々木芳輝
・高等学校におけるコンピュータ事情 ……63
高階　　公・若松　武徳
・我が国の人名習俗－複名習俗としての－ ……74
新関　昌利
・ヨーロッパ知識旅行 ……84
藤岡　昌之
・薄記会計１級合格を目指して ……91
坂爪　英夫
・シリーズPART Ⅳ「中国」……93
北京・長春の見聞
中国の近代史をみる
坂爪　英夫

編　集　後　記

２０００年3月　第１５号

巻　頭　言……加藤　雄彦

Ⅰ　研究報告
⑴平成７，８年度帰国子女教育研究 ……１
千葉　　浩
⑵高校生時代の「日の丸」掲揚、「君が代」斉唱と、その人格形成への影響について－「日の丸」「君が代」に関する一考察－ ……30
若松　武徳
⑶わが育英における語学教育－中国語教育について－ ……44
張　　言行

Ⅱ　平成11年度新任者研修の記録
⑴「講演会」……49
大学から見た、これからの青少年への期待
期　日　H.11年3月8日（月）16時より
講　師　東北大学総長・工学博士　阿部　博之先生
会　場　宮城野校舎　大会議堂
⑵「講演会」
コーチング科学について
期　日　H.11年6月18日（月）
16：30～17：50
講　師　順天堂大学スポーツ健康科学部、
コーチ学バレーボール研究室　河合　武司　先生
⑶平成11年度体育会運動部校内研修会
－コーチング科学講演会をきいて－ ……71
杉本　　真・進藤由里子
⑷北海道・東北地区私学学校初任者研修会に参加して－職業人である私学教員として「私学」というものをきちんと理解し、認識する－ ……74
鎌田千佳子
⑸北海道・東北地区私立学校初任者研修に参加して－21世紀が求める学力を育む学習とその指導－ ……80
佐藤　恵美

Ⅲ　研修旅行
⑴イギリス・アップランズカレッジ語学研修 ……85
千葉　　浩
⑵カナダ研修旅行記 ……96
秋山なみ江
⑶イギリス語学研修……104
武田由紀子
⑷1998年教養コース修学旅行下見報告（瀬戸内班） ……113
渡邊　泰伸

Ⅳ　歳時記
⑴NewYork Symphonic Ensemble
－Japan Concert Program 1998－
1.「ニューヨーク・シンフォニック・アンサンブルと仙台育英高等学校混声合唱団・仙台育英学園秀光コース・秀光中学校オーケストラ・ジョイントコンサートを終えて」……122
牛渡　　純
2.「ニューヨーク・シンフォニック・アンサンブルジョイントコンサートに参加して」……126
中村　桂子
3.「ニューヨーク・シンフォニック・アンサンブルジョイントコンサートの合唱指導」……129
横山　　功
⑵ケニヤからのメッセージ……135
エライジャ・J・ギタオ
⑶オランダからきた柔道人－オランダからやって来た柔道家たちとの交流記－……139
箱島　道泰

Ⅴ　英文中文目次要旨……142

編　集　後　記

２００１年3月　第１６号

巻　頭　言……加藤　雄彦

「トピックス」
「一瞬に賭けたエアピストル」
－シドニーオリンピック・エアピストル競技出場稲田容子先生応援記－……１
沼田嘉一郎

Ⅰ　研究報告
⑴「開かれた学校経営」
～集めるPTAから、集まるPTAをめざして～ ……６
沼田嘉一郎

Ⅱ　平成12年度研修の記録 ……13
⑴「第１回教職員研修会」
「社会に背を向ける青少年の心の問題」
講　師　宮城県中央児童相談所次長　本間　博彰氏
⑵「進学CLUB講演会」……27
「生きる喜び」－ガンとの戦いにうち勝って－
講　師　千葉　勇作　氏
⑶「第２回教職員研修会」……44
「オリンピックの活躍とキューバスポーツ」
講　師　キューバスポーツ省
ロベルト・ゴンザレス　氏
⑷「指導者講習会」
「中国のスポーツ事情」　講　師　　孫　国華　氏

Ⅲ　研修旅行
⑴教養コース　中華人民共和国　中国研修旅行の記
「大きな一歩－中国５日間の旅」 ……57
佐藤　　學
⑵教養コース　英語語学研修
「英語での初めての生活はスケッチブックと」‥70
佐々木仁志

⑶英進コース　カナダ語学研修
「語学研修　犬ですら英語でしか反応しない」‥82
芳賀　良光
⑷韓国研修「韓国の古都慶州を駆けぬける」
第16回コーロン杯高校区間マラソン大会招待参加記録 ‥‥‥

Ⅰ　研究報告
⑴通信制課程における教科指導－ビデオを利用した地球環境と生物界の変化について－……3
金田　敏宏
⑵投球速度の異なる投手の投動作の比較研究
－高校野球選手を対象として－……7
佐々木順一朗
平成15年度
順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究所
スポーツ科学領域コーチング科学専門分野修士論文
指導教官　川合　武司　教授
⑶第３期㈳日本経済団体連合会
キャリア・アドバイザー養成講座受講報告書……37
佐々木　豊

Ⅱ　研修旅行
⑴外国語コース　ニュージーランド語学研修旅行
ENCOUNTERING A DIFFERENT CULTURE
「異文化との出会い」……47
永井　　惇
⑵英進進学コース　ニュージーランド語学研修旅行
「はじめてのニュージーランド語学研修」……54
石田　昌彦

編　集　後　記

２００５年３月　第２０号

巻　頭　言……加藤　雄彦

トピック
ケニアからの留学生　サムエル・ワンジル（Samuel Kamau Wanjyu）君と書道の出会い－心の修行に－……1
渡邊　章紀

Ⅰ　研究報告
⑴心豊かな生徒の育成をめざして
－合同LHRをとおして－　……5
秀光中等教育学校　ホームルーム委員会　代表
高橋　守雄
⑵宮城県高等学校商業教育研究会平成16年実務演習講習会受講報告　……15
佐々木英明・日野　　彰
⑶フォローアップ講座についての考察　……24
小野　仁也・櫻井　　順
⑷スピン軸は公転軸を目指す　……51
原　憲之介
⑸１年生の試行錯誤　……62
本木　真人
⑹宮城県加美郡色麻町　土器坂瓦窯跡の調査
－雷文縁４葉複弁蓮華文軒丸瓦を出土する色麻柵付属瓦窯跡の調査－　……78
仙台育英学園高等学校考古学研究部　古窯跡研究会

Ⅱ　平成16年度　研修旅行報告
⑴教養コース　北海道研修旅行
－有意義で事故の無い研修旅行の実践－……182
船島　敏之
⑵教養コース　中国研修旅行報告……187
瀬戸　信男
⑶秀光中等教育学校　スイスの自然環境保護への取り組み－ユーロスクールを通して感じたこと－‥193
小林　祐喜
⑷英進進学コース　ニュージーランド留学研修
－新たな発見を求めて in New Zealand－　‥‥199
高橋　美保
⑸英進進学コース　カナダ語学研修旅行……207
木村　啓子
⑹特別進学コース　カナダ語学研修
－自然を愛する国－……212
高根　　司

編　集　後　記

２００６年３月　第２１号

巻　頭　言……加藤　雄彦

トピック
青い目の剣士たち－スウェーデン研修から－……1
田中　裕子

Ⅰ　研究報告
⑴スペイン語の指導法の研究　……11
コレテス・レオン
⑵憲政初期の選挙運動の一形態　……23
井上　　祥
⑶トリプルＡ委員会の計画と取り組みについて‥‥31
トリプルＡ委員会委員長　佐々木英明
⑷MBPとKBPの比較
－国際収支理論を中心に－　……35
雫石　誠孝
⑸平成17年度
公文英語・英語Ⅰの関連性における考察　……46
高橋　美保
⑹部活動指導における一考察
－サッカー部三年間の歩み－　……70
吉井　秀邦
⑺創作脚本講習テキスト
－宮城県高等学校演劇総合研修会－　……76
渡部　　進
⑻古代東北における古瓦の研究　……83
渡邊　泰伸

Ⅱ　平成17年度　研修旅行報告
⑴特進コース
アイルランド・オーストラリア語学研修……122
日比野曜子
⑵英進コース　北海道研修旅行……134
伊藤　寿展・桜井　　順

⑶英進コース　イタリア研修旅行 ･････････････148
池口真利子
⑷英進進学コース　カナダ語学研修旅行 ････････159
石田　昌彦
⑸外国語コース　アイルランド語学研修 ････････173
岡崎　由起
⑹フレックスコース　北海道研修旅行 ･････････180
大友　健一

編　集　後　記

２００７年３月　第２２号

巻　頭　言･････････････････････････加藤　雄彦

トピック
毎日書道宮城県高校生選抜書展団体賞
－第12回展～第16回展（2002～2006）
５連覇を叶えた仲間たち－ ･････････････････････1
渡邊　章紀

Ⅰ　研究報告
⑴フォローアップ講座についての一考察 ････････13
加藤　美穂
⑵TOEIC/TOEIC Bridge教員向けセミナー
－「高校における活用事例」－2006－仙台に参加して－ ･･････････････････････････････････34
小野寺朋子・日比野真奈
⑶法律学の学問的特殊性
－その概念形成の仕方に注目しつつ－ ････････37
伊藤　剛
⑷特別進学コース　プラン2000実施報告
－平成16年～18年度の取組について－ ･･････44
倉橋　真司

Ⅱ　平成18年度　研修報告
⑴英進進学コース　カナダ語学研修 ･････････････61
相良　信恵
⑵英進進学コース　北海道研修報告 ･････････････69
渡邊　章紀・文屋　祐介
⑶英進進学コース　英進コース研修
－膨大な歴史・文化の都イタリアを訪ねて－ ････94
佐竹　伸彦
⑷外国語コース
アイルランド・ドイツ　語学研修 ･･････････････109
岡崎　由起
⑸フレックスコース　北海道学研修 ･･････････････117
１班（男子）･････冨栄　博行
２班（女子）･････島倉　尚子
⑹秀光中等教育学校
「2006ユーロスクール」実施報告 ･･････････････127
前半･･････････････････････船越　總眞
後半　ダブリン班･･････････････千葉　　浩
レンヌ班･･････････････････石田真理子
エジンバラ班･･････････････脇　　淳
⑺通信制課程　異文化体験ハワイ研修 ･･････････156
大竹　聡美

編　集　後　記

２００８年３月　第２３号

巻　頭　言･････････････････････････加藤　雄彦

トピック
「仙台育英中学校創立記念誌」の発見とその内容について
―戦火を超えて残った大正12年２月発行の記念誌―
･････････････････････････1
渡邊理律子

Ⅰ　研究報告
⑴高等学校における日本思想を扱った学習指導について
―保科正之の思想と会津を事例として― ･･････7
倉橋　真司
⑵外国語コース１年生におけるPLPへの意識調査と家庭学習について ･･････････････････････････18
北村　悦子

Ⅱ　平成19年度　研修報告
⑴英進コース　北海道研修旅行報告 ･･････････････44
小野　仁也・及川　尚彰
⑵特進・外国語コース
2007年アイルランド・ドイツ語学研修 ････････48
浅利　正雄
⑶フレックスコース　北海道学研修報告 ････････55
大岩　和良
⑷秀光中等教育学校
①グリーンスクール研修報告 ･･････････････････60
千葉　広高
②－１　2007ユーロスクール実施報告（前半）････66
千葉　　浩
－２　アイルランド・ダブリン班（後半）松田　万理
－３　フランス・レンヌ班 ･･････････････小林　祐喜
－４　参加生徒レポート
⑴初めてのヨーロッパ･･････････岩本　怜央
⑵私が感じたヨーロッパ･･････川岸　瑞歩
③第４学年自由研究論文　京都実地研修報告 ････103
芦立　俊雄・他
⑸通信制課程　異文化体験ハワイ研修 ･･････････131
新田　玲子

編　集　後　記

２００９年３月　第２４号

巻　頭　言･････････････････････････加藤　雄彦

トピック
「グリーンフィールド」･･････････････････････････1
吉井　秀邦

Ⅰ　研究報告
⑴平成20年度　第47回東北地区私学教育研修会報告 ……4
石田　昌彦
⑵第47回東北地区私学教育研修会報告 ……7
小林　祐喜
⑶小論文指導の着地点はどこに設定すべきか ……12
三浦　宗隆
⑷全国音楽教育研究会高等学校部会全国大会宮城大会報告 ……19
熊原　裕美
⑸国語教育における課題
－国語教育研修会に参加して－ ……22
島倉　尚子
⑹日本史の教材研究の試み
－「城下町」の場合を例として－ ……37
作間　克彦
⑺高校生における携帯電話の利用について
－フレックスコース１年生の調査から－ ……43
後藤　有希
⑻仙台市安養寺下瓦窯跡調査報告
－陸奥国分寺・同尼寺創建期の瓦窯跡－ ……47
渡邊　泰伸

Ⅱ　平成20年度　研修報告
⑴英進コース　北海道研修旅行報告 ……245
（前班）赤間由樹子
（後班）秋葉寿太郎
⑵特進・外国語コース
2008年アイルランド・ドイツ語学研修 ……263
小岩久美子
⑶フレックスコース
①北海道学研修報告 ……280
（男子）……高階　公
（女子）……高橋　葉子
⑷秀光中等教育学校
①グリーンスクール研修報告 ……296
田添万智子
②ユーロスクール実施報告 ……301
前半（スイス・ジュネーブ）……庄司　昌弘
後半（アイルランド・ダブリン）……木田智恵美
前半（イタリア・ローマ）……本木　真人
後半（フランス・レンヌ）……牛渡　純
⑸通信制課程　異文化体験ハワイ研修 ……333
新田　玲子

編　集　後　記

２０１０年３月　第２５号
巻　頭　言……加藤　雄彦

トピック
2009年「長春第十一高校」姉妹校締結訪問 ……1
赤間由樹子

Ⅰ　研究報告
⑴伝統芸能の継承に見られる教育のあり方
―ハワイ・フラにおける一考察― ……5
安住　陽子
⑵日中交流の架け橋に…　中国人就学生への取り組み ……27
岩渕　奈央
⑶理科教育の現状と今後の課題
― BU（理科）を通して ― ……35
寒河江華菜
⑷ニュース時事能力検定の授業への導入について ……38
秋葉寿太郎
⑸仙台育英学園陸上競技部（短距離ブロック）の活動報告と今後の展望 ……43
菅原　新
⑹アブソープション・アプローチについて ……47
雫石　誠孝
⑺書の楽しみ方　～いろいろな書の在り方の一考察～ ……50
渡邊　章紀

Ⅱ　平成21年度　研修報告
⑴英進コース　北海道研修旅行報告 ……71
早坂　憲人・高根　司
⑵外国語コース　韓国ソウル研修報告 ……79
青木　康博
⑶特別進学コース・外国語コース
ハワイ語学研修旅行報告 ……84
庄司　昌弘
⑷フレックスコース（多賀城校舎）
韓国ソウル研修旅行報告 ……95
阿部　綾子
⑸フレックスコース（宮城野校舎）
①北海道学研修旅行報告（女子）……104
池口真利子
②北海道学研修旅行報告（男子）……110
寺澤　信枝
⑹秀光中等教育学校
①第３学年ユーロスクール実施報告（前半）……118
倉橋　真司
②第３学年ユーロスクール実施報告（後半）……128
小岩久美子
⑺通信制課程　異文化体験ハワイ研修 ……131
新田　玲子

編　集　後　記

２０１１年３月　第２６号
巻　頭　言……加藤　雄彦

トピック
I-LION HAWAII SCHOOLにおける
ソーシャルスタディーズがめざすもの ……1
安住　陽子

Ⅰ　研究報告
⑴西洋倫理思想史におけるプラトニック・ラブ（エロス論）の系譜　―アンリ・ベルクソンの説を中心に―
……10
土屋　靖明
⑵高校野球の犠牲バントに関する一考察　……15
横山　　将
⑶育英祭での第２学年演劇上演報告　……22
河内　実華
⑷私の考える理想的な授業
～Brush Upを通じて感じたこと～　……32
髙橋こずえ
⑸気化熱を利用した燃焼実験と冷却実験　……36
相原ゆり子

Ⅱ　平成22年度　研修報告
⑴英進進学コース　第２学年北海道研修旅行報告
……39
山本　尚武
⑵外国語コース　2010年度TOEICエッセイコンテスト３位入賞について　―報告―　……49
鹿野　　洋・高橋　智子
⑶特別進学コース　ハワイILHA語学研修……51
石山かおり
⑷フレックスコース（多賀城校舎）
北海道学研修旅行報告　……62
千葉　陽子
⑸フレックスコース（宮城野校舎）
①北海道学研修旅行報告　……96
千葉絵美子・庄子　由美
②沖縄学研修旅行報告……101
小石純之介・佐藤　飛鳥
⑹秀光中等教育学校
第３学年ユーロスクール2010報告
①前半（９月６日～10日）スイス～イギリス‥105
石田真理子
②後半（９月11日～17日）フランス　……117
脇　　淳
⑺通信制課程　異文化体験ハワイ校研修報告‥‥134
新田　玲子

編　集　後　記

２０１２年３月　第２７号

巻　頭　言……加藤　雄彦

トピック
仙台育英獅子太鼓部 ― ダボス会議に参加して ― ‥1
高橋　葉子

Ⅰ　研究報告
⑴教育リーダーシップ理論における「同僚性」の理論とその実践的意義 ……7
石田真理子
⑵国語教育における文学的文章の読解
― 短歌を題材として ― ……17
鈴木　正明
⑶外国語コースにおける外国語指導についての考察
……20
小野　真弓
⑷本校における理科の指導について
― Brush Upを通しての一考察 ―　……26
井上　晶子

Ⅱ　平成23年度　研修報告
⑴英進進学コース
①第２学年北海道研修旅行報告　……29
髙橋　麻憂
②2011年度TOEICエッセイコンテスト特別賞受賞について（報告）……39
鹿野　　洋・岩渕　奈央
⑵外国語コース　ILHA研修に向けての準備と研修報告
……41
髙橋　美保・安住　陽子
⑶特別進学コース
①PLAN2000 山形疎開学習報告……65
髙橋　真理
②第２学年校外研修旅行報告　……73
鈴木　和弘・伊藤　信男
山下　秀範・小山　　格
⑷Tフレックスコース（多賀城）北海道学研修旅行報告
……82
後藤　有希
⑸Mフレックスコース（宮城野）沖縄学研修旅行報告
……89
佐藤　　絢
⑹秀光中等教育学校　第２学年ILHA研修報告 ‥‥96
安住　陽子・須江　　航・前澤　絵菜
⑺通信制課程　異文化体験ハワイ研修報告……106
安藤　清一

編　集　後　記

２０１３年３月　第２８号

巻　頭　言……加藤　雄彦

トピック
秀光・特進共同理科実験講座「サイエンス・コ・ラボ」
……1
千田　芳文
第１回New York Shukoh Academy（NYSA）実施報告
……12
小林　祐喜

Ⅰ　研究報告
⑴地理の授業での工夫　……21
鈴木　和雄

⑵英進進学コースⅡ類における高度IT教育について
……29
日野　彰
⑶外国語コースの特色を生かした授業
～日本伝統文化の発表活動を通して～　……34
松田　万里

Ⅱ　平成24年度　研修報告
⑴英進進学コース　第2学年北海道研修旅行報告‥45
三浦　宏明
⑵特別進学コース
①ILHA研修 ……58
河内　実華
②京都研修旅行　……69
神谷　章嗣・三浦　仁志
⑶Tフレックスコース（多賀城）沖縄研修旅行 ‥‥75
伊藤　寛・千葉　陽子
⑷Mフレックスコース（宮城野）沖縄学研修旅行‥80
安部　恒俊
⑸秀光中等教育学校　第2学年　ILHA研修 ……94
遠藤　祐太
⑹日中国交正常化40周年記念事業　仙台育英学園
高等学校通信制課程　北京研修報告　……99
安藤　清一

編　集　後　記

２０１４年3月　第２９号

巻　頭　言……加藤　雄彦

トピック
インドネシア研修生の本校での短期研修について ‥1
新井　真未
第4学年　NYSA2013実施報告　……12
小岩久美子

Ⅰ　研究報告
⑴化学部の活動　……23
讃岐　果林
⑵情報科学コースに向けての取り組みについて‥‥33
島倉　尚子・庄司　邦彰
遠藤　誠・日野　彰

Ⅱ　平成25年度　研修報告
⑴英進進学コース
ILHA研修報告　……41
佐々木真野
第2学年北海道研修旅行報告　……54
及川　まり・本多　華菜
⑵特別進学コース　関西校外研修報告　……66
神谷　章嗣
⑶Tフレックスコース　沖縄研修旅行報告　……72
赤間由樹子・林田　茂・芳賀　賢祐
古田　夕子・二瓶　巧
⑷Mフレックスコース　沖縄研修旅行報告　……76
佐藤　優人
⑸秀光中等教育学校　ILHA研修 ……85
下浅　雄大
⑹通信制課程　広域通信制課程沖縄研修報告　‥‥95
戸崎　亮司

編　集　後　記

２０１５年3月　第３０号

巻　頭　言……加藤　雄彦

トピック
広域通信制課程　ILC沖縄東北研修旅行報告　……1
ICL沖縄　與那城慧太
国際バカロレア・デュアルプログラム（IBDP）導入について ……7
外国語コース　高橋　郁夫

Ⅰ　研究報告
⑴イマージョン授業（国際バカロレア準備）……10
外国語コース　ジェームズ・ドクターマン
⑵戦時期における「仙塩地方開発総合計画」（いわゆる金森構想）の登場と展開　……23
特進コース　雲然　祥子
⑶河川流域における遺跡動態の研究　……30
英進コース　佐々木　悟

Ⅱ　平成26年度　研修報告
⑴特別進学コース
関西校外研修旅行　……46
髙橋　真理
⑵情報科学コース
第1学年　会津研修報告書　……52
正木　智也
第2学年　校外研修報告　……57
千葉　陽子
⑶外国語コース
第2学年　ILHA研修報告 ……63
小野　真弓
⑷英進進学コース
ILHA研修報告 ……72
熊坂　治平
⑸秀光中等教育学校
秀光16期生　第4学年NYSA2014実施報告‥‥84
石田真理子
第2学年（18期生）ILHA研修報告……93
阿部　広大
⑹通信制課程
広域通信制課程沖縄研修旅行……105
ILC青森　竹ノ子千春

Ⅲ　その他
⑴日本・キューバ友好400周年交流事業　……114
外国語コース　岩渕　奈央
Tフレックス　白岩　幸浩

編　集　後　記

２０１６年3月　第３１号

巻　頭　言……加藤　雄彦

トピック
創立110周年記念講演
国際人育成のための提言～ILHAの実践を通して　‥1
ILHA（校長）　アール・大川

Ⅰ　研究報告
⑴数学同好会の活動 ……9
特別進学コース　佐藤　璽
⑵IB DP（国際バカロレア・ディプロマプログラム）に関する生徒の振り返り　……14
外国語コース　ジェームズ・ドクターマン
ケリー・ウィンター
高橋　郁夫
⑶3DCGゲームソフト作成　……27
情報科学コース　遠藤　誠
日野　彰

Ⅱ　平成27年度　研修報告
⑴特別進学コース　関西校外研修旅行 ……32
菅野　直幸
⑵情報科学コース　沖縄研修旅行報告　……37
山田　大
⑶外国語コース　ハワイ研修報告　……42
石田真理子
⑷英進進学コース　沖縄研修報告　……52
北村　悦子
⑸フレックス・技能開発コース
サッカー部女子沖縄遠征・交流会　……66
林田　茂
⑹秀光中等教育学校
NY研修報告 ……70
本田　朋
ハワイ研修報告　……77
阿部　広大
⑺広域通信制課程
沖縄研修旅行　……89
ILC青森　加藤　宏明
職場体験実習報告　……98
ILC沖縄　照屋　恵美

Ⅲ　東北地区私学教育研修・ブロック別指導者研修報告
⑴教育課程（私学教育）……111
秀光中等教育学校　坂内　玲子
⑵生徒指導（私学教育）　……114
フレックスコース　白岩　幸浩
⑶進路指導（私学教育）　……116
秀光中等教育学校　倉橋　真司
⑷道徳教育（ブロック別）……119
フレックスコース　渡邊　章紀
秀光中等教育学校　小林　祐喜

編　集　後　記

２０１７年3月　第３２号

巻　頭　言……加藤　雄彦

トピック
探究講座TTTチャレンジの成果…… 1
特別進学コース　神谷　章嗣
孔子課堂の可能性…… 7
外国語コース　鈴木　茂幸
国際バカロレア受講生徒の学術的論文　……13
外国語コース　石田真理子

Ⅰ　研究報告
⑴文芸部の活動について　……23
特別進学コース　下田真奈美
⑵英進進学コース英語科研究報告　……27
英進進学コース　熊坂　治平
⑶国際バカロレアと日本のカリキュラム：２つは両立できるのか　……31
秀光中等教育学校　ケリー・ウィンター
笠原　千尋
⑷IB生物におけるアクティブ・ラーニングの事例研究
……36
外国語コース　ジェームス・ドクターマン
笠原　千尋

Ⅱ　平成28年度　研修報告
⑴特別進学コース　関西校外研修旅行　……43
齋藤　美咲
⑵外国語コース　ハワイ研修報告　……48
赤間　ゆき
⑶英進進学コース　沖縄研修報告　……57
佐々木正人
⑷フレックス・技能開発コース
沖縄研修旅行（フレックスコース女子）……66
杉田　愛
沖縄研修旅行（技能開発コース）……71
小野　仁也
⑸秀光中等教育学校
NYSA 2016 実施報告 ……75
伊藤　沙絵
ハワイ研修報告　……81
倉橋　真司

⑹職員研修報告 ……90
多賀　努
Ⅲ　その他
⑴広域通信制課程ILC青森校の状況報告 ……104
ILC青森所長　三笠　勝彦
⑵職業調査とジョブミーティング―12職種の職業に関する調査とその発表活動を通して― ……115
情報科学コース　志賀　貞昭
⑶公文式学習（国語）実践の成果 ……119
フレックスコース　島倉　尚子

編　集　後　記

２０１８年3月　第３３号

巻　頭　言 ……加藤　雄彦

トピック
高等学校通信制教育の質の向上について …… 1
村上　淳
剣道部サイパン遠征・文化交流活動報告 …… 5
加藤　裕之
IBにおける教科指導実践について ……12
Enabling and Disabling Factors in Implementing International Baccalaureate Programmes in Japanese Secondary Schools: Curriculum, Pedagogy and Assessment
Kerry Winter

Ⅰ　研究報告
⑴Surface活用に向けた授業における取組について ……20
情報科学コース　坂入　崇紀
日野　彰
⑵IB DP（国際バカロレア・ディプロマプログラム）デュアルランゲージで行うTOK授業 ……24
外国語コース　石田真理子
⑶教科BU研修会について ……27
教科教育センター　板垣　徳昭

Ⅱ　平成29年度　研修報告
⑴秀光中等教育学校　カナダ研修報告 ……36
小保内陽大
⑵情報科学コース　沖縄研修旅行報告 ……51
加藤　芳己
⑶フレックス・技能開発コース　沖縄研修報告 ……56
多賀　努
⑷英進進学コース
沖縄研修報告 ……63
渡邉　光稀
韓国研修報告 ……71
狩野　常俊
⑸外国語コース　ハワイ研修報告 ……78
岩渕　奈央
丹野まさよ
⑹職員研修報告 ……89
雫石　利光
Ⅲ　その他
⑴ILC沖縄校の状況報告 ……97
ILC沖縄所長　山内　一秀
⑵演劇部の活動について ……111
特別進学コース　赤間　ゆき

編　集　後　記

２０１９年3月　第３４号

巻　頭　言 ……加藤　雄彦

トピック
授業改革：協働学習の可能性 …… 1
Transforming the Culture of Teaching and Learning: An emerging collaborative learning community
Kerry Winter
仙台育英孔子課堂活動報告 …… 12
孔子課堂長　板垣　徳昭

Ⅰ　研究報告
⑴デュアルランゲージで行うTOK授業のケーススタディ―PCK（授業を想定した教科内容知識）を意識したバイリンガル授業― …… 23
外国語コース　石田真理子
⑵特進コースの英語4技能向上対策：「オンラインWeblio英会話」を活用したe-learning学習について …… 29
特別進学コース　伊藤　需
⑶仙台育英学園生き生き教室「√２ってなに」 …… 34
フレックスコース　雫石　利光
⑷教科BU研修会について …… 43
教科教育センター長　板垣　徳昭

Ⅱ　平成30年度　研修報告
⑴秀光中等教育学校　カナダ研修報告 …… 65
笠原　千尋
⑵特別進学コース　関西校外研修報告 …… 78
髙橋　真理
佐々木正人
⑶情報科学コース　沖縄研修報告 …… 84
船越　正志
野坂　有生
⑷フレックス・技能開発コース
沖縄研修報告（男子） …… 90
西山　大樹
沖縄研修報告（女子） …… 93
石川美紀子
⑸英進進学コース
沖縄研修報告 …… 96
藤倉　善将
台湾研修報告 ……108
熊坂　治平

⑹外国語コース　ハワイ研修報告……113
松崎　希莉
下浅　雄大
⑺仙台育英孔子課堂　第２回北京語学研修報告‥120
平成29年度孔子課堂長　鈴木　茂幸
⑻職員会津研修報告……123
フレックスコース　雫石　利光

Ⅲ　その他
ILC青森校の状況と社会人養成講座について ‥‥128
ILC青森所長　三笠　勝彦

編　集　後　記

２０２０年３月　第３５号

巻　頭　言……加藤　雄彦

トピック
eスポーツ部の設立及びeスポーツ講座と今後の展望について……1
情報科学コース　村上　淳
日野　彰

Ⅰ　研究報告
⑴SDGsを意識した授業づくり ……6
秀光コース　菊地恵美子
⑵新学習指導要領に向けた英語４技能の指導について……14
特別進学コース　新谷　仁
伊藤　需
安部　宏紀
⑶英進進学コースにおける英語課外学習……21
英進進学コース　木村　汐里
⑷IB授業実践例 ……23
外国語コース　小湊　陽
⑸「せんだいまなびや」の導入……33
技能開発コース　宮浦　靖次
⑹教科BU研修会について ……52
教科教育センター長　板垣　徳昭

Ⅱ　令和元年度　研修報告
⑴秀光中等教育学校・秀光コース（高校）
カナダ研修報告　“Canada Study Abroad Trip”……83
Kerry Winter
京都研修報告……92
加藤　隆寛
横山　佳絵
⑵特別進学コース　関西校外研修報告……97
庵原　直樹
⑶情報科学コース　沖縄研修報告……102
村　貴之
（4）フレックス・技能開発コース
九州研修報告……107
西山　大樹
九州（長崎）研修報告……110
寺澤　信枝
⑸英進進学コース　台湾研修報告……116
五十嵐春祐
⑹外国語コース　ハワイ研修報告……120
川村くるみ
⑺教職員研修会報告（講演会）
（「学習障害・発達障害について」）
フレックスコース……126
村岡　信章

Ⅲ　その他
ILC青森における本年度の活動状況報告 ‥‥132
ILC青森教頭　丸山　裕治

編　集　後　記

２０２１年３月　第３６号

巻　頭　言……加藤　雄彦

トピック
秀光コース20期生　TOK実践報告と振り返り ‥‥1
TOK担当　加藤　隆寛
「国際バカロレアMYPとDPを活用した中高一貫教育の取組」……5
仙台育英学園IBチーフコーディネーター
高橋　郁夫

Ⅰ　研究報告
⑴秀光中学校・秀光コース　オンライン授業実績報告……10
秀光中学校ICT推進委員　小保内陽大
⑵『先輩、教えて下さい！』～ICT活用からOn-Line授業へ……18
特別進学コース　御代　力夫
⑶情報科学コース　デジタル教科書における取り組みについて……25
情報科学コース　金福　瞭
加藤　芳己
⑷公私間教員交流研修報告
外国語コース　小林　祐喜　28
仙台二華高等学校　上島　佐輔　35
⑸ICT推進の取り組みについて ……37
英進進学コース　五十嵐春祐
⑹ICT推進の取り組みについて ……41
フレックス　技能開発コース　山田　大
フレックス・技能開発コースにおける広域通信制併修の取組……43
フレックスコース　小原沙希子
学級だよりの有効性～学級だよりを核にした学級経営の研究～ ……50
技能開発コース　舘和　廣

Ⅱ　令和２年度　研修報告
⑴英進進学コース
　地域探求研修報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 71
尾林さつき

Ⅲ　その他
⑴Office365・Zoomオンライン授業研修報告　・・ 79
秀光コース　小保内陽大
情報科学コース　日野　彰
⑵数学問題間の類似性認識に関する考察～数学における問題づくりを通して～・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 89
広域通信制課程ILC沖縄　新里　孝雄
スクーリングにおける理科実験の意義－ILC沖縄の理科実験教室－・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 92
広域通信制課程ILC沖縄　渡邉　正俊

編　集　後　記

２０２２年３月　第３７号

巻　頭　言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・加藤　雄彦

トピック
国内初BTECセンター開設プログラムを英進コースに導入・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
BTECセンター長　千葉　慎

Ⅰ　研究報告
⑴令和３年度３・４学期　秀光コース１学年
総合的な探究の時間実践報告　－遠田郡美里町の総合的研究－　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
秀光コース　倉橋　真司
⑵令和４年度実施の「新学習指導要領」に向けての取り組み
＝「観点別評価」のための「評価規程」改訂と「評価システム」作りについて＝・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
カリキュラム・マネージャー　小松　敦
⑶情報科学コースにおけるslackの活用について
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
情報科学コース　吉野　裕貴
能動的学修におけるICT活用・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
情報科学コース　佐々木りせ
⑷外国語コースにおける韓国語課外活動報告・・・・ 33
外国語コース　尹　惠靖
⑸英進進学コース　ICT推進の取り組みについて
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40
英進進学コース　五十嵐春祐
⑹「総合的な探究の時間」におけるデジタル教材の活用について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 42
フレックス　技能開発コース　佐藤　佳蓮
⑺保健体育科の観点別評価についての研究報告・・ 46
技能開発コース　地﨑　大知
⑻数学の授業における教材への取り組み・・・
数学検定講座について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 48
フレックスコース　雫石　利光

Ⅱ　令和３年度　研修報告
外国語コース
　第２年次　松島SDGs探究研修報告 ・・・・・・・・ 54
岩渕　奈央

Ⅲ　その他
英進進学コース
　各教科教育センターのブラッシュアップについて
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 66
英進進学コース　金澤　瞭

編　集　後　記

２０２３年３月　第３８号

巻　頭　言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・加藤　雄彦

トピック
⑴令和４年度「東和蛍雪校舎研修」のまとめ
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
東和蛍雪校舎担当　佐々木邦治
⑵高等学校「地理総合」におけるドローンを活用した授業実践・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
特別進学コース　伊藤　恵

Ⅰ　研究報告
⑴秀光中学校・秀光コース
国際バカロレア ディプロマプログラム「言語A：文学」授業実践報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18
秀光コース　横山　佳絵
⑵情報科学コース
対面授業でのClass活用の可能性 ・・・・・・・・・・・・ 22
情報科学コース　佐々木りせ
⑶令和４年度 外国語コース
Stanford e-Sendai Ikuei 報告 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
外国語コース　今川　里菜
⑷観点別評価の実践・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35
英進進学コース　竹ヶ原孝則
⑸エナジードの導入・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38
フレックス・技能開発コース　針生　清人
⑹情報BUについて ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40
教科センター情報担当　日野　彰
⑺ICTを積極的に活用し双方向性を重視した授業
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 42
社会科コンダクター　小松　敦
⑻スラックで英作文を指導してみた！・・・・・・・・・・ 45
英語科コンダクター　御代　力夫
⑼教育×メタバースの試行から見えた成果と課題
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 51
広域通信課程　ILC青森　村上　淳

Ⅱ　令和４年度　研修報告
外国語コース
　第２年次　ハワイ研修・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 57
武田由紀子、テリー

情報科学コース
第３年次　沖縄研修旅行…… 67
武田　若葉
英進進学コース
第３年次　沖縄研修旅行…… 70
松井　有生
フレックス・技能開発コース
第２年次　沖縄研修旅行…… 76
河原愛利沙

Ⅲ　その他

編　集　後　記

編　集　後　記

新型コロナウイルスについては、感染法上の分類が５類に引き下げられ、習慣化したマスク着用は原則として個人の判断に委ねられることとなりました。感染拡大から４年、本学園においては、加藤雄彦理事長・校長先生の先を見通した英断により、学園内において、大きな感染及びその拡大のリスクを可能な限り低減するためのZoomによるリモート授業や、Classiや緊急メールの利用などICTの積極的な活用により、多くの生徒や保護者が抱えている学習や勉強の遅れなどの不安を和らげ、学園生徒が安心して学校生活を送ることができました。

今年度は、先生方の研究においても外部の教育機関や団体との共同研究や、各教科におけるBrush Up研修会も、外部からの講師を招いて実施するなど、活動の幅がコロナ前のような状態を取り戻し充実した研修となりました。

一方で、コロナ禍中に積極的に取り組んだICTなど新しい教育教材を活用した授業実践や学習支援のツールを使用した実践報告が各コースから寄稿され、研究紀要の紙面を通して共有できることを嬉しく思います。

また、本年度は、沖縄高等学校が開講し、早速、実践報告も寄せられました。仙台育英学園の新たな仲間が加わったことは、I-Challenge125に向けた新たな学校づくりの大きな布石となりました。

今回の寄稿は、先人が作り上げてきた学園生としての誇りと愛をさらに醸成できる大切な教育財産となっていきます。是非ご覧いただき、多くのご意見をいただきたいと思います。

今年度も、研究紀要の内容はClassiにアップします。全ての教職員の方々に、ご一読いただきたいと考えたからです。

今後も先生方の研究や研修の内容が生徒達に還元でき、本学園の生徒の学びがより一層深まっていくことを祈念します。ご多用中、寄稿してくださった先生方に心より感謝いたします。

研究紀要39号編集担当　　岡﨑　徹郎

発　行：秀光中学校・仙台育英学園高等学校
所在地：〒983－0045　宮城県仙台市宮城野区宮城野二丁目４－１
電　話：022－256－4141

研究紀要39号

巻　頭　言 …… 加藤　雄彦

トピック

(1) 仙台育英学園沖縄高等学校について
…… 仙台育英学園沖縄高等学校　庄司　昌弘

(2) 情報科学コースの取り組み「情報科学コースが宮城を変える」
…… 東京都市大学准教授　森　朋子

Ⅰ　研究報告

(1) 情報科学コース
「学校設定科目プログラミング授業について」 …… 情報科学コース　高橋　良太
日野　彰

(2) シジュウカラガン復活プロジェクト報告 …… 外国語コース　布施　莉彩

(3) 仙台大学大学院での授業報告 …… 英進進学コース　田辺　巧

(4) ICT を活用した授業について …… 英進進学コース　及川　まり

(5) 主体的な学びの支援ツールの有効性と数学の授業展開の研究
…… 技能開発コース　舘　和廣

(6) 教員１年目の実践と展望 …… 特別進学コース　佐藤　宏成

(7)「IBDP における ICT を活用し主体的学習を重視した授業実践」
…… 社会科コンダクター　小松　敦

(8) 令和５年度数学科ブラッシュアップ研修・研究授業報告
…… 数学科コンダクター　牛来　生人

(9) 令和５年度　ILC 沖縄　e フレックスコース　探究学習プログラムの報告
…… 広域通信課程　ILC 沖縄　與那城慧太

(10) コンピテンシー測定ツール「Ai GROW」の活用事例
…… 仙台育英学園沖縄高等学校　栗本　崇雅

Ⅱ　令和５年度　研修報告

外国語コース
第１年次　ハワイ研修 …… 鈴木　杏子
川村くるみ

情報科学コース
第３年次　沖縄研修旅行 …… 菅　光朗

英進進学コース
第３年次　沖縄研修旅行 …… 八代　杏里

フレックス・技能開発コース
第３年次　沖縄研修旅行 …… 小原沙希子

秀光コース２・１学年、秀光中学校３学年
カナダ研修報告 …… 秀光中学校 3S1 担任　伊藤　沙絵

Ⅲ　その他

総目録（第１～38 号）

編　集　後　記